

日
本
音
楽
集
団

邦楽現代

第十号 一九八〇年秋

特集 現代邦楽のレコード

邦楽器のファンに贈る日本のファンタジー！

長沢勝俊作品集

最新録音

現代センスを日本の伝統に生かした長沢勝俊の意欲作。

錦木によせて



春三題

苔草/陽炎/花吹雪
沢井忠夫(三味線)、沢井一恵(箏)

尺八協奏曲

宮田耕八郎(尺八)
田村祐男(指揮)、日本音楽集団

錦木によせて(五つの小品)

藍玉/萌黄/茜雲/瑠璃/琥珀
野坂恵子(二十絃箏)

飛騨によせる三つのレバード

歩荷/立円/杉玉
坂田誠山(尺八)、砂崎知子(箏Ⅰ)
吉村七重(箏Ⅱ)、花房はるえ(箏Ⅲ)
木村玲子(十七絃箏)

●JRZ-2577 ¥2,200

●好評発売中!!



現代邦楽の古典とも言える長沢勝俊の代表作。

人形風土記

組曲「人形風土記」
ニホボ/こけし/のあま人形/流しびな/きじうま/木うそ
子供のための組曲

日本音楽集団
●JRZ-2523 ¥2,200



さわやかな音色とともに春を告げる伝統楽器の響き。

萌春

詩曲(尺八独奏曲)/萌春(箏と尺八)/夢四重奏曲/二つの舞曲(合奏)

日本音楽集団
宮田耕八郎 ●尺八 坂田誠山 ●尺八
白根まゆ子、坂井とし子、野坂恵子、宮本幸子 ●箏
●JRZ-2558 ¥2,200



磨きぬかれた典雅な響き、長沢勝俊の個性豊かな力作。

まゆだまのうた

まゆだまのうた(尺八、箏による)/三味線独奏曲/二つの田園詩(尺八と箏、十七絃による)/飛騨(笛と打楽器のための音楽)

日本音楽集団
望月太八 ●箏 宮田耕八郎、坂田誠山 ●尺八
杉浦弘和 ●三味線 宮本幸子、野坂恵子 ●箏、笛
●JRZ-2574 ¥2,200

●尺八名曲名盤選



いま、鮮やかによみがえる伝統音楽!

鹿の遠音

尺八古典名曲集成

朝の成吉野の樂舞/空舟獅子/鹿/手拍子曲/本調/下り集/一二三舞/音楽獅子/三味線獨奏/打越/尺八/遠音
横山勝也 ●尺八 横山肇 ●尺八(曲の遠音で共演)

●JRZ-2563-64 2枚1組 ¥4,400



山本邦山が初めて都山流の本曲を集成!

寒月

都山流尺八本曲名曲集成

流里中尾都山作曲:寒月/湖上の月/若清水/夕月/木枯/紅葉/朝風/青海波
山本邦山 ●尺八 川村泰山、杉山望山、渡辺蘭山 ●尺八

●JRZ-2575-76 2枚1組 ¥4,400

文取 あやとり

この春カナダを訪れた。四月というのにオタワの町では、河岸の淀みに氷が張りつめ、雪混りの冷たい雨が降る日もあった。

北米大陸の広大な地域を国土に持つとはいっても、カナダの人々は、その領土の南端の緑りのところ、アメリカ合衆国に境を接した部分に帯状にへばりつく形に住みついていて、みたく、北からは荒蕪たる原野がのしかかって来ているようにみえる。

そんな中で、カナダの人たちは、それだからこそと言うべきなのだろう、芸術・文化をとでも大切にしている。フランスやイギリスから伝承された形のものもあることながら、新興国、カナダの独自の創造の成果を殊更に大事に育てようという姿勢が顕著にみられた。強大な隣国アメリカ合衆国の文化の波に呑み込まれまいとする気概をそこにみてとることも出来る。

カナダ政府の、民間の芸術活動に対する手厚い補助行政の中には、自国の創造活動の振興を促す施策がいろいろあり、たとえば、オーケストラには、年間の全公演作品のうち十パーセント以上はカナダの現代作品を演奏することを義務づけている。またそのための資料が完備している。完璧な作品リストが刊行されていて、各曲ごとに、編成、演奏時間、様式傾向などのデータが記されている。

現代音楽の普及のために、基礎的データが誰の手にも入りやすくしておくことは、極めて有効なことで、現代音楽の分野でも、内外の需要に応える意味で、この類の資料の完備と公開が望まれる。

(丹羽正明)

邦楽現代 第十号 一九八〇年秋 目次

文取 丹羽正明

●特集 現代邦楽のレコード

○座談会 レコードに見る現代邦楽の活動

富樫康・長尾一雄・上野晃・石田一志

○ディスコグラフィ・現代邦楽1964-1980

歌楽帖⑥ いろ 三木稔

いま、伝統音楽は 杵屋正邦

間違っているよ 日本の音が苦教育 茅原芳男

一九八〇年度前期現代邦楽の作品と演奏 心に残ったものから

木村重雄・小宮多美江・土田貞夫・長尾一雄

日本音楽集団一九八〇年度後期 定期コンサート・シリーズ・プログラム

61秋の総合定期演奏会・62定期演奏会 笛・打楽器特集
63定期演奏会 近年作られたやさしい作品を集めて

新しい邦楽を担う人たち 菊地悌子・藤倉成敏

日本音楽集団一九八〇年度西日本公演同行記

山本テルミ・久保敬義

第四回日本伝統楽器による現代演奏コンクール審査結果

邦楽現代第十号発行の機に

長沢勝俊・三木稔・野坂恵子・宮田耕八朗・田村拓男

ほうげん抄・新刊案内・新譜案内・ 団員及び団員に関するグループの動向

日本音楽協会通信

持続するアマチュア団体を目ざして 重政晃

日本音楽集団及び団員に関する今後の主な予定

1

2

8

14

19

20

22

26

30

34

42

44

49

52

53

54

特集 現代邦楽のレコード

座談会 レコードに見る現代邦楽の活動

出席者 長尾二雄・上野晃・石田二志・富樫康(司会)

最初に現代邦楽のレコード出版を総括して

富樫 本日の座談会のテーマは「レコードにされた現代邦楽」ということです。現代邦楽という言葉は適当ではないという意見もありますが、便宜上、そう言った方がわかりやすく早いです。この言葉を使わせていただきます。その現代邦楽の活動が初めてレコード化されたので、活動がいつから行われていたかということをも考えます。清水脩さんや平井康三郎さんはかなり以前から邦楽器を使って作曲活動をされていきました。しかし、どちらかというと我々の関心をひくのは一九五七年頃からなんです。その年に「邦楽4人の会」が結成されたわけです。4人の会は古典も演奏会に取り上げましたが、プログラムの後半はたいして洋楽系の作曲家に委嘱した作品を入れて初演したり再演したりして、一年に大抵春と秋の二回演奏会をやっていました。その内、今度、一九六一年に「東京尺八三重奏団」というのが結成され、それが発展して六四年に「日

本音楽集団」にエスカレートしたわけですね。尺八ばかりでなく、三味線、箏、打楽器、琵琶、そういったものも加わって、十数人のアンサンブルに発展した。その辺から非常に現代邦楽の活動が活発になってきたと言えますね。

当時はどうなるか疑問暗鬼でやっていたのが、段々活発になり、大きく成長してくるとレコード会社が目をつけるようになる。それから市場性も増して来るといふことになり、現在は一九八〇年です。二十数年間という歴史が既に経過しています。そして、今のレコード事情はかなり沢山の曲目既にレコード化されているという状態です。それからレコード化される動機が、会社の企画で行われる場合と、演奏家側の企画が先立って行われる場合と色々あるわけで、そういうことについても皆さんと討論したいと思います。長尾さんいかがですか。

長尾 私は大体、日本音楽集団ができたころから「邦楽の友」に月評を書いていました。そういう仕事を始めるまではあまり現代邦楽というものの知識がなかったんです。聞いてみておもしろかったというところが素朴な動機になって、色々聞くようになりまして。その頃、レコードを手に入れたと思います。レコードがあるかどうかを、誰にだか忘れましたが、顔見知りのレコード・ディレクターに聞いてみたら、どうも商売にならなくて……という話を聞きました。これが六〇年代はじめの雰囲気だったと思います。それから後は僕自身もいくつかのレコードの解説の一部分を担当したりして、そういうレコードが芸術祭に参加して受賞したということもありましてね。ずい分この十年ぐらゐの間に事情が変わって来たと思うんです。

ただ、ここにあるリストを見てみますと、一等最初の六〇年代頃のレコード名というのは「現代邦楽選集」であるとか、七〇年代ですが「邦楽器による現代日本の音楽」とか、そういうわりあい総合的なものを、ある珍しさに集めたアルバムのようなものから出展していますね。それから段々ひとつひとつの企画とか、一人の演奏家、作曲家の選集みたいなものへと、本格的になって来ているという感じがしますね。ただ、その間に現代邦楽の波が色々あり、一時は現代邦楽の時代は終わったみたいなことを書いて、ちょっと問題になった評論家もいましたし……。まあ、そういう状態になって、ブームという形でなして落ちついた支持を得るようになった現在、売行きが今後どう変化してゆくか、これからは今までと違った時代が来るんじゃないかという風に思っております。

富樫 このレコード界の顕著な現れとしては、まとまったアンソロジー的なレコードで一九六六年に芸術祭参加としてビクターから出た「武満徹の音楽」の中に、ヘンクリブスが含まれていましたね。大きなアルバムの中の一枚ですけど、わりと問題だったと思います。それからその後、一九七〇年に現代邦楽ばかりを集めた大きなレコード・アルバムが、共に芸術祭参加で二つ出ました。「日本音楽集団による三木隆の音楽」と「響」です。RCAから出た「響」は和楽器による現代日本の音楽という副題がついて、十三

人の十三曲、コロムビアから出た「日本音楽集」による三木稔の音楽」は、三木の音楽ばかり十曲で、これが一九七〇年の芸術祭大賞を得ています。あとで聞いた話では、このRCAとコロムビアの両方とも四枚組レコードですが、ほとんど同時に三木稔に監修を頼まれたそうで、彼としては両方引き受けるわけにいかないの、「響」の方は降りたという話です。

その後、七一年に出たのが4人の会の「現代に生きる日本の音楽」。それから最近では七九年にカメラータ・トウキョウから出た「野坂恵子・三木稔——二十絃の世界」。

上野 アルバムの大きいもので最近に出たのはそういうところですね。

改めてリストにしてみると、意外と沢山出ているのに驚きました。それも一九七〇年代に入るや否や俄然多くなってきた。つまりレコード制作の増加がひとつのパロメータで、この辺から現代邦楽が特異さから脱してエトスの方向へ歩きはじめた証になるのではないですか。

響 とにかく芸術祭参加でこれだけの大きなレコードが何回かくり返し作られたということは、非常に邦楽界を刺激したことは確かですね。それから個別に啓蒙する動きもあります。

石田 啓蒙ということを含めて見るならば、筑摩書房がビクターと提携して十二巻から成る「邦楽大系」を作り、その別

巻で七二年春に「現代邦楽」を出しましたね。この大系は古典をジャンルごとに整理してシリーズ化していましたから、別巻とはいえ「現代邦楽」もジャンルとしてきちんと入れて席を与えられたのだと感じました。とくに、長尾さんが加わっていらっしやる座談会出席メンバーは他にこの巻編集の岸辺成雄さん、中能島欣一さん、三木稔さんでしたが、これは「新日本音楽」以降当時までのいわゆる現代邦楽の歩みを歴史的に論じ、総括したすぐれた内容でした。

上野 最初は芸術祭が主で、ということでは、企画性が優先して、総合的なアルバム制作に力が入られなかったけれども、それはまだ評価が甘かったというが、大雑把だったからともいえるでしょうね。

響 「響」の中には重要な作品も含まれてはいたけれども、未だちょっと……。上野 一応そろっている。いや、作曲家の雁首がそろえてあるといったほうがいいかもしれないけれども。現在から見ると、やはり納得できないところもあって、当然入るべきものが落っこっていたり。

響 選曲の点で吟味が足りなかったのでは……。その他に広瀬量平の八尺八寸969V、あれは表が尺八と弦と打楽器のコンビで、裏が尺八のソロと二重奏みたいなもの。あれも貫に入りませんが、とても評判よかったレコードです。上野 当時としては意表を突いたアルバムでした。

響 それですぐ売り切れて、その後再プレスしましたね。

上野 どこからか持ちこまれたものかわかりませんが、大手がやる前にクラウン・レコードが盲点を突いた恰好の、興味深いレコードでしたね。

石田 「響」についてつけ加えたいことがあるのですが、僕はこれを大学の教員養成クラスの教材で使ったことがあるんです。今、高校の音楽教育は「表現」と「鑑賞」の二本柱になってきています。が、なかでも「鑑賞」が重視されていて、それも泰西名曲というだけでなく邦楽や近・現代音楽など幅広い鑑賞がうたわれています。当然、現代邦楽にも場を与えられていると解されるわけです。この

「響」の場合、小アンサンブル曲が主体ですけど、尺八デュエットがあれば太極協奏曲もあるといういろいろな楽器にスポットがあてられていますし、先程選曲が未整理といわれましたが、そこがえって様々なイデオロムの作品が並んでいるといえ、適宜選択するには大変便利なレコードとして思い、使ったりしたんです。

響 いわゆる西歐音楽の場合は、例えば近・現代音楽といっても歴史にバロックやルネサンスから始めて行って、ここに現代があるといい、その音楽の下準備はできます。楽器について日常的な常識で済むようなことがありますからね。ところが邦楽に関してはどうもそこがうまくいかない。いわゆる現代邦楽を伝統邦

楽の線の上で説明することもむずかしいし、かといって音楽史から語れば楽器のことなどがもれてしまうので。

長尾 そうですね、邦楽の場合恐らく確かな現代曲から選んで行くということが、教育的にはわかりやすいでしょうね。

石田 だから、歴史的とか体系的というより身近な音楽、手近な入口にあたる音楽が大事だと思うのです。ところが教材として名前が並んでいるものは限られているんですね。例えば、武満徹のノヴェンバー・ステップスなどは参考曲として名前が、やたらと出てきます。このリストにも再発表が沢山あるみたいですけど、そういう一部を除いては情報の少なさがいえます。しかも雑誌にレコードの月評を書いてきてますが、雑誌社がレコード

会社の邦楽関係の部門とコンタクトがなくて、集められないレコードというのが沢山あるわけです。ですから邦楽系の人たちのレコードはレコード雑誌の記事に出る機会がなく、レコード愛好家も買う術がわからないでしょう。その意味ではもっともっと普及すべき術があるんじゃないかと思うのです。

響 我々批評する側からすると、高度な作品を要求するものだから、一般の人から言わせると難しいという声も起りがちです。だから入門的な一般の人たち、楽器を自分で演奏してこれからやっていこうという人にとっては、やさしい曲も必要なのだと思います。

石田 やさしいイデオロムの現代曲とい
うか……。

富樫 自分で弾ける曲、例えば長沢勝俊

現代邦楽の聴衆、レコードの聴き手について

長尾 邦楽の聴き手は、実際に邦楽を習

っている人、あるいは踊りをやっている
人とかが主ですが、現代邦楽の場合は聴
衆が楽器を習っていない人も非常に多い。

そういう意味で音楽的に純粋に響く曲
みたいなものもレコードに出されるだろ
うし。しかしまた一方で富樫先生がおっ

しゃったように、楽器を弾く人を対象に
しなくてはならないということも、現実
的にはあります。それに対する批判は非

常にありますけども、やはり無視はでき
ないですよね。

富樫 現代邦楽のお客さんというのは、
自分が演奏する人が過半数になるでし
うか。

上野 多くなりつつあるだろうけども、
むしろそうでない人がかなりいると見る
んですが。現代邦楽の場合、それがひと

つの期待でもありますね。

長尾 伝統邦楽に比べればそうでしょう。
石田 さっき現代邦楽レコードは七〇年

代に入って俄然増えたということだった
けども、リストを見ると実際には七〇年
代前半にかなり限定されているのではな
いですか。

長尾 それはもしそうだとすると、演奏

だとか、三木健も作っていますけどもね。
そういうレコードもやはり、ないがしろ
にできませんね。

会の過熱度というのとも関係があるみた
いですね。やはり七〇年代前半の演奏会

というのが、現代邦楽にとって非常に
おもしろい……。後半になると成熟度が出
てくるというか、非常によいものが出て

いる一方で、熱度は稀薄になってきてい
るということがありますね。

石田 さっき、ちょっとおっしゃいまし
たね。現代邦楽の時代は終わったとか何と
か。

長尾 ああ、あれはね、小島美子さんが
段階的に言っていることで、実際にはあ
のALMレコードの西島昭子レコード

評の中で、一ツレズがある。これは西
島のアルバムが次の時代をさし示す新し
さに満ちているという積極的な評価で、

新しさを肯定した言い方なのですが、そ
の前にも、「現代邦楽は終わった」と言っ
て（編註「音楽芸術一九七五年九月号」）

一部の作曲家を非常に怒らしたんです。
これはブームの推移を歴史的に規定しよ
うという意識があるのでしょうか。

上野 終わったとか曲角だとかという
何かかっこよさがあるけれども、あまり
にしばしば安易に言われすぎて、狼がき

た——みたいですよ。

石田 それからさきほど富樫先生が何篇
か大きなレコードのアルバム名をおし
やいましたけど、ほとんどは芸術祭参加

という形です。これはある定められ
た時期に限られた状況で作られるという
ことであって、日常化したレコード制作

の中に、安定した歩みをもってきたとは
言いかねるということなんではないかと
いう感じもするんですけどね。さっきの

七〇年代前半と言ったのは七〇年代の後
半もあるけども、後半というのは芸術祭
参加という大きなもののしか、ほと

んどないんじゃないかということ。す
て、芸術祭参加のために企画を起す、
あるいはせつかく立派なアルバムを作

たから芸術祭に出す、いずれにしてもそ
れらは比較的目的がやすいけれども、そ
うした間にも、もっと焦点を絞ったク

リティの高いものが、地味ながらある間
隔で出ている。それというの、こうい
うものを手がけるディレクターが育っ

きたということでしょう。ディレクター
の批評をもったレコードが、この現代邦
楽の世界にも生まれてきたと思います。

七〇年代の前半というのは、長尾さん
がおっしゃったように、レコードでも、コ
ンサートでも、現代邦楽の最初のピーク

であったのは事実で、洋楽の聴衆でもな
い、邦楽の聴衆でもない、第三の聴衆が
育ってきたように見えた時期です。

そういう過熱状態が冷めていて、やはり
これからの第二期の充実がなくては……。

長尾 この間、野坂恵子さんと話をする
ことがあって。そうしたら大阪の聴衆は
東京と違うんですってね。今でも、七〇

年代とは違うけども、非常に充実した
なものがあるそうですよ。その時野坂さ
んの話に出て来たのは、純粋な聴衆とい

うより、合奏する団体というのがどの
んできてきて、そういう人たちが非常な
熱を持って聞きに来るという風にぼくに

は受け取れたし、そうした演奏する聴衆
の背後に、演奏しない聴衆の更に大きな
厚い層というのを感じました。

大阪の聴衆は、あのいわゆる合唱運動の
根つき方のような形で発展してゆくかも
しれないという印象を受けました。

上野 恐らく大阪をはじめとして、地方
にゆくとそうなんではないですか。

長尾 東京は何となくその場その場のス
ノッブみたいな感じ……。しかし熱々と
した聴衆が実はいます。地方では過熱が

長尾 延賓という客観的な立場で見たり
聞いたりするばかりではなくて、実践派、
そういうのが多いんですね。

長尾 日本の楽器を合奏して楽しむとい
うのは、戦前の東京も含めて寧ろ曲とか謡
いとか浄瑠璃とかを色々な所で、色々な

階層でやっていたわけで、その傾向が現
代曲に復活しているという風にみてもい
いし、どちらにしても前向きに捉えてい

石田 逆に言うと、大手のレコード制作



富樫康氏

というのは今のところ東京に限られていて、東京の聴衆を中心に企画されているといえるかもしれませんね。もっと地域的な売れ行きの内容をよく分析した上で、新たなプログラム作って、吹き込んでゆくということを考えては。

長尾 そうですね、伝統邦楽の楽曲などの場合は、京都、大阪で作られ、地歌は

レコードの功罪 あれこれ

上野 それからライブ・コンサートのお動きと全然関係なく、レコードだけに限られた現象というのはないでしょうかね。

大体が生と密接に関連していると思うけど。

石田 例えば三木さんの作品の中のハムは、コロムビアからの委嘱作品ですね。あの様に、レコード会社が企画を立てた時に作品を委嘱して、レコード自体をひとつの発表の場にするという、そういうケースがありますね。それが非常に積極的だった時期というのがあって、このところあまりそれが驚かない。昨年の「二十絃争の世界」ではやはり三木さん

向うが「地」、即ち本場ですから。それはそれなりに特色が出ていますけど、売れ行きという面ではどうでしょう。案外関西のレコード・ファンというのは東京のレコードしか聴かない、地方色のあるレコードには冷淡なそういう現象があるかもしれないけど。

のハ東からVがカノエータの委嘱でした。

富樫 ビクターで作った諸井誠のハ有為転変V、あれも会社の委嘱でしたね。ステレオと4チャンネル盤とがあって、ステレオの方は、奥が宮下秀列のハ竹林精告Vで、4チャンネルの方は奥がハS.M.のためのシンフォニアV、あれも新しい試みとして評判のレコードでしたね。

上野 あれは、どちらかというとライブよりもスピーカーを通しての方がエフェクトの大きい音楽だと思うけど、最初からオーディオ的効用を計算に入れて書いたんですね。



長尾一雄氏



上野晃氏



石田一志氏

長尾 大体、宮下さんの場合はNHKでそういうオーディオ的なものを要求しながら作曲を依頼するっていうケースが続いたし、演奏会でもこの前のハ蒼空の響Vなどでも演奏会用にアレンジしてやっていますね。

長尾 宮下さんの息子の宮下伸さんもラヴィ・ジャンカールのハアジアの調べVとか鎌倉のあじさい寺で録音したレコードとか、ダイレクト・カットの音盤への参加とか、そういうところで自作の曲やお父さんの曲をどんどん演奏してゆく。彼はレコードの録音に非常に積極的です。

石田 先程の4チャンネルであるとか、ダイレクト・カットであるとか、二十絃、三十絃のあたりはレコード・ファンの一角をなすオーディオマニアを喜ばせるレコードにもなっていますね。

富樫 4チャンネルになったのはこれだけですか。4チャンネルの機械そのものが驚わなくて驚かしてしまっただけから、一時的な現象でしたけど。

上野 個々の作曲家の現代邦楽作品のレコード数をみると、やはり三木、長尾

諸井、関宮秀生、諸井誠、それから清水晴……

富樫 宮下秀列さんが一番多いんじゃないですか。

石田 それから唯是義一さん。

上野 作品と演奏の両面合わせて言えば圧倒的なのは山本邦山じゃないですか。百枚以上？

長尾 ええ、百枚突破したときに記念にパーティーを開いたですね。二、三年以上前に。

上野 邦楽系作曲家の場合は自作自演が多いですね。

長尾 邦楽系の作曲家と言えは、唯是さんのハ善知鳥Vという、十七絃と能管、篠笛のための作品がレコード化されたんですが、これは十数分のかなり長い曲で親しみにくいところがある。でもその親しみにくさの質が実演で聞くと極めて肯定できる質のもので、ところがレコードで聞くとむしろあまりに単純であるという気がして来るんですね。まあ、唯是さんの曲は基本的に演奏会向きという性質があると思うんですが、そうすると、たしかブルーノ・ワルターが言ったように、

つまりレコードというものが実演の暖か味をどうしても伝えることができないというところ、邦楽器は非常に暖かい楽器であるのに録音の場合にその暖か味が失せて行くというのは顕著なわけですね。特に我々日本人だからそういう風に余計に感じるんでしょうけども。その辺のことは邦楽器の問題だけではないかもしれません。つまり邦楽系の作曲家の作品の

今後へ期待するもの

富樫 最近出たレコードで秀れているもの、というのは何かありますでしょうか。

さっきの話と重複するけれど、去年カメラータ・トウキョウが出した「二十絃争の世界」は三木稔の八坂の曲や八束からV等の新作が入っているのいいですね。それからビクターが昨年暮に出した「現代邦楽の世界・沢井一恵」。これは彼女が十七絃リサイタルで演じた石井真木、入野義朗、岸野正邦、沢井忠夫のほとんど新作が収められたレコードで、なかなか新鮮で活気のある内容でした。

長尾 私もちっと関係したレコードですけれど、ALMの「西島昭子/三枝」これは坪能克裕、池辺晋一郎、三枝成章、佐藤聡明といったすぐれた若手作曲家の新作を集めた前衛的なレコードで、三味線の可能性への挑戦です。あと少し古いけれどビクターの「現代の争歌」は、小

場合に非常に鮮度が落ちるというのが、再生音楽の問題点になりますね。

上野 ライブとレコードとの差異が洋楽にくらべて格段に大きい、というよりも質的に、ほとんど異次元のものになることが多いように思います。変な言い方かもしれませんが、これは本質的にダブル・テニアに属する世界なんだなあ……。

沢田が演奏している。これも可能性への挑戦と、日本的な心情への深い謎下が感じられます。

上野 私も長尾さんとほぼ同じで、西島昭子の三枝のレコード、これは録音であるがゆえの、ある種の冷たさ、音色的な、いっそうの透明感が、成功していると思います。それからやはり小沢の現代争歌、現代邦楽で声楽の方は空白に近い状態ですから、貴重な一枚ですね。ほかに、これは私が関係したレコードでいささか恐縮ですが、沢井一恵の十七絃作品集。大きなものでは、野坂忠子・三木稔の二十絃のアルバムというところでしょうか。

富樫 では、今まで演奏会や放送などで聞いて、まだレコードにされていないけど、こんなものはレコードにした方がいいというような曲が何か思い当るでしょうか。

長尾 福原百之助さんの八坂野秋葉。

福原さんは作曲家と言えるかどうかかわかりませんが、優秀な演奏家であって作曲の感覚もあるということかもしれません。ただ、そういう技術の人が真剣に作品というものに取り組んで成功した極めて優秀な例ではないかと思うんです。ムード音楽だと言え、それまでですけど、音楽の本質にまで達したムードを持っている作品で、レコード化を望みたい作品ですね。

上野 宮下さんの八坂の響は、いずれ録音されるでしょうけど、これはもうまったくレコードで聴いた方がいいでしょうね。宇宙電子音の導入を、異和感なく、効果音的に使っていてスケールの大きい作品ですね。他に、急には思い出せませんが、ありますよかなり。

富樫 ぼくがいま思い当たるのは、横山勝也と鶴田錦史の即興演奏。何回かやったことあるんですが、ある程度の会ではガス・ホールでやったのがとてもよかったですね。果してレコードにする場合にうまくゆくかどうか疑問ですけどね。あの時の録音がもしあるとすれば、レコードにしたいですね。それから胡弓奏者の駐地慶司が作曲した八通橋の歌。大きな編成ですが、とても楽しめる音楽だったのでこれも残したいものです。その他では歌物を得意とする谷津美さんのレコードが、未だ作られていないのは片手落ちといえるんじゃないでしょうか。

長尾 それから、ぼくは入野さんの曲が

もっとレコーディングされていていいと思いますね。

富樫 わりあい少ないですね。

長尾 それから池辺晋一郎の八雲煙。富樫 その通り。広瀬量平の八夢十夜。それから、さっき話題になったアルバムが出てから年数が経っているから、それ以後の作品の中で選曲したアルバムが作られてもいいですね。

石田 六〇年代から七〇年代はじめてあった名曲選のようなものも改めて現在の時点で作られてもいいですね。

長尾 今度、講談社から、似たのでもっと大きいのが出るのですが、あれは現代邦楽は入っていないです。

石田 別巻で別扱いで出るというですね。富樫 それから、これは難しい問題ですけど、これからどういう方向に進んでもいいか、というようなご意見がありましたら簡単に……。

長尾 ビデオ・レコーディングみたいなものももっと進むと、特に、教材、入門のレコードに関して期待できるんじゃないですかね。芸術的にももちろんですが。

上野 自明の理ですが、やはりすぐれた作品の名演奏、そしてオーディオ的精度でしようか。それから、これはさっきも言いました、声楽作品がコンサートでもレコードでもふえてほしいですね。

富樫 そうですか。それではこの辺で終りにしたいと思います。どうも皆さんありがとうございました。

東京音楽大学

邦楽演奏コース

講

師

○箏 野坂恵子
○箏・三味線 坂井敏子
○三味線 杉浦弘和
○尺八・笛 宮田耕八郎

○尺八 横山勝也
○琵琶 鶴田錦史
○作曲 三木稔



▲邦楽と東京音大オーケストラ

このコースは本学の既定の科（教育・声楽・ピアノ・弦・管・打・作曲・指揮）に入学した者から選抜されます。わが国邦楽演奏界で望みうる最高レベルの講師を揃えていますので、このコースを選ぶために受験・入学している学生が続出しています。

入学後も、各科所定の授業と平行しながら、これら講師の指導の下で各楽器の高度な技術を習得するので、他の大学には見られない充実した音楽教育を身につけた邦楽演奏者として巣立つことができます。

なお、本学には日本音楽集団の練習場があり、その合奏訓練にも常時接する利点もあります。

東京音楽大学 〒171 豊島区南池袋 3-4-5 電話 982-3186

ディスコグラフィ ● 現代邦楽 1964—1980

1

発売年	レコード・タイトル	収録曲名 / 作曲者	演奏者	会社 / レコード番号
1964	華曲・地歌名作集成(2) 中能島欣一作品集(3)	華・三絃のための組曲・三絃・華・フルート のための作品	中能島欣一・中能島慶子 他	ビクター / SLR528
	現代邦楽選集	尺八・華・十七絃のための四重奏曲 / 藤井凡大・邦楽器のための四重奏曲 / 伊藤隆太	邦楽4人の会	ビクター / SLR529
	不死の神祕	神祕 / 宮下秀河	現代邦楽合奏団	コロムビア / CLS5013
	中能島欣一作品集	ひぐらし・三絃協奏曲・初夏の印象・三つの断章・盤渉調・さらし幻想曲・秋静か・新調・ヴィーナによせて 他	中能島欣一・中能島慶子・鈴木清寿 他	ビクター / SJ3008-1-3
1966	武満徹の音楽	エクリプス・怪談	横山勝也・鶴田錦史	ビクター / SJL1504
	現代の邦楽・夢	伽藍 / 中能島欣一 他	中能島欣一・中能島慶子 他	ビクター / SJL2043
	今日の音楽シリーズ(3) 日本の電子音楽	シチュエーション / 一柳慧 他	鶴田錦史・菊地博子 他	ビクター / SJV1515
	杵屋正邦作品集(1)	春興・雨の夜・風 他	杵屋五三郎・田島佳子 他	コロムビア / CLS5051
1967	現代の日本音楽	四面の華のための音楽 / 関宮芳生・エクリプス / 武満徹・木と白の詩 / 松本雅夫	邦楽4人の会・横山勝也・鶴田錦史	ビクター / SJL1509
1968	ノヴェンバー・ステップス	ノヴェンバー・ステップス / 武満徹 他	鶴田錦史・横山勝也・トロント響・指 / 小沢征爾	RVC / SX2014-5 (SX2749 / RX2355)
	山川園松作品集(1)(2)	(1)秘りの秋・追憶・華合奏曲 他 (2)花咲く頃・訪人の歌・華合奏曲 他	山川園松・北原望山 他	東芝 / TH7034・7040
	平塚芳雄作品集	夕鶴幻想曲・秋の果・秋草土産・東洋風狂想曲・祝典・追憶の詩	平塚芳雄・晃麗邦楽会	東芝 / TH7041
	山川園松作品集 杵屋正邦作品集(2)	邦楽器による六重奏曲 他 去来・呼応・帰還曲 他	後藤すみ子・山田美嘉子 他 杵屋五三郎・杵屋静子 他	コロムビア / CLS5087 コロムビア / CLS5078
1969	▶ 現代日本の音楽(3)	古代舞曲によるパラフレーズ / 三木稔 尺八三重奏曲 / 清瀬保二	日本音楽集団・増田隆実・指 / 横山千秋	コロムビア / OSI0052
	杵屋正邦作品集(3)	流霞・尺八二重奏曲・津軽山唄の幻想 他	青木静夫・山本邦山・宮田耕八郎 他	コロムビア / CLS5100
	藤井凡大作品集	四重奏曲 他	日本合奏団・邦楽4人の会 他	コロムビア / CLS5102
	山川園松作品集 尺八1969 日本の電子音楽69	夏の組曲・小川の夕べ・三重奏曲 他 風・雨・ハレ / 以上広瀬量平 他 小雀・鶴井城	山川園松 他 尺八三本会 他	東芝 / TH7052 クラウン / SWS3 ビクター / SJX1004
1970	▶ 日本音楽集団による 三木稔の音楽	序の曲・天如・ソネット・凸・はばたきの歌・孤雲・華詩詩集Ⅰ・四群のための形象・古代舞曲によるパラフレーズ・くるだんど	日本音楽集団・野坂恵子・横山勝也・東京ソリストデン・東唱・日唱・指 / 秋山和慶	コロムビア / JX21-4
	平塚芳雄作品集	宇宙・フルートと弦楽のための音楽・瞑想他	平塚芳雄と晃麗邦楽会 他	東芝 / TH7059(9661)
	清水修作品集	智恵子抄より・華と管弦のための六段・干鳥・六つの断章・華独奏のための詩曲	松尾恵子・森雄二 他	東芝 / TH7073
	現代尺八 / 三本のひびき 山川園松作品集	罪 / 松本雅夫・尺八三重奏曲 / 船川利夫・竹風第三委 / 青木静夫 他 久の組曲・主題と十三の变奏曲・邦楽器による八重奏曲 他	青木静夫・山本邦山・横山勝也 北原望山・山本邦山・横山勝也 他	東芝 / TH7072 東芝 / TH7074
1970	EXPO '70 TEIZO MATSUMURA	詩曲Ⅰ / 松村精三 他	青木静夫・野坂恵子 他	ビクター / SJX1026
	結竹文響	結竹文響Ⅰ・2番 / 藤井凡大	日本合奏団	コロムビア / CLS5119
	ノヴェンバー・ステップス / 竹の魅力	十七絃・尺八のための二重奏曲 / 宮下秀河・ノヴェンバーステップスより十段 / 武満徹	横山勝也・横山蘭歌	コロムビア / CLS5126
	和楽器による 現代日本の音楽 「響」	日本楽器のための四重奏曲 / 清瀬保二・六重奏曲 / 伊藤隆太・和楽器のための四重奏曲第一番 / 小山清茂・三つのエスキス / 清水修・四面の華のための音楽 / 関宮芳生・尺八と華の協奏的二重奏 / 入野義朗・華のための組曲 / 石折真礼生・しがらみ第2 / 八村義夫・エ	邦楽4人の会・青木静夫・沢井忠夫・横山勝也・鶴田錦史・山本邦山・松浦君代・日本音楽集団・指 / 田村祐男・山岡重信	RCA / JRZ2505-8

発売年	レコード・タイトル	収録曲名 / 作曲者	演奏者	会社/レコード番号
1970		クリプス / 武満徹・対話五題 / 諸井誠・二つの尺八のためのアキ / 広瀬豊平・組曲「人形風土記」長沢勝俊・木村協奏曲 / 牧野由多可		
	現代作曲家の邦楽器による作品集(1)	和楽器のための四重奏曲 / 小山清茂・筆二面のための嬉遊曲・小品・六つの断章 / 以上清水修	邦楽4人の会	東芝 / TA7022(8035)
	現代作曲家の邦楽器による作品集(2)	三面の筆のための音楽 / 間宮芳生・菜菔花 / 牧野由多可・風 / 牧野由多可・尺八と三絃と二面の筆のための音楽 / 間宮芳生	邦楽4人の会	東芝 / TA7023(8036)
1971	現代日本音楽シリーズ(1)	昭和天平楽 / 黛敏郎	宮内庁式部職楽部	ビクター / VX53
	現代日本音楽シリーズ(2)	エクリプス / 武満徹・四面の筆のための音楽 / 間宮芳生・木と石の詩 / 松本雅夫	鶴田錦史・横山勝也	ビクター / VX62(SJV1509)
	現代作曲家の邦楽器による作品集(3)	二面の筆のための音楽 / 入野義朗・管絃華・五段宴客之調 / 諸井誠・竹籜五章 / 諸井誠	邦楽4人の会	東芝 / TA8009
	現代に生きる日本の音楽——邦楽4人の会の歩み	邦楽器のためのトッカータ / 安達元彦・象影譜Ⅱ / 助川敏弥・歴 / 池辺晋一郎・宴客 / 野田晴行・風 / 牧野由多可・八面の筆と室内管絃楽のための協奏曲 / 間宮芳生・尺八・三絃と二面の筆のための四重奏曲 / 間宮芳生・尺八と二面の筆と十七絃のための四重奏曲 / 野田晴行・管絃五段宴客之調 / 諸井誠 他	邦楽4人の会・日本フィル	東芝 / TA9306-9
	中田博之作品集	筆・尺八二重奏曲 他	沢井忠夫・轟野和之 他	東芝 / TH9001
	スペース・アンナウン	筆・尺八のためのスペース・アンナウン / 山本邦山・レイイェム・シャンティ / 早川正昭・竹籜五章 / 諸井三郎	山本邦山・沢井忠夫 他	フォノグラム / SFX7863
	岸屋正邦作品集(4)	独奏曲・三重奏曲・三重奏曲 他	米川敏子・沢井一恵 他	コロムビア / CLS5129
	現代日本音楽シリーズ(4)	遺酒 / 石井真木 他	園田高広・横山勝也	コロムビア / OS10121
	現代日本音楽シリーズ(5)	小童謡 / 諸井誠	NHK電子音楽スタジオ制作	VX99
	組曲「人形風土記」 / 長沢勝俊作品集	組曲「人形風土記」・子供のための組曲	日本音楽集団・指 / 田村拓男・横山千秋	RVC / JRZ2523
1972	佐保の曲・竜田の曲 / 野坂恵子弾リサイタル	佐保の曲・竜田の曲・筆譜詩集Ⅰ / 以上三木 他 他古典	野坂恵子	ビクター / VX109
	古典→現代 / 日本音楽集団の世界	凸 / 三木 他 他古典	日本音楽集団・指 / 田村拓男	コロムビア / QS10127
	諸井誠 / 和楽器による空間音楽	S Mによるシンフォニア(伸)・有為転変 / 以上諸井誠	宮下伸・酒井竹保・藤倉昌悦	ビクター / CD4K7518
	邦楽大系別巻 / 現代邦楽	四重奏曲 / 藤井凡大・昭和天平楽 / 黛敏郎・四面の筆のための音楽 / 間宮芳生・対話五題 / 諸井誠・琵琶行 / 中田博之・笠涉調 / 中能島欣一	邦楽4人の会・青木静夫・横山勝也 他	ビクター・笠摩書房 / VP3030-1
	日本の電子音楽(1)	シチュエーション / 一柳慧	鶴田錦史・菊地隼子 他	ビクター / VX32
	現代日本音楽シリーズ(1) / 諸井誠尺八の為の音楽	対話五題・竹籜五章・尺八・弦楽合奏・打楽器のための協奏三章	横山勝也・青木静夫・酒井竹保 他	ビクター / VX54
	Seiji Ozawa	遺酒Ⅱ・雅楽とオーケストラのための / 石井真木 他	日本フィル・指 / 小沢征爾	東芝 / AA8872(EAA186 EAO70205)
	平塚芳雄作品集	日本狂詩曲・謡曲六段・歡喜 他	晃麗会・アンサンブルバビー 他	東芝 / TH9030
	山川国松作品集	二つのひちりきのための三章・春の歩み・刈干切唄 他	山川国松・東儀博・山本邦山地	東芝 / TH9044
	ノヴェンバー・ステップス	ノヴェンバー・ステップス / 武満徹 他	横山勝也・鶴田錦史・アムステルダムコンセルトヘボウ・指 / ハイティンク	フォノグラム / SFX7775 (X5531, 8567)

発売年	レコード・タイトル	収録曲名 / 作曲者	演奏者	会社 / レコード番号
1972	唯是麗一の音楽(1)(2)	(1)合奏組曲石狩川 (2)十七弦と箏群のための協奏曲第4番・二重奏曲第二番・半夜・無伴奏尺八組曲第二番 他	唯是麗一・中島靖子・山本邦山 他	ソニー / SOJZ1-3, SOJL3-4 (75AG601-3, 50A4-5)
	対話五題	対話五題・竹組五章・真露海宴 / 以上諸井誠	酒井竹保・酒井松道 他	ソニー / SOJL104
1973	阿波の子タメキ譚	阿波の子タメキ譚・三つの阿波のわらべ歌 / 以上三木稔・子供の四季 / 長沢勝俊	日本音楽集団・徳島青少年少女合唱団・指 / 田村拓男	コロムビア / YS10141
	中能島欣一全集 創作集(1)~(8)	(3)盤渉調・三つの断章・秋静か 他 (4)日本の打楽器の為の習作・ヴィーナに寄せて・琉球旋法によれる (5)霞鳩宮・鈴葉づくし・習作 (6)三弦・箏・フルートの為の作品・三弦・箏・尺八の為の二重 (7)法隆寺・平調合奏曲・清流 (8)伽藍・波瀾・秋至行 他	中能島欣一・中能島慶子・山口五郎・納富寿童 他	ビクター / SJL17-24
	有為転変 / 竹林精舎	有為転変・諸井誠・竹林精舎 / 宮下秀利	宮下秀利・酒井竹保・藤倉昌悦	ビクター / SJL63
	鐘 / 山本邦山尺八の世界	三本の尺八のための鐘急 / 山本邦山・蒼芒 / 牧野由多可・詩曲II / 松村雅三・倭 / 山本邦山	山本邦山 他	RVC / JRZ2528
	雅楽 / 四天王聖霊会と現代雅楽	雅楽のための喚起 / 松下真一 他	雅楽会 他	ソニー / OSJZ45 (50AG202-3)
	唯是麗一尺八作品集	無伴奏尺八組曲2番~7番・鐘・合竹の賦・尺八二重奏曲	山本邦山 他	ソニー / SOSL13-14
	現代箏曲・清水悠作品集	心象・箏二重奏曲・三つの碑 他	沢井忠夫・森千恵子・砂崎知子 他	東芝 / TH9079
	沢井忠夫作品集	矢車・風の歌・陽炎 他	沢井忠夫・一恵 他	東芝 / TH9106
	武満徹の芸術	ディスタンス / 武満徹 他	ホリガー・多志盛 他	グラモホン / MG2411
	唯是麗一の音楽(3)	天平・版楽・主題と変奏・御楽・箏二重奏曲第一番 他	唯是麗一・中島靖子 他	ソニー / SOJL9-10 (50AG6-7)
1974	邦楽器のためのシャコンヌ	邦楽器のためのシャコンヌ / 安達元彦 他	日本音楽集団・指 / 田村拓男	オーディオ・ユニオン / AU5001-R
	竹 / 山本邦山尺八作品集	鐘急・竹・静寂・尺八二重奏曲第2番・冥加・甲乙 他	山本邦山・青木静夫・横山勝也 他	RVC / JRZ2548-9
	生々流転 / 竹林精舎	生々流転・竹林精舎 / 宮下伸	宮下伸・横山勝也・山本邦山 他	ビクター / CD4K7015
	松本雅夫作品集(1)(2)	(1)漆・三角洲・桐 他 (2)年輪・丹頂鶴・舞のうた 他	邦楽4人の会	東芝 / TH9117, 9125
	平塚芳雄作品集	管弦楽曲・アンブロンブチュ・竜宮 他	平塚芳雄・山本邦山 他	東芝 / TH9125
	三面の琵琶のための旅	秋庭歌・旅 / 以上武満徹	宮内庁・鶴田錦史	グラモホン / MG2457
	広瀬量平作品による山本邦山尺八リサイタル	彩・鶴林・ビバグルニ成・アキ	山本邦山 他	RVC / JRZ2546
	唯是麗一の音楽(4)	組曲長崎十二景・十七弦独奏のための前奏曲第二番・三曲第二番 他	唯是麗一・中島靖子・谷珠美 他	ソニー / SOJN10-11
	中島靖子の音楽(1)(2)	(1)春の風物詩 他 (2)花のデュエット・三つの小品・練習曲 他	谷珠美・高畑美登子・中島靖子 他	ソニー / SOJL20-23
	萌春 / 長沢勝俊作品集	萌春・二つの舞曲・箏四重奏曲・詩曲	日本音楽集団・宮田耕八朗・坂田誠山・白根さゆ子・指 / 田村拓男	RVC / JRZ2558
1975	三木稔作品集(1)~(3)	(1)古代舞曲によるパラフレーズ・凸 (2)呼の曲・雅びのうた・天如・孤響 (3)ソネット・華譜詩集I・四群のための形象	日本音楽集団・東京ソリスト・野坂恵子・横山勝也・宮田耕八朗・宮本幸子・増田隆実・指 / 秋山和慶・田村拓男	コロムビア / QZ7003-5
	宮下秀利作品集(1)(2)	(1)双鶴の曲・水郷郷の印象・恒 他 (2)花・北海民謡による幻想曲・古謡の主題と五つの変奏曲 他	宮下伸・横山勝也・島原帆山 他	ビクター / SJL81-82
	船川利夫作品集(1)~(3)	(1)複調奏曲・箏四重奏曲 (2)組曲出雲路・熱帯魚・箏三重奏曲 他 (3)節雨・冬の組曲	船川利夫・宮田耕八朗・横山勝也 他	ビクター / SJL87-89
	唯是麗一の音楽(5)	尺八と箏群のための協奏曲第11番・六面の箏のための追復調・水星・箏四重奏曲第一番・祭礼・獅子舞 他	山本邦山・高畑美登子 他	ソニー / SOJN6-7

発売年	レコード・タイトル	収録曲名 / 作曲者	演奏者	会社/レコード番号
1975	沢井忠夫等リサイタル	波 / 許屋正邦・詩曲1 / 松村禎三・三つの断章 / 中能島欣一	沢井忠夫・沢井一恵・沢井三山 他	ビクター / SJL97
	天為 / 山本邦山尺八作品集	尺八演奏曲第一番・天為・扇・陰陽句・対動・桐鎖 他	山本邦山 他	RVC / JRZ2553~4
	山本邦山 1974-1975	阿叫十文字 / 藤井凡大・舞 / 古田徳郎	山本邦山・宮本明彦	ソニー / SOGM110
	許屋正邦作品集(5)	間・陰陽・乾坤 他	藤倉雄峰・山本邦山・鶴田錦史 他	コロムビア / CLS5152
1976	愛のコリーダ	芽生え・ソネット 他	日本音楽集団・野坂恵子・指 / 田村拓男 他	RVC / RVP6096, SS3030
	宮下秀実作品集(3)(4)	(3)紫雲の調・巻越調祝賀・アリアンによる舞踊曲 他 (4)沙・海と里・四国路	宮下秀実・島原航山・池田静山 他	ビクター / SJL83・84
	船川利夫作品集(4)	寛・喜遊曲・四季の月	青木鈴慕・横山勝也 他	ビクター / SJL87
	佐藤のり子等リサイタル	茉莉花 / 牧野由多可・独奏十七絃による三章 / 助川敏弥・喜遊曲 / 松本雅夫	佐藤のり子・沢井忠夫・沢井一恵 他	ビクター / SJL117
	韻 / 山本邦山尺八作品集	韻・雲居調・尺八四重奏曲第2番 他	山本邦山・横山勝也・坂田誠山 他	ビクター / JRZ2568-9
	あじさい寺にて・三十絃等宮下伸の世界	こもれ火 / 宮下伸・花 / 宮下秀実・琉歌 / 宮下伸・三十絃のための独奏曲・SMのためのシンフォニア / 諸井誠・にめふあ星 / 高江洲義寛	宮下伸	東芝 / TH60032
	TOKK アンサンブル・東京	ミュージック・フォー・リビングプロセス / 一柳慧・シュトレームング / 入野義朗・マクレウス / 石井真木	横山勝也・鶴田錦史 他	ビクター / SJX7539
	胡弓 / 日本の伝統楽器	胡弓協奏曲 / 牧野由多可 他	塚越清子・砂崎知子・坂井敏子 他	フォノグラム / PH8514~8
	横山勝也の世界	ニライの海 / 高江洲義寛・エクリプス / 武満徹・魔切 / 横山勝也	横山勝也・鶴田錦史 他	ポリドール / MF7001
	山川園松作品集(1)	武蔵国風土記・間奏曲・春の喜び 他	山川園松 他	ビクター / SJL137
1977	めばえ / 三木稔選集(1)	四季・ダンス・コン1 / 芽生え・弄手 / 夕影の詩 / 竜田の曲	日本音楽集団・野坂恵子・杉浦弘和・指 / 田村拓男	カメラータ / CMT1001
	まゆだまのうた / 長沢勝俊作品集	三味線協奏曲・道路・二つの田園詩・まゆだまのうた	日本音楽集団・杉浦弘和・宮田耕八朗・宮本幸子・指 / 田村拓男	ビクター / JRZ2574
	雅 / PCM録音による	華やき / 三木稔・新八千代獅子 / 編曲日本音楽集団 他	野坂恵子・日本音楽集団・指 / 田村拓男 他	コロムビア / WX7510
	『靖門秘伝』物語	プロローグ・千絵の曲・山千歳・おつなラソディ・月夜の刺し他 / 以上三木稔作曲	日本音楽集団・指 / 三木稔・田村拓男・鶴田 / 古今亭志ん朝	東芝 / TP72283
	賢者のサウンド宮下伸三十絃の世界	十三絃と三十絃によるIMPROVISATION・三十絃と津軽三味線のための(RITSU)	宮下伸・高橋祐次郎	ビクター / SG53
	沢井忠夫等リサイタル(2)	情景 / 沢井忠夫・蕨春 / 長沢勝俊・鶴田 / 許屋正邦 他	沢井忠夫・沢井一恵・山本邦山 他	ビクター / SJL137
	唯是護一・中島靖子ジョイントリサイタル	幻想 / 唯是護一・尺八・華・十七絃のための三重奏 / 牛橋征司・木と石の詩 / 松本雅夫	唯是護一・中島靖子 他	ソニー / 25AG142
	JOJI YUASA / PROJECTION	花鳥風月 / 湯浅謙二	矢崎明子・菊地伸子・東京都交響楽団	コロムビア / OP7102
	中能島慶子作品集	野よりよとり・桐の花・笛と打楽器のための三章 他	中能島慶子・小倉美緒能 他	ビクター / SJL132
	(秋)抄 他	「秋」抄・エクリプス・ノヴェンバー・ステップスより十段 / 以上武満徹	横山勝也・鶴田錦史	グラモホン / MG1056
1978	鶴田錦史	ノヴェンバー・ステップスより十段 / 武満徹	鶴田錦史・横山勝也	コロムビア / WX7509
	山川園松作品集	埋れた世界 他	山川園松 他	コロムビア / CLS5244
	三十絃と打楽器のための積	三十絃と打楽器のための積 / 宮下秀実・三十絃独奏のためのメッセージ / 宮下伸	宮下秀実・吉原すみれ・壺田善三久	ビクター / SGS21
	山川園松作品集(2)	響三章・朝風 他	山川園松・山本邦山 他	ビクター / SJL153
	柴田南雄の世界	関月神歌 他	野沢勝平 他	ビクター / SJX9526~30
	華の魅力 / 沢井忠夫の世界	陽炎・千鳥の曲・小さな春 より	沢井忠夫・石垣晴美 他	コロムビア / WX7516

発売年	レコード・タイトル	収録曲名 / 作曲者	演奏者	会社/レコード番号
1979	▶ 野坂恵子・三木稔 / 二十弦華の世界	破の曲・オペラ春琴抄より「序曲と春驚鳴」・ひなふり・白濁・東から・まぼろしの木・華 譚詩集II・天如・佐保の曲・竜田の曲	野坂恵子 ガゼローニ・徳永二男 伊藤物一 東フィル・群響・指 / 山岡重信	カメラータ / CMT1015-8
	▶ 錦木によせて / 長沢勝俊作品集	春三郎・尺八協奏曲・錦木によせて・飛騨によせる三つのバラード	日本音楽集団・宮田新八朗・野坂恵子・指 / 田村拓男	RVC / JRZ2577
	現代日本の音楽名盤 1500シリーズ⑫	エクリプス / 武満徹 他	横山融也・鶴田錦史 他	ビクター / K VX5514
	現代日本の音楽名盤 1500シリーズ⑬	尺八と弦楽合奏・打楽器のための協奏三章 / 以上諸井誠	望月太明一郎・酒井竹保・東京 ゾリステン	ビクター / K VX5515
	現代の華歌 / 小沢道	古代歌謡による三つの歌 / 広瀬聖平・赤土になる妹・樹下の二人 / 以上小山清茂	小沢道・上杉紅雲 他	ビクター / SJL184
	中嶋島欣一の三絃 (1)~(3)	新砦・千鳥の曲を主題とする三絃曲・ウィーナに寄せて・琉球旋法によれる・華と三絃の為の組曲・笠沙調・神仙調・三絃協奏曲第一番	中嶋島欣一・中嶋島慶子・鈴木清寿 他	ビクター / SJL185-7
	華・沢井忠夫作品集 (1)~(5)	(1)二つの室楽曲・水面・石室 (2)あこがれ・装画・砂絵 他 (3)花枝・二つの群の為に・鷹 他 (4)ファンタジア・道化師・日本の三つの唄 (5)光る海・黒田節・幻想曲 他	沢井一恵・沢井忠夫 他	ビクター / SJL188-192
	山川園松作品集③	口笛尺八の為の協奏的三章・水上の舟唄・秋他	山川園松・池田静山・他	ビクター / SJL193
	横笛のひびき	笛と琵琶のための“行” / 伴谷昌二 他	難沼広行	ALM / LM1138
	唯是響一作品集⑦⑧	(7)四重奏曲第六番・第三番・火の鳥・五つの抒情・遠野・葵の詩 他 (8)万葉調・米回し・三重奏・迷・秋霞・竜巻 他	唯是響一・中島靖子・山本邦山 他	ソニー / 50AG614~5, 50AG616~7
	現代邦楽の世界・沢井一恵	源う島 / 石井真木・ファンタジー / 入野義朗・いするぎ / 鈴屋正邦・娘 / 沢井忠夫	沢井一恵	ビクター / SJL224
	山本邦山作品集 (1)~(3)	(1)尺八と十七絃のための二章・紫苑・太鼓他 (2)帆立・桐の謡・菊の賀 (3)相生の詩・恋越・竹のしらべ 他	山本邦山・中島靖子・杉浦弘和 他	ビクター / SJL226~8
1980	山川園松作品集④	華合奏曲・主題と十三の室楽曲・未明より日の出・三重奏曲	山川園松 他	東芝 / TH60127
	西潟昭子 / 三絃	庵の閑話 / 呼龍竜格・はじめのうた / 池辺晋一郎・LA・LA・LA・LA・LA / 三枝成章・FLASH II / 三枝成章・沈黙 / 佐藤聡明	西潟昭子 他	ALM / AL22
	山川園松作品集	即興幻想曲・三つの和・子供の世界 他	山川園松・和波孝博 他	ビクター / SJL25001
	中島靖子十七絃リサイタル / 唯是響一作品	善知鳥・協奏曲第四番・六つの前奏曲	中島靖子 他	ソニー / 25AG729
	秋庭歌一具	秋庭歌一具 / 武満徹	宮内庁式部職楽部	ビクター / SJX9548
	▶ シリーズ現代日本の音楽1500 ⑭	古代舞曲によるバラフリーズ・凸 / 以上三木稔	日本音楽集団 指 / 秋山和慶・田村拓男	コロムビア / OW-7871

▶印は日本音楽集団演奏のレコード。これらのレコードは集団事務局でも取り扱っていますので、お問い合わせ下さい。

ディスコグラフィ●現代邦楽 制作に当って——編集部

次々と魅力的な企画で売り出され、ファンをわくわくさせるレコード。一方“売り切れ”や“廃盤”ともなると世の中から忘れ去られてしまうレコード。今回の「現代邦楽レコード特集」では、このように時代の流れに一時浮き沈みの激しいように見えながら、その音に生きた歴史を刻印しているという点で貴重な資料となるレコードに、焦点を当てました。

世間一般から言いますと、レコードというのは“現在発売中”でないと意味がないようで、今回のような、時代の流れに沿った発売年によるリストの作成には、予想していたよりも多くの手数がかかりました。

調査は、次のような段階で行いました。

1. 音楽之友社発行「洋楽クラシックレコード目録」、邦楽関係の雑誌の調査。

2. 国立音楽大学図書館所蔵のレコード調査。

3. 1と2を基に各レコード会社のカタログ調査。

調査に当たりご協力下さいました音楽之友社編集部、国立音楽大学図書館、各レコード会社の邦楽部のディレクターの方々には厚くお礼申し上げます。

次に、このディスコグラフィ記載に関する注意書きを記します。

調査対象とした年代と範囲について

1. 取り上げた年代「1964年から1980年」は、邦楽4人の会のレコードが初めて出た年であり、「日本音楽集団」が結成された年である1964年から1980年前半までとした。

2. 「現代邦楽のレコード」として取り上げた範囲は、一般的に「現代邦楽」と言われるもので、なるべく広い範囲のものを対象とし、現存の作曲家の作品のレコードを取り上げた。

3. 邦楽演奏家によるジャズやポピュラー、編曲物のレコードは、70年代半ばから急に増加の様相をみせた。このディスコグラフィではこれらのレコードと「入門」のレコードについては紙面の都合上省略した。

表の記載方法について

1. 一年の中での発売順はアト・ランダムに記載した。

2. 収録曲について、多くの小品が収録されている場合は、スペースの関係上数曲記載し、「他」とした。同じレコードに古典が入っている場合も「他」とした。

3. 奏者は主だったもの以外は「他」とした。

4. レコード番号は一応、最初の発売時の番号を記載し、再発売で番号の変わったもののうちわかったものは、カッコの中に入れた。

三木稔の音楽は、今日の音楽が達成したいひとつの驚異である。

三木稔の音楽のなかに、かがやかしく顕示された劇的運動は、同時代の日本の作曲家たちが、ヨーロッパ楽器を駆使し、精妙なヨーロッパ語法で書いた、どの作品よりも、劇的な音のうねりをもって、われわれの耳をおどろかし、胸をうち、そして心をなごませる。

文芸評論家 福田一士

昭和54年度文化庁芸術祭優秀賞受賞

野坂恵子・三木稔

二十絃箏の世界

三木稔作品

破の曲（箏とオーケストラのための協奏曲）

序曲と春聲（オペラ「春聲抄」より）

ひなふり（フルートと二十絃箏）

白雉（ヴァイオリンと二十絃箏）

東から（ヴァイオリン・レコード独奏）

まぼろしの米（フルートと二十絃箏）

華謡詩集 第二集（箏はそらやき音曲）

天如（フルート）

佐保の曲・竜田の曲（独奏）

野坂恵子（二十絃箏）

セウエリ・ガッセル（フルート）

徳永二男（ヴァイオリン）

伊藤忠（語り）

山岡重信（指揮）

東京フィルハーモニー交響楽団

群馬交響楽団



二十世紀に生まれたメロリアな楽器。二十絃箏の創始者二人の記録。母であり、女王であり、日本音楽集団の華である野坂恵子。世界のソリストたちが一様に称える、その厳しい音への感受性、めくるめく音色、黄金の左手が紡ぎ出した十曲の奇蹟。



32ページ豪華解説書付
DMF-1008-1009 4冊組 ¥10,000

Camerata

発売元・カメラータウキョウ
〒150 東京都渋谷区神宮前4-10-12 高田ビル5F
販売元・RVC株式会社

東京の都心から我が家に帰るには、車の場合、世田谷通りを走る。成城の東宝撮影所の近くに、青と緑の信号が近接して並んでいる場所がある。毎度のことから私は、このまま進んでいいかどうか一瞬とまどう。

青と緑は違う。どちらかが安全信号であれば、もう一方は何か別の意味を持っていた。この私ですら錯覚するのだから、ヴィジュアルな色に、より敏感で厳格な人たちは例えれば画家は、安心して車を運転することができようであろうか。路上で、パトカーや救急車とすれ違うとき、ピーポーというサイレンが起すあのドクッラー現象が私にはこわい。音程が下るだけでなく、音の色を悪魔がすり替えるように妄言する。

◇

日本の音楽では、古来いろいろが大切に扱われてきた。温帯で、季節風地帯に位置し、激しい四季の変化を持つ国の住人の自然な成行きであったろう。私たちは、灼熱の夏を持たぬ北国から伝わる、単色で沈痛な音楽に深く感動し、乾雨・雨季の南国の魅惑のリズムにも、ぞくぞくさせ

られる。しかし、日本に住む私たちが、世界に発するメッセージは、基本的には、さまざまの変化を内包した、緻密な色合いのものであって当然である。

それにしては、邦楽の単調さは？と問われよう。円いこの地球上では、四季の変化だけでなく、東西南北、さまざまの人の交流があつて自然なのだが、白い人、黒い人を知ることのなかった鎖国時代の芸能が、単彩になることもいたしかたなかった。

その限られた国情の中にも拘わらず、日本人は多彩な芸能を生んだ。色を絶つた仏教音楽や、武家社会に適合された仮面劇である能楽、色を超えて無明の世界に住む被験者たちにリードされた平曲・地歌などのスタイリッシュな表面の下から、それこそ色は溢み出てくる。

古くから伝わる華の奏法には、ゆり色（掃吟）、つき色（控）、ひき色（腰）、赤色（消爪）など、色の字をつけた左手の手法が目立つ。歌舞伎・文楽といった町人たちの芸の主要器であった三味線ともなれば、まさにいろいろな人世の喜怒哀楽を映す。太極の音色的表現力は驚異である。そして、あの大夫の表情……。

情人・恋人のことを昔の人はいろといつた。色男・色女といい、色は豊かさの表現であり、愉れを宿していた。ちなみに、「いろろ」という動詞に漢字を当てはめると、応う、苛う、借う、綺う、艶う、弄う、彩うなどあり、この感情をなぞるだけでも音楽は成立する。「色を失う」とことと「色を作す」とことの差は、人世の両極であろうか。

◇

東西南北の交流が盛んになり、古今のものも不自由なく利用できる現代になって、何故か色が失われてきた。いや、あまりの豊かさ、便利さの故に正當な価値が目立たなくなったのであろう。

音色を合成するには極めて便利なシンセサイザーなどが相次いで登場し、その合成された重層的な色の氾濫の陰で、古典的なさまざまな音が市場価値を失くしている。西洋の雅びな音、日本の渋い音が、一部の若者の聴覚から失われて久しい。ロックの大音響と、単純なリズムは、麻薬として作用しつづけるうちに、繊細な耳を確実に破壊してしまふ。大資本・大企業、その単純な市場論理が、手作り

の商いを閉塞させるのと同様である。けばけばしい色の氾濫の中から、懐かしい地味な色合いを見つけたことは全く難かしい。ただ今、私たちのコミュニケーションをキャンバスに見立てれば、毒々しい混り合いで、色の名を指摘できないのではなからうか。

大新聞が、週末に、一週間分のFM番組をのせるようになった。たとえばFM東京のものを見給え。これはもはや、黒髪を持つ黄色人種の住む国の番組表ではない。毎週九十％はカタカナである。一方では、ポップスより理性が少しは勝っているはずの現代作曲家たちの演奏会の曲の配列もほぼ同様だ。ここ十数年、私の友人たちも欧米のどこかに魂をあずけっぱなしである。かくいう私は、英語でオペラを書いた最も悪いやつだ。おかげで、日本語の台詞作りに今頃忙殺されている。また、カタカナばかりの文化にいつも苛立つ私のくせに、こともあろうに邦楽器ばかりの作品でカタカナだけのタイトルのもものが二つある。ヘダンス・コシセルタントとヘバーティン・ベイン・ソノ。七十二三年頃の命名だが、伝統のよういにも身固めする分野の人たちに、

今日の日常生活への気軽な参加要請をするための色付けであった。

現代の日本語は、漢字・平仮名・片仮名、色でいえば三原色の上手な配合によって充分な機能を發揮するようになっている。この三種のどれかだけだと色合が弱まり、極めて読みにくい。二つでも日常的な機能は持つが、三つ混ると優れて判り易い。

いろはにほえど、と詠んだ歌から、優しい情感といふを感じる日本民族だが、イロハニホヘトの配列からは、どうしても記号しか感じとれない、といえれば私の色眼鏡であろうか。

古代日本では、教育は一部の階級しか受けられなかったが、その文字は、風刺や物の譬えにしても、高度な精神風土を背景に感じさせ、そこに鮮やかな色の駆使を見る。しかし現代は、イロニー（アイロニー）もユーモアも、語呂合せが主体で色が見えてこない。だからイロニーだ、ではお笑いにもならない。

日本の文章は、疑問符・感嘆符を使わないが、横書きになり、片仮名の占める率が多くなると、無味乾燥をさせてそういった記号を使いたくなってくる。その場合、奥深く文章の中に表現を閉じ込める日本の美徳を越えて、私などは感情表現の記号をどんどん削り出したい欲求にかられる。色を作して文章を書きたい

のだ。

疑いに？感嘆に！であれば、怒りは又笑いに入なんていう具合に……。

便利すぎ、供給過剰の色あいは破壊を暗示するが、モノトーンに凝るのも危険だ。バリ島で、隅々まで色さまざまに塗りこめられた様式的な絵を見たとき、ガムランの音楽構造とどこか相似する面白さを感じると共に、余白や間のないことで参った経験があるが、乾坤一擲の愚跡にも、身震いする感動と戦慄は同居する。

私は、音楽については晩学であったため、そして更にいうならば、純然たる日本人であったためであろうか、音楽上の知覚の中に、和音の色を加えることができるようになったのは、相当遅れた時期であったように思う。声色や、楽器の物理的な音色、そしてその重なり合う響きを、私の身中のキャンバスに置きかえることは自由にできても、和音のうつろい、いわゆる和声コントロールし、その色に即応する習慣を身につけることは、極めて後天的な現象なのであった。

「ピアノの和音に、無数の色があるんですよ。音楽の色は、オーケストラの音色だけと思わないで下さい」と、後輩からたしなめられたことが、学生時代にあった。和音感として認識しないで、

今日の広範な音楽大衆に訴えることはできない。邦楽器をオーケストレーションする場合、個性の強い楽器の音色が、合奏法や和声の欠陥を隠しがちであるが、西洋和声やコード進行に慣れた鋭敏な耳は、勿論それらを逃すわけではない。

インドネシアの人たちは、独特の習慣をもっている。ガムラン音楽における唸りの慣用である。ヴィジュアルに考えれば影であろうか。影のない絵に立体が成立し難いように、インドネシア人は、唸りを伴わない音楽を、極めて薄っぺらな音楽と思っているのではあるまいか。

ジャワとバリではやり方が違うが、バリ島の場合、ガムランの各楽器は必ず対になっており、同族同種の楽器の一方は、ほんの少し他方より高く調律されている。その度合はセツトによって違うが、一音の何分の一かの音程である。それらは互いに同一音型を演奏するから、ガムラン音楽は、常にその音程差によって生れる唸りを発していることになる。慣れない人にとっては、背中にいつもお化けがくっついていような不安を覚えるものだが、親しんだ耳には、こたえられない悦楽となる。お化けだから、それは色にあらわれない色だ。各音が三本ずつの弦で出来ているピアノでやる気なら、各一本をすらすらとよい。西洋音楽の中に、その悦楽を持ち込むのさえ簡単である。私は

へ東からで、事の上で部分的実践をしたが、音楽上の要素として価値認識する柔軟な耳が沢山いるかどうかで、この先の筆の色も変りうる。

三味線のさわりもやはり価値観の問題である。沖縄から持ち込まれた三味線に、さわりはついていなかった。琵琶に慣れた日本人は、当時異質であった三味線に、さわりという特異なものを付加したのである。色を付けた、というわけだ。邦楽社会の人たちは、さわりの付かない三味線を、艶のないものと考えた。ちなみに艶とは、豊かな色と書く。

もしも琵琶にあのさわりがなくなったら、もう人々は琵琶と呼ばないだろう。だが、私はあの琵琶の柱の上面を工夫して、さわりのつかない音をも時には出せる楽器に改めれば、琵琶は飛躍的に表現力を増すことができると信じる。自由な実験に手を貸す楽器製作者はいまいか。

尺八は沢山の進歩的な奏者たちによって、殆んどぎりぎりのところまで奏法や音色が開拓されつくした。その範囲だけでなく、もう相当なレパートリーを持ち得ているこの楽器の未来は、予測がつかない。ある日本の優秀なクラリネット奏者の話は示唆的だ。彼は名を明してくれなかったが、八重のYの人ではないある著名な尺八奏者が、各調の西洋音階を、これみよがしにデモンストレーションに出会

ったそうだ。クラリネット氏は、おったまげた。感心すると同時に、尺八が奏するみごとな西洋音階を、とてもきたないと感じたという。音階もまた、民族固有の色なのだ。自分の色を誇示したり、他人の色の真似が過ぎてしまつては、相手に不快感や不安感を与えるものではなからうか。色は恋をあらわすと同時に、色情狂といった風にも転用される。

即興を支えるものは思想である、と前に書いたことがあるが、色の選択も当然思想に左右される。

社会思想と音楽についてのいい例として、最近知ったのだが、バッハの演奏法を、デカルトの思想書に従って解明した有名な本があるという。バロック期の音楽が、先行したデカルトの思想に影響されたのは当然だが、後世の日本の旧制高校が、デカンショで半年暮したのは、もうアナクロというべきだ。また、二十世紀前半に必然性があつた社会主義から、鮮やかな赤い音楽が沢山出現したが、新しい労働貴族階級を生んでしまった現在の社会主義は指導的音楽を生まなくなつた。ましてその音色など想像もつかない。よかれ悪しかれ二十世紀後半を端的に示すロックは、より自由な社会から出てきた。毒々しいという色だ。

一部の伝統芸能社会のように、一つの

色に固執することも思想である。しかし、今日の市民たちをリードする音楽家には、二十世紀にふさわしい社会思想と色を考へてもらいたい。

禁色という題の三島由紀夫の小説がある。ホモ・セクシャルを扱った有名なものだ。古来、同性の中に高率で存在するといふこの色を、私の内に解き放つ意志は毛頭ないが、人間が構築する社会の慣習の中には、自然に開かれてあるべきものが、知らず知らずのうちに閉ざされ、タブーとして蓄積されていることがままある。

西洋近代音楽は、ルネッサンスの思想に発端し、中世の禁を破って人間を解放したが、いつの間にか、逆に楽音を閉めて自然を拒否することが慣習となつた。ミュージックをシェビールする行為は、近代人間が、コンタリットで外気を隔絶していく歴史と重なるのだ。

日本の伝統音楽は、より自然に近く、特定の色を大切にするとはいへ、禁じられた色があまりに多い。

私たちの仕事の一つは、その閉じ込められ、禁じられた色を各楽器毎に、またその組合せの上で全て解き放つことだ。

今年の八月後半に、草津で国際音楽アカデミー及びフェスティバルが開催された。野坂恵子の第リサイタルが、八月十二日に組まれ、そのプログラムに八白權V/A華やきVが加えられていたことも

あつて、私もその前後草津に滞在した。

そのコンサートを終始熱心に聞いていた内外のアーチストから、野坂はいつものように沢山の賛辞を受けたが、メイン・アーチストであるヴィン・シャーマン氏（オーボエ奏者。バッハ・ソリスト・主宰・指揮者）が、「野坂は疑いなく世界のトップ・クラスのソリストだ。彼女は一つの音に八つの色を持っている」と語った言葉が印象的だった。彼女が沢山の音色を持っていて、しゃべりやうな人、指摘されているが、虹の七色を越える八色とは具体的に愉快だった。

争いについていえば、古来色の字のついた奏法が目立つ、と先に書いたが、ゆり色もつき色もひき色も、以前はどの演奏家も極めてパターン化された使用法しかしていなかった。まして右手の爪が弦を弾く場所については、最も安全な準らしい音色の場所が選ばれ、爪の角度などにも、多様な可能性はあつても仲々実践されることはなかった。リモコンにより、ハンマーで弦を打つピアノは、常に一定の音色しか出すことができない。ピアノの音色は、和音の色と強弱、そしてメロディーのかすねの色であつて、多くの音を急速に発音できる強大なメリットはあつても、直接音色を操作できる準のような利点は持ち合せていない。

十数年前まで、準は自らの武器を捨てて、間違つて伝統的とされた禁色に付き合つてきたのではなからうか。一つの音に八つの色を持つと感じさせるに至るには、もちろん長い訓練が必要であつたろう。別の見方をすれば、閉ざされた音たちを解き放ち、作品の性格を読み取って創造上の参加を果たす、という現代の思想の高度な実践に他ならない。

黄金ノ

この四月に来日したイタリアの音楽組織アーチルの団長は、宮田耕八郎の演奏技術に感動して黄金の尺八の名を献じた。以前から、野坂は黄金の左手の形容を持っている。

私たちの主席演奏者たちに、このような表現ができることは、何とも嬉しい。音楽監督たるものも頭張らなくちゃ。神よ、せめて

黄金のパーカー・ベンをノ

オーケストラは、ヨーロッパの土着の色をもった各楽器たちが集り、何百年の時間をかけ、たぶんさまざまな葛藤を経ながら形成された。そして、群として個々の色を持つに至つたが、細かく見れば、同じ和音であつても、その配置や楽器の組合せで無限の変化をもっている。

例えば、同じハ長調のカデンツ（終止和声）をオーケストラで表現しても、モーツァルト・ベートーヴェン・ワーグナーなど、全ての作曲家によって組合せ方

が違ふ。もちろん、同一作曲家でも、曲によって、またその同一曲中の箇所によっても異なるわけである。音楽は時間の芸術であり、刻々とドラマは移る。同一テーマが反復されるとき、その色が同一であるとは限らない。

オーケストラの作曲に、私たちが心を奪われる理由の一つは、その無限に可能な調を、あの生身の人間たちの発する楽器によって、引き出し得るところにある。手中のバレットが生きて動いているのである。ストラヴィンスキーの八春の祭典の中に、弦が同一和音を同一音価で長々と弾きつづけ、不規則なアクセントの部分だけに、八本のホルンが同じ和音を重なる有名な部分がある。あんなのは打楽器でやれば充分だとか、ピアノでいいとか、アンチ・ストラヴィンスキー派はうるさい。私たち心酔派には、あれこそぞくぞくさせる春の萌であった。

あの考え抜かれた楽器群、あの選ばれた和音、それらがなす色たちは、パレットから舞台上に上り、原野に出て自然の色と詰りする。

日本の土着の楽器たちに、ガムランの金風打楽器、インドの絃やインドシナの管楽器などを加えたアジアのオーケストラができ、東洋の自然に見合った豊かな色を期待できるのは、いつのことであろうか。ピッチや音量、それよりも政治と生活の貧困を克服するという難関を突破

しなければならぬので、正夢だったと叫べる日は遠そうだ。物足りない口を握え、来るべき困難な社会事情を、互いに乗り切る力を得るためにも、個々の楽器による共同の場がほしいのだが。

わが国だけを取り上げても、簡単ではない。この国の知識人には一色主義が根強い。日本の伝統文化には、黒絵もあれば錦絵もある。洪い色も、それが描かれた昔は、実は鮮やかな原色に近かったりするのだが――。

日本音楽集団のように、日本の伝統楽器を全て拍まず合奏に加えよう、という姿勢の場合、その色を日本人の色として認知してもらうこと自体が難しい。各楽器が、あまりにも歴史を経た色を固めすぎているからである。

各楽器はそれぞれの色を、それぞれの様式美と併せて備えており、その古典と称される音楽を習っている人たちが鑑賞者が、強固に持ち合せる既成観念は、殆どの場合、集団活動に対してマイナスに働く。従って邦楽の古典といわれるものと、新興が結び合える余地は先ずないというのが悲しい現実である。

日本の珍らしい合奏音楽である雅楽の場合、合奏としての響きや色が、古代の作品と共に現代人の耳にも定着している。あの楽器編成に近いほど、合奏音楽として日本人になじみやすい。わが師、伊福部昭作曲の御曲へ響々々良は、先

生の諸作のうちでも最も好きな曲の一つであるが、その楽器編成は、この点を読みとった心にくい配慮であった。

尺八や三味線を、私たちは雅楽と関連して聞いている。この二種の邦楽器は、過去に別個の色を濃く型成した歴史を持つ。だが、人数からしても、それらは集団の重要な構成要素であり、私たちはそれらの存在権の主張を受け、それらの加わった色で活動を続けている。この集団様式の合奏が、日本人の間に、もっと広いコンセンサスを得るためには、私たちの作品や演奏が、今日の社会への参加を果し得、風化に耐えて生き残り、その合された響きが、慣習的な色として、日常的に耳の底に淀むまで待たねばならない。

日本音楽集団のような合奏形態の、現象としての面白さは、歴史を羅列した骨董屋の店先にすぎない。しかし私たちは、アンティークとしての価値のために、こんな実利の薄い仕事をしているのではないから、どんな雑踏の中にあってもよい、日常必需品としての売場に置いてもらいたい。時には、けげんばしさと限界ぎりぎりのところまで肉薄して、新鮮な色に磨きをかけねばならない。もし私に商品感覚があるとして、究極的に売れる商品を手懸するならば、それは絶対にオリジナルなカラーを持っている。もちろん、私の販売論は、紅しょうがのような色のごまかしを、許すことができない。

◇

草津からの帰り、冷夏の中にぽっかり晴れた偶然の一日を、金精時・日光を経て宇都宮に向う。集団の十月のコンサートに合せた勉強会に出席するため、次の日は、再び戻った異常な夏を、東北自動車道で帰京した。奥日光の落ちついた色は、日本人であった幸せをしみじみと味合わせてくれたが、灰色の空から小雨降る下野の丘陵地帯を横切った時に、目に入った単彩もまた異様に心を打った。そこには暗い緑しかなかった。だが暗い緑の中に、エモーショナルな濃淡の差があった。墨絵は黒だが、緑の墨汁――決して油では表わせない日本の色であった。

私はこの風景を、音に置き換えられるであろうか。五年ほど前へ音楽の友の音楽場派談義というエッセイで、故中島健蔵氏が、私のオペラへ春琴抄について触れ、「春琴抄は、ほのかな藍色のひろがりのようなものを、わたくしの中に残してくれた」と書いておられた。青年期、輸入西洋文化に心酔したオールドリベラリストが、西洋の規範でどうしても捉えられない私の音楽を、通常の評論で書きようがなく、トータルな印象として藍色に置き換えられた気が、わかるような気がする。あの下野の田園の、暗い緑で置き換えられる作品もありそうだが、果してそれはどんな音楽になるのだろうか。

思う。

(作曲家)

うな気がする。この特異な能力を衰減させぬよう、和洋の音楽、特に日本音楽を一層普及浸透

させるための強力な運動が、教育界を始め、各文化圏に於て展開されることを大いに期待したいと

間違っているよ 日本の音が苦教育

茅原芳男

「ヤーレン ソーラン ソーラン……………」
ハイ！ ハイ！

「ヤッ788、7888、7888、7765

……………」

ご存知「ソーラン節」の第パートの楽譜の一部。右手親指だけにはめたつめで子どもたちは強き始める。二十面の箏は糸乱れながら？も時間の経過と共に少しずつまとまってくる。続いて、笛・さら・木魚・鉦・太鼓・樽などの担当を決めて合奏に参加させる。

西洋の音による合奏とは全く異質の響きが教室中に充満する。隣の教室はさぞイワクだろうな、許してタモ。

「箏も太鼓も全部交代！」

子どもたちはワーワー。さすが？大和撫子の大半は箏・箏・箏。大和男子は、

「今度オレが樽だぞ！」

「オマエはカネやつたじやネエか。」

「イーダロー。」

「じゃー、ジャンケンだ。」

「いいかい！ 始めるぞー！」

ドン、ドン、ドン……………太太鼓が打ち始める。

縮太鼓も参加させる。

箏が前奏を弾き終わると

と笛が歌の旋律を吹き始

め、種々の日本の音が一

斉に鳴り響く。全員で、

「アードッ コイシヨ ドッ コイシヨ」

「もう一度初めからッ！」

やがて、再び全員で、

「アードッ コイシヨ ドッ コイシヨ」

太太鼓・縮太鼓・樽などが一斉に、

ドロ、ドロ、ドロ…………「イヨロッ！」 ドドン！

一瞬 シーン。

「決まった——ッ！」

ある日の授業風景の一コマでした。

箏の音に魅せられ、師の門をたたき、箏を教室に持ち込んでみたものの、結果は七転八倒。以来、変わった音楽教師と注目？されて十数年。今もって授業の連続。しかし、だーれも関心は示さないし、「何を、どのように…………」などとはだーれも教えてくれない。お役人も大学の先生も邦楽ソングというわけでもない。ただの空念仏。エライ人ってのは気楽なものだ。旗だけ振っていいばいい

のだから。

やはり、どう考えても今の音楽教育は間違っているよ。コーラスだ、リコーダーだ、ブラスバンドだと明けても暮れても西洋の音の話。日本の音など無関心。

音楽教育の目的は、音楽好きな人を育てることなのだそう。それはまあいいとして、では過去の音楽教育はどれ位の音楽好きの人、いやクラシック音楽ファンを育ててきたのだろうか。町にも村にもそしてお父さんもお母さんもみんなコーラスやってハモっているのだろうか。民謡やエンカの好きなオジサンやオバサンだっていっぱいいるじゃないか。カラオケだって大流行。音楽教育の成果の一つがピアノブームを生んだとか。とっても演奏人口の主力は小学生。喜んでいるのは楽器のメーカー？。

要するにオトナになると多くの人々が学校では教えないさまざまなホーガクと仲良しになってしまふということだ。音楽教育ってのは、将来、歌われなくなるであろう歌やコーラスばかりやっているからホーガク人口がますます増えるという結果になるのであって、その意味では邦楽界に多大

な貢献をしているということになる。ありがたい話なのだが……。

だが、まじめに邦楽を教えたなら、今以上に邦楽人口が増え、民謡だってもう少し上手に歌うお父さんが現れてくるというもの。箏・三味線・尺八だって音楽の先生が率先して範を示せば、子どもたちだって眠っている血がさわぎ出すだろうに。いや、それが困るのかな？

音楽教育人であるためには、本来、邦楽の素養

を身に付けていなければならなかったのに。「多忙なので……。今さらどうも……」などは慣用語。邦楽ソングという前に「六段」でも弾いてみたらいいが。今やっているケンキューは半年や一年中断したからといって教育効果が目に見えて低下するなんてことはないですよ。大丈夫ですよ。「オンガクシューダン？ 知らん」なんて人いっぱいいるけど困っちゃう。

日本の音が苦教師が「わが国の音楽教育は……」。

音楽教育の目的は……。では、日本の音が苦教師は植民地並み。

どうだろう。みんなで「邦楽の教育を考え、推進するカイ」を作って怪キエンを上げたり、「邦楽教育振興法」なんてものを制定してもらおうよう全邦楽愛好家総ケッキ大集会でも開いたら……。

(東京都新宿区立落合第二小学校教諭)

昭和五十五年度文化庁芸術祭参加

第二回山田喜美子琵琶リサイタル

☆十四人の琵琶奏者によるオリエンタルな甘美な世界!!

琵琶協奏曲・アルハンブラ幻想曲／作曲・角田圭伊悟(委嘱・初演)

☆神秘的な日本楽器との出会いに新しい音楽を求めて

琵琶・十七絃・尺八三重奏・仲秋詩抄／作曲・牧野由多可(委嘱・初演)

琵琶と胡弓のための・麗庭歌／作曲・畦地慶司(委嘱・初演)

琵琶・小鼓・二重奏・天声地響／作曲・杵屋正邦(委嘱・初演)

出演——日本音楽集団——宮田耕八朗・坂田誠山・福田輝久・尾崎太一・高橋明邦・黒坂昇・白根きぬ子・砂崎知子・花房はるえ・山田美喜子・田原順子・畦地慶司・ネオ・琵琶グループ——山田美喜子・田原順子・砂崎知子・一坊寺謙一・片山弘二・山田まゆ美・鈴木鏡子・大宮雅子・水藤まり子・古川八重子・大脇美美子・斎藤喜巳・野口テル子・斎藤実

十月三十一日(金)午後七時開演 国立劇場小劇場

■入場料——一般二〇〇〇円・学生一五〇〇円(全自由席)

■お問い合わせ——七五一二二六(山田方)

四〇九・五三七四(日本音楽集団)

琴造り

くらもち

十三絃
十七絃
二十絃

龍勝

いとしめも致します

千葉県柏市豊住五ノ二ノ二十一

電話〇四七一・六三三・三八六四

心に残ったものから

木村重雄

入野義朗と邦楽器

入野義朗の一九七〇年代における創作法を特長づけるひとつの現象に、邦楽器の積極的な導入がある。もっとも、これは彼だけにとどまらず日本の作曲家における普遍的な状態でもあるが、しかし彼が創作上のポイントのひとつとして、ごく自然に尺八、箏などを用い、新しい個性的な音響世界を創出するための有力な手段としていたことは間違いない。つまり、単なるムードからこれらを選び出したのではなく、みずから表現するための媒体として、掘り所をそこに求めていたとする判断は、おそらく不当な推量とは言いつくぬきである。

具体的には、絶作となった未完の交響曲「あめつちのこ」(一九七九)には十七絃がソリストティックな機能を果たしており、死の二日前にあたる六日二十一日に日本初演された「Wardlung」(一九七三)は尺八二本がオーケストラと拮抗して主體的な訴えかけをおこなう。そして、こうしたあいの入野における邦楽器は、それらに付随する日本風の情

念的な属性は全く取り去り、あくまでひとつの固有な表現力をもった新しい媒体として伝統的な編成のオーケストラとともにごく自然に、その時々の場をつねに安定した音響世界を成り立たせる。それはオーケストラ作品のみではなく、たとえば葬儀の会場で演奏されていた尺八、ヴァイオリン、ピアノ、二面の箏と打楽器のための「ハコスモス」(一九七八)においても変りない。こうした彼の邦楽器への関心は、いわば中期の前段階に書かれた「2面の箏のための音楽」(一九七五)にはじまり、以後ほぼ十年を経た「2面の箏と十七絃のための3楽章」(一九六六)を経て、いずれも一九六九年に書かれた「20絃と十七絃のための2つのファンタジー」(一九七八)と箏のための協奏曲「二重奏曲」をスタップに、演奏者よりの委嘱に応じではなく、オーケストラ作品やアンサンブルにおいて自発的に取り入れられることになった。すなわち、一九七〇年代とあえて指摘したのは、かに六〇年代以前にも邦楽器を加えた作品が存在してはいても、それはあくまで

演奏者側からの求めに応じてその楽器を選んだもので、必ずしも主體的な選択とは言えない。しかし、「Wardlung」や「ハコスモス」におけるそれは、明らかに自己の表現をゆだねるべき有力な手がかりとして選り出したもので、おそらく

彼の健康が許せば「あめつちのこ」は以降に展開されるべき真の円熟をもった晩年の世界は、こうした楽器が誇らかに存在を主張したことであろう。そうした意味からも入野の逝去が心から惜しまれる。

小宮多美江

秋ほどではないが、この春のシーズンも、現代邦楽演奏会はかなり頻繁に行なわれた。私のきいた範囲でその特徴をとらえようとすれば、第一に演奏の面で、若い世代が着実に頭角をあらわしてきていること、それにともなう作品面でも若い作曲家の作品が曲目に加えられることが多くなったこと、それと、今回はふれないが古典を新しい目で見直そうという動きがあることなどであろう。

その意味であげたいのは、「楽」演奏会(4/30)、三人の十七絃奏者による演奏会(6/23)、沢井忠天合奏団演奏会(6/27)である。

「楽」(三橋貴風・大嶽和久・吉村七重・堀永千恵子)は二年目を迎えて曲目も構成も多彩な方向を出していたが、曲中ももっとも充実した演奏は、長沢勝俊

「三人の十七絃奏者による演奏会」では、菊地博子、宮本幸子、沢井一恵が、それぞれに個性的事業が加味に示された。このこと自体は評価すべきこ

となのだが、この演奏会では、合奏において各個性が相乗作用を発揮せず終ったのは惜しかったと思う。なお、私は、沢井の演奏に強い印象を受けた。

沢井忠夫合奏団を私は今回初めてきいた。まず驚かされたのは合奏の歯切れのよい見事さだった。沢井忠夫・一恵両人の特長が全体に反映してのことにちがいないが、筆の音色に力強さがそなわっていることが私には一層快い。

曲目の初めと終りにその合奏の曲があった。初めは石橋真礼生の八重のたのみの組曲。プログラムには何も記されていないが、これが作曲されたのは一九五二年のこと。委嘱者は鈴木嘉代子。五〇年代の作品の多くは彼女に贈呈されて書かれている。作曲家では他に清水脩、伊藤隆太らである。

初演のときは三人の奏者による三重奏であったものが、六九年の改訂を経て、今回は、第一・第二、十七絃の各パート四人ずつでみごとに合奏されている。

六、七〇年代の現代邦楽ブームの前にはすでにひとつの歴史があったことを明らかにしておく必要を痛感させられたが、曲は平明で、しかも合奏によるふくらみを十分に期待できる作品である。

終りの曲は委嘱初演曲、長沢勝俊の独奏、独奏十七絃と箏群による八雲三題であった。主題はだれにも親しい東北のわらべ唄へ上見れば虫こゝで、形式をわかり易くいうならばコンチニルト・ドラックス。文字通りの、合奏のよるこび、をこれからも度々きかせてもらえらう。

土田貞夫

このことで、民謡はそれから除外されているような扱いでしたから民謡ブームが起っていても専門の音楽家によって民謡がまともに問題にされることは比較的少なかったようです。しかし日本民族の特質が典型的に表われているのが民謡だといえるのですからもっとも関心の対象になってよいことだと思われれます。日本音楽集団の公演はそれに気付かせるというこゝろでたいへん意義があったと思います。

長沢勝俊、福島雄次郎、牧野由多可氏等の作品が演奏されましたが、坂本良降氏が最初に民謡を取り上げたところにくらべるとその取り扱い方も格段に高度化していることが言えると思います。小山清茂、岡宮芳生氏等の仕事はその分野で大きな業績になっているということがあったのと無関係ではないことも知れません。

民謡ではありませんが、いや民謡の新しい一種といってもよい演歌が現代音楽と相互に働き合っているよい例は、七月二十日草月会館で催された「二十世紀音楽ソング」という会で竹前文美子さんに

よって弾き語りされた三宅様名作詞作曲の「椅子エレジー」で、Why not my baby? シリーズの中の一曲です。竹前文美子さんはジュリアード音楽院などにもいたことのある人なそうでN・H・K・TVのうたの絵本のおねえさんでしたから知っている人も多いでしょう。弾き語りのためにピアノに向って腰を下したとたんに靴を脱いで裸足になったりするなどなかなか奇行に富んだ歌手のようでした。演歌はやはり演歌らしく歌いましたが、これからの問題は西洋音楽で育った歌手の新しい発声法の探求、これは邦楽で育った人についてもいえることかも知れませんが現代にふさわしい発声法の開発が必要であることを思わせました。

つまり古典的なやり方もあるし現代的なやり方もあるといった幅広い勉強が望まれるということ、これはそれぞれの伝統的なやり方をしっかり勉強した上でなければ出来ないことでしょう。これらの歌手にはそういう多様なやり方が要求されますからそれに応えるのはなかなかたいへんなことだと思っています。

長尾一雄

目の変更を知らずにいきなり佐藤聰明のへちまだ時の鳥達を聞いた。この、無風の風が頬をなでて行くようないきなりの実在感、私が最近の新発表曲のなかではほとんど感じなかったものだ。曲

五つの演奏会

五つの演奏会

五つの演奏会について期日順に書くことにする。

「楽」の演奏会(四・三〇、ABC)

に私はきりぎりの時間に駆け込んで、曲

わが国では邦楽といえは江戸近世音楽

は民謡や童謡や流行歌などがその創作のモチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

モチーフになっていることをシニニニ

ルフなどは民謡を創作の重要な素材として

ベートーヴェンなどその作品の大部分

は民謡や童謡や流行歌などがその創作の

目を知らずに聞くと、というアテンションがなくても印象は同じだったと信じているが、佐藤を「無言の衝撃」の作曲家としてあらためて評価したい。この会では故人野義朗の八尺八と筆の協奏的「重奏」のすぐれた演奏もあった。

「日本音楽集団」の演奏会（五・八、都立センター）では、池辺晋一郎の八尺の向うがわで、三木稔の八東から、のすぐれた再演は、いずれも私の初演の際の認識をあらためるものだった。特に野坂忠子による八東から、は作曲家の汎東洋的思考が完全に肉化して居り、新曲発表と共に、すぐれた作品の再演がいかに重要な意味を持つかを思い知らされた。

集団は、六月十日青山タワーでの胡弓特集でもよい仕事をした。

「鯉沼広行横笛の会」（五・二〇、梅若能楽堂）では、伴谷晃二の八流妙と松村植三の八篠笛と琵琶のための詩曲が演奏された。鯉沼は他に「日本の横笛」（三・四、石橋メモリアル）という音楽会でも伴谷の八篠笛を演奏しており、その際は福原百之助との呼吸のびたり合った演奏が印象的だった。そのことはリコーダー奏者として出発した鯉沼が今や古典と現代の境を越えた「笛の吹き手」としての歩み方を体得しはじめているということを示すだろう。松村も伴谷も伴奏を字びながら日本音楽の核心に歩み込

もうという姿勢と感性があり、この人たちと鯉沼との結合はまっすぐにわれわれの故郷をめざしている。

「三人の十七絃奏者による演奏会」（六・二三、ABC）は、菊地恒子、宮本幸子、沢井一忠による十七絃の曲ばかりの演奏会で、二つの合奏曲と、それぞれの奏者の独奏とがあった。非音楽的な音という批評さえあった十七絃という楽器が、その条件を乗り越えて鳴って来るまでの筋道は、それだけでも反伝統美観の現代の旗だ。その意味では菊地の八風（牧野）に最も近いものを感じる。復調めざましい宮本の八十七絃のためのロマネスコ（岡田京子）、絶好調の沢井の八火垂る（

（沢井忠夫）もともども二本の柱になった。

「宮下伸三十絃・筆リサイタル」（七・一、朝日生命）は、アジア人としての自覚という気宇壮大なものを感じさせる会で、そのことの問題点はしばらくおくが、岡坂慶紀の八風の森（第三面）と宮下秀例の八蒼空の響（三十絃と宇宙音）は抑制されたロマンスリズムが匂う佳品佳演だった。かたや日本郷土神の、かたや宇宙からこの地上への、それぞれの呼びかけに応えるように傾かれた曲たちに、ときめきを感じる。

昭和五十五年文化庁芸術祭参加

三橋貴風第一回尺八リサイタル

○呼竹・受竹・通竹・門付・鉢返し／根笹派尺八古典曲

○詩曲第一番／松村植三 ○竹韻五章／諸井誠

○霜夜の砧／長管尺八のために（委嘱・初演）／柴田南雄

○尺八と筆のための協奏曲第三番／唯是哉一

客演：大嶽和久（筆）、吉村七重（筆・二十絃筆）、福永千恵子（筆）、

日本音楽集団等奏者

十月三十日（木）午後七時開演 芝ABC会館ホール

■入場料：一八〇〇円

■チケット取扱：渋谷東急ブレイガイド・銀座橋居堂

■お問い合わせ・電話予約：三橋方〇四五・五四一・五一一二
日本音楽集団〇三・四〇九・五三七四

MRI RECORDING

演奏会・発表会の記録・録音
舞台音響・音楽・効果音の編集・再生

東京都世田谷区赤堤3の34の22（〒156）

日本中継録音株式会社

TEL 03-321-9629

お琴・三味線

品質の優秀さ
価格の安さに定評がある
琴栄楽器店



弊店二階展示場

- 〈お 琴〉・常時在庫200面・試弾できます。
・特別注文仕上げ受承ります。
 - 〈三味線〉・在庫多数・試弾できます。
- お琴・三味線のお買求めは琴栄ローンで(最高20回払い)

琴

御琴・三味線専門
琴栄楽器店

〒500 岐阜市司町九(大学病院前)
TEL (0582) ☎ 1826・☎ 1261

パンフレット無料送付致します

61 秋の総合定期演奏会

Regular concert: Works for solo, small ensemble and large ensemble.

十月十四日(火)午後七時開演
都立センターホール

一、絃楽(委嘱・初演)

永瀬博彦作曲

- 〔笛〕西川浩平 〔尺八Ⅰ〕坂田誠山 〔尺八Ⅱ〕田嶋直士
- 〔琵琶〕田原順子
- 〔箏Ⅰ〕吉村七重・内藤洋子 〔箏Ⅱ〕花房はるえ・木村玲子
- 〔十七絃〕宮越圭子・滝田美智子
- 〔打楽器〕高橋明邦
- 〔指揮〕田村拓男

二、竹に同じく——十五本の管のために

池辺晋一郎作曲

- 〔竜笛〕芝祐晴(客演) 〔笙〕多忠慰(客演)
- 〔ひちりき〕大窪永夫(客演) 〔篠笛〕西川浩平・宮田耕八朗
- 〔尺八〕三橋貴風・福田輝久・田嶋直士・藤崎重康・竹井誠・米澤浩
- 〔島笛〕水谷雅康・石崎信宏・小林恵美子・大品愛穂子
- 〔指揮〕田村拓男

三、交響的幻想曲 朱輪金鈴(改訂版)

長沢勝俊作曲

- 〔笛〕西川浩平 〔尺八Ⅰ〕坂田誠山 〔尺八Ⅱ〕竹井誠
- 〔尺八Ⅲ〕藤崎重康 〔尺八Ⅳ〕福田輝久 〔尺八Ⅴ〕米澤浩
- 〔尺八Ⅵ〕三橋貴風 〔琵琶〕半田淳子・田原順子

絃楽

絃楽の絃は「序」に通じますが、特に絃事詩風な表現を意図して絃楽としました。絃事詩は吟詠者が即興的に物語の構成や色づけをしてゆくのがその特徴とされています。かれらはその時々、場に応じて、又、自らの感興のおもむくままに詞をあ

四、わ 三木稔作曲

- 〔細樟三味線〕加藤洋 〔低音三味線〕森田可郎
- 〔箏Ⅰ〕白根きぬ子・花房はるえ・松本和美
- 〔箏Ⅱ〕吉村七重・能沢栄利子・本巢崎志子
- 〔十七絃〕宮越圭子・木村玲子・佐藤里美
- 〔打楽器〕堅田啓輝・黒坂昇・前田文明
- 〔指揮〕田村拓男

五、鄺曲 賢多々良 伊福部昭作曲

- 〔尺八〕宮田耕八朗 〔三味線〕坂井敏子 〔琵琶〕半田淳子
- 〔二十絃箏〕野坂恵子 〔十七絃〕宮本幸子 〔打楽器〕尾崎太一
- 〔篠笛Ⅰ〕西川浩平 〔篠笛Ⅱ〕宮田耕八朗 〔能管〕藤崎重康
- 〔竜笛〕芝祐晴 〔笙〕多忠慰 〔ひちりき〕大窪永夫
- 〔箏Ⅰ〕野坂恵子 〔箏Ⅱ〕坂井敏子 〔箏Ⅲ〕白根きぬ子
- 〔十七絃〕宮本幸子
- 〔打楽器〕鼓―尾崎太一・高橋明邦 大鼓―堅田啓輝 桑太鼓―黒坂昇
- 〔指揮〕田村拓男

やつりながら、相当の長さにわたって休みなく歌い続けることができたようです。この歌いながら英雄譚などを構成してゆくという、はるか原初的な造型への思いがこの作品を書く動機となりました。

したがって、曲の流れも自由リズムの性格をもった古代風な旋律に初まり、全体

の比較的素朴なレトリックによる、いわば叙事詩風序奏とでもいったような形をとっておりま。

(永瀬博彦)

竹に同じく——十五本の管のために

東洋の伝統的素材「竹」、同じ竹から千差万別の用途を考え出した昔の人々の知恵。その竹を使つての音楽の創造。竹から作られた十五本の楽器が、この曲ではステーションに左右対称に並び、均衡のとれた「場」を作り出します。作者は、この一つの「場」を基本にして、あらゆる角度から種々の音を引き出そうと試みるのです。それは、さらに演奏者一人一人の個性から変化を呼び起こし、みなさんの反応により、もう一つの「場」へと発展していくのです。竹という一つの素材は、日本人にとって深く心に結びついているのだと思えます。また、身近に感じられるものです。その魅力ある音を心ゆくまで味わってください。

(宮川記)

【作曲年】一九七九年 【初演】同年第55回定期演奏会 【演奏時間】約12分
【編成】笛2・笙・ひちりき・竜笛・尺八・琵琶4

交響的幻想曲「朱輪金鈴」

朱輪とは装飾古墳にみられる同心円の輪（太陽を表わしているといわれている）。金鈴とは副葬品の中から発見された小さな金の鈴。数多く見た古墳の中から、作者が最も強く印象をもった二つを選び「朱輪金鈴」と名づけられた。

この曲は、けっして、ダイナミックな、はでさは持ち合わせていないかもしれない。しかし、その静かな空間から初まり、それが持続されるに至り、幻想曲風なロマンスを感じさせぬわけにはいかない。それはけっして非現実的な空間ではなく、現実感覚にみちた、人間の知性であり肉体である。

また、この曲では、中国古代の石の楽器「磬」と四角で採れる「サマカイト」という石が使われている。

(河合記)

【作曲年】一九七一年、一九八〇年改訂 【初演】七二年にNHKで放送初演、七三年第十九回定期で舞台初演、八〇年第四回新人演奏会で改訂初演
【編成】NHK 【演奏時間】約20分
【編成】笛・尺八3（6）・細篳三味線・低音三味線・琵琶・笙2・十七絃（2）・打楽器3（8）
（以上のパート数は改訂版、カッコ内は初演時の数。今回は尺八のみ初演と同じ、他は改訂版により、琵琶がダブル、笙はトリプル。）

わ

和「平和の「わ」。和楽器の「わ」。

輪「円をあらわす「わ」。手をつなぐ「わ」。

ワッ「驚きの「わ」。

などの意味を含む題をもったこの曲は、徹底的なヘテロフォニーと、即興感覚で書かれています。

楽器による表現の違い、そして最後の部分の、音の「輪」は、生演奏で楽しんで欲しいものです。作曲者は、舞台の上の演奏家だけでなく、聞く人にも、「和」、「輪」、「ワッ」への参加を期待しているように思えます。

(内田記)

【作曲年】一九七六年 【初演】同年二月、三月アメリカ公演、日本初演同年室内楽演奏会。
【演奏時間】約17分 【編成】尺八・三味線・琵琶・二十絃・十七絃・打楽器

謡曲 賢多々良

「謡曲」とは平安時代中期に興った歌謡曲で、古代中国の楚國の都で行われた俗曲の名を借用したもの、賢多々良は自由な舞のことで、中国の文化の影響が強かった時代ですが、その中にも日本的な情緒が漂い、ようやく中国の音楽が庶民的なレベルで消化されてきた状態にあったと言えます。歴史的にはこの先に能楽という一つの文化の頂点を迎える前の平安貴族のあでやかな感じも含んでいました。こうした時代の舞の謡曲の名を借りるこの作品は、形態は能楽によるところが大きいわけで、作曲者自ら民族音楽的であることを意識したと見えます。雅楽の変を見つめ直すことによる新鮮な響きの発見は、聴き手を魅了することでしょう。（宮川記）
【作曲年】一九七二年 【初演】一九七三年芸術祭主催公演日本音楽集団演奏会
【演奏時間】約25分 【編成】笛2・能管・竜笛・笙・ひちりき・薩摩琵琶・筑前琵琶・笙3・十七絃・打楽器3

■今回の客演者紹介

多忠恵・芝祐晴・大塚永夫

共に宮内庁楽部勤務。多氏は笙、琵琶、左舞、トランペットなどを担当。現代邦楽の分野においても筆の第一人者として活躍。東京音楽大学講師。雅楽・紫雲会主宰。芝氏は笛、琵琶、左舞、フルートなどを担当。雅楽器を中心とした現代邦楽作品も多い。東京芸術大学講師。雅楽・紫雲会主宰。日本音楽集団団友。大塚氏は笙、笙、左舞、セロを担当。現代邦楽の分野でも広く活躍。ウライタナル弦楽合奏団主宰。

62

定期演奏会 笛・打楽器特集

Regular Concert: a special collection of modern pieces for traditional Japanese flute and percussion.

十一月十二日(水) 午後七時開演 青山タワーホール

構成 藤倉成敏

- 一、なゆた 杉浦正嘉作曲
 二、歌袋——笛と打楽器と声による(初演) 西川清平作曲
 三、秋(初演) 望月太八作曲
 四、気流(初演) 内田とも子作曲
 五、風河 藤倉推峰演奏・作曲
 六、四季——ダンス・コンセルタントⅠ 三木稔作曲 指揮・高橋明邦
- 客演 藤倉推峰

今回は、「笛・打楽器特集」として、特に、笛と打楽器の団員の協力で、面白いコンサートにしたいと考えております。集団の演奏者の望月と団友の西川氏が各々創作に挑戦します。望月作曲「秋」(重二部、打楽器一部)と、西川作曲「歌袋」、今までにない新しい傾向の作品となりそうです。又、元来尺八奏者で最近笛に意欲的に取り組んでいる藤倉重康が新作二曲を吹きます。そして、今回の特別出演として、古典に創作に幅広く活躍中の藤倉推峰氏を客演に招いておりますが、彼自身の作曲になる独奏曲「風河」を演奏して頂きます。今年三月の、JMF民音演奏家の交流フランス公演にて絶讃を浴びたものです。日本の笛の四人の素晴らしい個性を聴きわけていただけたらと考えております。太鼓6人による異色の曲、杉浦正嘉作曲「なゆた」。これは私が、「パーカッション72」の公演で聴き、とても面白く思い、和太鼓に置き替えて演奏することを提案したものです。次には、集団の若い作曲家内田とも子の、笛と打楽器の編成による第二作目、「気流」を発表初演いたします。昨年の第二回ぐるーぶ・ただ公演における第一作目が好評でしたので期待が持てます。最後に「四季」——ダンス・コンセルタントⅠ。集団の標準編成による十八番物ですが、演奏者を若手中心に組み、若い情熱あふれるアンサンブルを目ざしています。以上のような内容でいたしますので、どうぞご期待下さい。(藤倉成敏)

63

定期演奏会 近年作られたやさしい作品を集めて

Regular Concert: a collection of short pieces for easy listening.

一月二十八日(水) 午後七時開演 青山タワーホール

構成 田村拓男・稲田康

- 風と光の唄・夏の前ぶれ・雨あがり 内田とも子作曲
 ○京の春・室・虹の輪 長沢勝俊作曲
 ○小組曲(星の祭・月の出・なぎさと太陽) 三木稔作曲
 ○コトの本へ初音集より 三木稔・野坂恵子共同作曲
 ○練習曲集より 長沢勝俊作曲
 ○夕影の詩 三木稔作曲
 ○松よ 三木稔作曲

今回の演奏会は日本音楽集団の作曲家である長沢勝俊、三木稔と若手の内田とも子らの作品の中からやさしい合奏曲といったものを取り出してプログラミングしました。日本音楽集団が毎年夏に軽井沢で行なっている合奏研究会で、特に初級者の方々のために新しい合奏曲が作られており、今までこういった作品は演奏会に上げられる機会が少なかったために、一部の人にしか知られていませんでした。しかし興味ある作品が多く、合奏研究会の参加者のために愛情細やかに書かれた作品には、同時に作曲者の個性や独自性といったものも大いに感じることができました。また、演奏家の立場に立って考えますと、やさしい作品の演奏には別のむずかしさがあります。なぜならば、一見やさしそうに見える音譜をいかに理解し、それより一層深い、その上で自然でなければならぬからです。音楽の自然な表現ほど人を説得するものはないと考えます。

今回の企画はそういった意味で非常に興味のある演奏会であり、また作曲者の作品に表わされた自然な個性、独自性を理解するよいチャンスになる事と思います。大曲のならんだ演奏会にない暖かい雰囲気味わっていただければと願っています。

(稲田 康)

入場料 ●前売二〇〇〇円・当日売二五〇〇円 ●中高生席 一二〇〇円

●団体割引 一五〇〇円(十人以上の団体)

チケット取扱い 渋谷東急観光ブレイカイド・新宿チケットビュロー・銀座鳩居堂
お問い合わせ・電話予約 〇三三四〇九一五三七四(日本音楽集団)

※団体割引は集団事務局でのみ扱います。

友の会会員募集

日本音楽集団では、演奏会などの催しのお知らせや(B会員)、定期コンサート・シリーズを一括して割引値で予約できるA会員を設けております。入会は随時です。ご希望の方は次の要領でお申し込み下さい。

A会員・定期コンサート・シリーズ半年の三公演、又は一年の六公演のチケット割引と座席確保、その他の催しのお知らせ、機関誌「邦楽現代」(年二回刊、定価四〇〇円)、広報誌「邦楽現代ニュース」(随時発行)を無料で進呈しています。会費は三公演のチケット代を含み半年で五〇〇〇円、または六公演のチケット代を含み一年で一〇〇〇〇円です。

B会員・定期コンサート・シリーズ及びそれ以外の催しのお知らせ、機関誌「邦楽現代」、広報誌「邦楽現代ニュース」の無料進呈。会費は一年一〇〇〇円。
申し込み方法 (1)各演奏会場で。

(2)現金書留住所、氏名、電話を明記し、会費を添えて日本音楽集団へ。

(3)銀行振込 東京銀行渋谷支店普通預金 〇〇〇一〇〇〇〇 日本音楽集団友の会宛。住所、氏名、電話、会費を銀行振込したことを明記して事務局へ郵送。

(4)郵便振替 振替番号、東京 〇〇一〇〇〇 日本音楽集団宛。友の会入会希望と明記。

第60回定期演奏会 日本民謡を探ねて より

三木稔作曲<田舞のロンド>



客演に米谷威和男氏、小杉真貴子氏を迎えて

日本音楽集団1980年度前期写真展



第58回春の総合定期演奏会より

三木稔作曲<巨火>の演奏、指揮は客演の井上道義氏

菊地梯子

今回、初めて集団の団員外から登場願いました。華・十七絃奏者の菊地梯子さんです。一九五七年より七五年六月まで「邦楽4人の会」のメンバーとして活躍、現在はフリーの演奏家として、活発な演奏活動をなさっています。現代邦楽の黎明そして開花と共にあったという菊地さん。まず「邦楽4人の会」発足当時のことから伺いました。

菊地——「4人の会」ができた直接のきっかけと申しますのは、一九五七年モスクワで開かれた世界青年友好祭の民族楽器コンクールに、それぞれの立場から参加したことはじまりですね。当時、まだ海外での演奏は非常に少なかった時代で、吉川英史先生、山根銀二先生方のおはげましで日本から邦楽としてはじめて参加したわけです。大勢の方に見送られ、それこそその時の責任感、緊張感はいまだに忘れられません。幸い各部門で全員第一位金賞をいただく事が出来ましたが、各国の民族楽器が一堂に会し、一生懸命に演奏しているのを聴き本当に刺激されました。私自身、その当時はもっと洋楽の方を勉強しておけば良かったかな……

などと頭のどこかで考えていた時代でしたので、自分の国の楽器でその音楽を誇らしげに演奏している同世代の人達を見て、本当に日本の楽器を勉強していい良かったとしみじみ思いました。この時の強い感動がそのまま帰国して「4人の会」の結成となったわけです。

「4人の会」ははじめから現代邦楽を演奏するグループとしてだけ発足したわけではなく、とにかく日本音楽にたずさわる者の責任と誇りを持って勉強して行きたいと考えておりました。当時グループ活動はまだなく、一般的には流派の違う人達が一しよになって演奏する事で、少ない時代でした。そこを四人いけば風あたりも四分の一ですむので……、古典や近代の曲、更に四人で演奏できる曲を書いていただくという事にしました。勿論、現代邦楽などありませんし、静かな時代でした。でも洋楽畑では清水脩、間宮芳生氏が書き始めていらっしゃいました。それと芸大邦楽科一期生の鈴木嘉代子さんが間宮、石坂その他の方々に委嘱して演奏会を開いていらしたのをおぼえております。少しずつ火がとまり始めた頃ですね。私達も、モスクワから帰って

すぐ、文化放送の芸術祭番組で間宮さんの「八面の事と室内管絃楽のための協奏曲」の演奏を頼まれたりして、少しずつ現代邦楽のきざしが出てきた頃でした。それでも「4人の会」は委嘱作品を毎回書いていただくのに苦労しました。「日本の楽器まではとても手が廻らない」とか遠々のでいて断わられたりして……。はじめはとにかく曲が欲しかったものですが、どんな曲でもやってみました。それがここ数年落着いてきましたね。最近では現代邦楽のブームが終った、とかいわれておりますけれども、その時期を越えてこれから本当によい物が創られ、今までの中からよい物が残される時代だと思えます。私自身も腰を落ちつけて本

当にやりたい事をやって行きたいと思っております。

昨年の十七絃のリサイタル、今年の三人の十七絃奏者による演奏会と、その活躍が目ざましい菊地さんですが、十七絃のリサイタルとしては初めての第一回リサイタルを一九六九年になさっています。名実共十七絃の第一人者です。地味ではありますが、情熱を傾けた十七絃の歴史を伺ってみました。

菊地——十七絃の一回目のリサイタルは一九六九年にいたしました。十七絃の為の独奏曲として八風（牧野由多可作曲）を書いていただいたのが更にその四年前、





十七絃の楽器の事も、以前「音楽の世

一九六五年ですね。その当時十七絃を巡る動きをみますと、その前の年に牧野さんが「八葉花」を書いていらつしや、その中で十七絃が始めにソロで出て来たり、又「風」のできた同じ年の夏、NHKで宮下秀洲氏の十七絃を主奏にした芸術祭組の演奏を頼まれたり、他にも唯是藤一氏がソロの曲をはじめて同じ年に書いていらつしや、何となくその動きは出てきておりました。でも最初の十七絃だけのリサイタルには勇気がいらした。体力が持つかしら……、だいたい脚きに来て下さる方がいらつしやるかしら……、お客様は十人も来て下されば良い……と本当に思い込んでおりましたところ、プレイガイドの切符が売切れたとか、問合せの電話がかかって来たり。とにかく満員のお客様にびっくりしてしまいました。最近では演奏会も多くなりましたので逆にこんなわけにはいきません……。

界」に書きまされたけれども、私たちが芸大で弾いておりました頃は今の楽器よりずっと長く八尺(二・四五米)と別に小十七絃がありました。これは「さくら変奏曲」とか「朝音」等の高い調子の時に使っておりまして、とにかく楽器の数も少く、芸大のはその長いのを二つ折りにできるようにしておりました。私もまだ自分の楽器がないので何時もこれで練習をしたり演奏会には借りて行ったりしました。タクシーに乗らなくて道端で糸をゆるめて大騒ぎをしていたり、それが余り不便でしたので自分の楽器を作ります時には一人で持ち運び出来るタクシーにも乗る物を……とわざわざ琴屋さんにタクシーに乗って計ってもらい六尺四寸(一・九二米)の思い切った短小十七絃を作ってもらいました。

短くしたために音が貧弱にならないように胴を厚くしたり、糸も太くしたり、何へんも検討したあげくようやく一九五六年にはじめて小型の十七絃ができたわけです。でもこの楽器は私としてはあくまで試作のつもりでしたので……。だいたい十七絃の材料は余り上等でないものが多いので、その後琴屋さんに「固い木ではならない」と反対されたのですが、思いきってよい木質を使って、長さも自分で車を運転するようにしましたのでその小型自動車に入る最大限の大きさという事で、六尺八寸(二・〇五米)のを一九六四年に作りました。やはり少しで

も長い方が豊かな音がします。その時の材料の関係もあったかと思いますが、この二通りが今の十七絃の規格のようになってしまいましたね。

昨年は十七絃のリサイタルが三つも重なりまして、本当に嬉しいと思いました。去年の春頃からずっと大勢の方の力を借りてリサイタルの他に何かしてみたいと考えていたものですから、丁度これを機会に宮本幸子さん、沢井一恵さんにお声をかけて今年の六月に一しよに演奏会をいたしました。はじめて、その楽器の事、爪の事、弾き方も話したり話し合ったりしてとても勉強になりました。日本で生れた数少ない低音楽器の一つとしてもっと可能性はあると思いますし、多くの方にも弾いていただけたらと思います。

しい曲やら、練習曲・アンサンブルの曲など十七絃のための曲をふやして行きたいと思っております。又メンバーも特定のグループでなくフリーな気持で十七絃を本当に弾く方が集まったらよいと思っております。おかげさまでグループの会も好評のようであつた五月に又する事にいたしました。今秋はリサイタルをいたします。

左記の如く、みごとなプログラムによる第三回目のリサイタル。

動物が好きで、登山とかスキーなど行動的なところがあるとおっしゃる菊地さん。もの静かな言葉の裏には、未来へ向けての決意が伺われました。

(レポーター 電島素子)

昭和五十五年文化庁芸術祭参加 菊地梯子十七絃によるリサイタル

- 十七絃のためのみだれによる変奏(奏・初演)／広瀬量平
- 十七絃独奏のための夜想曲(奏・初演)／野田雄行
- 十七絃とヴァイオリンのための奏(奏・初演)／一柳慧
- 十七絃のための独奏曲(後編)(奏・初演)／二善晃

十一月一日(土)午後七時開演 東京文化会館小ホール
 入場料 二〇〇〇円(全自由席)
 ■マネジメント■カメラ・トウキョウ・三〇五・六〇八一

藤舎成敏

藤舎成敏。当年とって35歳。長明囃子方、日本音楽集団の打楽器奏者である。近年、現代邦楽関係では集団の笛と打楽器の奏者が集まって作った「ぐるーぶ・ただ」のメンバーとしても活躍中——。

最近はお仕事が多いということですので作曲のお話から伺いました。

藤舎——そうですね、僕は演奏家で、作曲するといっても、演奏のあい間でやっているようなことで、たいしたことではないのですが、曲を書く事は好きです。僕にとって、演奏と作曲は相乗効果があると思います。この8月も二つ作曲を頼まれました。一つは、NHK委嘱で、芸術祭参加候補曲へ一休V。杉浦弘和氏が長唄、僕が囃子を担当しました。もう一つは舞踊のためのもので、現代の三番叟といったねらいの打楽器と笛と声だけの曲です。僕は曲を書く時に、集団で学んでいるような現代邦楽のものと、古典の持つ良さの、両方の特徴を生かしたものが書けたら、と思っています。

仕事の範囲は古典の占める割合が多いから、それだけのめり込んでしまいがち。そうすると他が見えなくなってしまう

う危険性があるので、僕にとって、集団があつて、「ぐるーぶ・ただ」があつて、その他にも、色々の交流が必要だと思っています。昨年は集団の運営委員をしていましたが、夜中までいろんな話合いに加つて、途中で脱線することも多かったのですが、それも大変得るところがありました。例えば三木さんと話をしていて、僕と違う発想で答えがバーンと返つて来る。そこで僕も考える。こういう考え方もあるんだなって……。そういう意味で、集団は絶対必要だと思っています。僕ぐらいの歳になつてくると、仕事にも、仕事以外にも時間をとられることが多くなり、色々な社会的制約も増えて来るでしょ。毎日の時間に追われて、何か月も過ぎてしまふ……。それをやりながら、みんな前進しているのですが、時には、一年位仕事を離れる勇氣をもって、喰えなくても、裸になつて、勉強し直したいと思っていますね。一步、前に進むには。

常に己の姿を正確に捉え、且つ回りの状況を理解して最上の道を進むために努力を惜しまない人。お話を聞いていると、その若々しくてひたむきな姿勢が好感を

呼びます。

「ぐるーぶ・ただ」の他にも、藤舎さんは持ち前の勉強熱心さと自称「言い出しっぺ」でもって、勉強会を自ら推進したりして、古典に現代邦楽にと活躍しているらしいです。

藤舎——毎月「囃子研究会」というのをやっています。古典の曲であまり最近取り上げられない曲や、くずれてきている曲を、正確に伝承したいという気持ちから、今のうちに先輩から習って覚えておこうということなんです。今の藤舎昌船が色々なことを知っているので教えてもらいながら勉強し、月一回非公開ですが勉強会を開き、お互いに聞き合いながらやっているんです。

それから、十一月に僕が企画する集団の音楽会「笛・打楽器特集」。これは、最近の集団の演奏会を見ていて、技術的には向上して洗練されているけれど、演奏会の回数が多いこともあって、お客さんも演奏家も慣れて冷静になつてしまっている部分があるようです。だからこんどは、なにかカーッとした熱気のあるものが欲しくて、プログラムを構成しました。最後の八四季——ダンス・コンIVは、出演したいという希望者を募って若





手中心に演奏者を組み、高橋君（集団団員）に指揮と指導を任せ、技術上のことも重要だけど、若手で燃えた演奏をしてもらいたいということなんです。

この演奏会には他にもいくつかのポイントがあります。もう一つは笛の藤告雄さんをお招きということ。集団には望月太八君、藤崎重康君、それに西川浩平君という笛奏者がいますが、この三人の個性に藤告雄さんが加わったら、違った色合いが出ておもしろいのではないかと思います。もう一つには、集団の打楽器奏者の特色を生かすことです。きつとうまくゆくとおもいます。

古典の世界では三十代はまだカキ。五十過ぎて一人前になるわけで、その時に良い演奏家になっているためには、正確

すべてにわたって、研究熱心。恐れ入りました。（レポーター 霞島美子）

な判断力と、柔軟性のある考え方、次の世代への正しい指導力などを養わなければなりません。そのために今のうちに色々な経験を……。今は競馬で言えばパドックでぐるぐる回っている。まだ、ドンと走り出していい状態ですね。

まじめな話が続いたので、遊びの話でも聞かせて下さい。

藤告——そうねえ。息を抜くときはお酒を飲みます。神経が高ぶって寝られないから。趣味はゴルフ、でもこれは下手の横好き。他に今は暇がないからあまりやりませんけど、将棋とマージャンが好きです。それから料理をするのが好きで、カレーやシチューが得意です。スパイスなんか二十種ほど入れて、家にみえた方に無理に食べさせて、おいしいおいしいと言わせます。ほかには漬物が好きで……漬物というのはちよっとした酔っぱらい味があるでしょ、それがおいしい。何で酔っぱらい味があるかというと乳酸菌が醗酵するかららしいの。それで実験的に酢に乳酸菌入れたのに入れたいのを作って味を比べたり。それからよく櫛に針を入れて鉄分を採るでしょ、でも針だと手を突込むと危いから、代りにパチンコの玉を入れたり。ビールを入れたり。

遠い日のことではない

宇宙にひとときわ輝く織女と牽牛のロマンはわれら永遠のテーマ。
くる〜ぶだだが打楽器で追ひ哀調の七夕伝説!!

組曲七夕伝説 / だだ

SIDE A:

1. 天空〜ふたつの星
2. 最愛〜天上流れる川
3. 織女〜心に秘めた愛
4. 牽牛〜愛の軌跡

■30cmステレオLPレコード ■ETP-72324 ¥2,300

SIDE B:

1. 祈願〜ふたりの架け橋
2. 燃焼〜七夕の恋
3. 雷鳴〜別離の時
4. 静寂〜ふたつの星

だだ

望月 太八 (西川 浩平)

■リズム・セクション

ミルキー・ウェイ

■作曲・編曲

角田圭伊信

くる〜ぶ

藤谷 成敬

壁田 啓輝

尾崎 太一

高橋 明邦

黒坂 昇

七夕伝説

心への音楽

TOSHIBA EMI

●お問合せは——東芝EMI㈱ 第三制作部へ

〒107 東京都港区赤坂2-2-17 ☎03(585)1111(代)

日本音楽集団一九八〇年度西日本公演同行記

今回の地方公演には、日本音楽集団と協力関係にある、(株)ジャパン・アーツの山本テルミさん(九州方面)六月十五日(十八日)と久保敬義さん(中国・四国地方)六月二十日(二十七日)のお二人が同行しましたので、田外の方の新鮮な目で見た演奏旅行記を書いていただきました。

尚、この演奏旅行についての詳しいデータは本誌前号(九号)の40ページをご覧ください。

聴衆の輪を広げるために 山本テルミ

例年ならば梅雨の最中だというのに太陽はまぶしく照りつけ、さっと降り止む夕立は真夏そのものである。そんな天気続きのなかで九州公演。五日間で五ヶ所を駆け巡るといった忙しいスケジュール。移動と公演をこなさなければならぬ毎日に加えてその暑さである。団員の体調が気がかりだった。が、あに図らん。全員元気満腹。それも目を追ってハッラツかげんは増加されていくようであり、公演内容も充実されていく。まったくエネルギーが豊富な集団である。

今回の九州公演のうち大牟田、佐賀、福岡は労音との共催による。労音では以前から日本の民族音楽を再認識しようというこ

とで、その企画がのぼる度に日本音楽集団の名が上がっていた。しかし過去に大阪と名古屋で実現したのみで、その後数年を待っていた。ところが昨年、独特の民族楽器を保持する沖縄での公演を望む声が集団からあがり、その方面での働きかけをしていたところ、では九州でもということになり、九州労音が初めて音楽集団に取り組みることになった。――

ところが、労音ではいざ取り組みの段になるといざとまじいを感じたらしい。邦楽器によるオーケストラといっても洋楽のそれとは違うだろうし、だいたい、小さく、広がりをもたない音の邦楽器が大きな会場で耐えられるのだろうか。会員連にどのような働きかけをしていったらよいのであろうか等々である。私達の仕事でもそうであるが、初めての演奏者に取り組みときは諸々の疑問が付きまとう。それで勉強会が開かれ、そのなかで自分を納得させ自信をもたせる。そうしなければ他の人にアピールして売り込めないのである。また音楽集団の側でも、ただ公演するだけでは彼らの主義・主張を伝えることができないということでも、動家を集めての勉強会が準備され、三木先生がテープを携えて九州へ出かけてい

った。そして活動家達がテープ片手に取り組み始めたのであるが、また広範な活動にいたってない音楽集団の名を知る人は少なく、たいが苦戦したようである。演奏会の入りは各地ともいまひとつであった。けれど足を運んでくれた聴衆は、一様に熱心で、音楽を聞く姿勢を感じさせてくれる良い聴衆であった。演奏会後に集められたアンケートには、今まで邦楽に関心をもちなかつた人が初めてその音を聞き、そんなにも美しく素晴らしい音を奏でる邦楽器に、そしてそのアンサンブルに感動し、興味を示してくれたことが書かれていた。集団は今まで彼らの手だけでコンサート作りをやっていた。汗を顔に浮かべさせて一生懸命やっていた。しかしその活動にも限界がある。

音楽集団は年に六回の定期公演を行っているが、そのチケットを各団員が自分たちの手で売らなければならない。大きな負担である。演奏家が自らの演奏会を準備するに当って、演奏以外の離れたところで汗を流すのは当然ともいえるが、それがあまりな負担となってしまうようでは無視できない。彼らの負担を少しでも軽くしてあげたいと切実に思う。それにはやはり彼らの活動を支える聴衆の輪の拡がり、そして組織が必要である。音楽鑑賞団体として運動を展開する労音

は、その意味で彼らにとって大きな存在になりえるのではないだろうか。九州労音は彼らにひとつの拠り所を与えてくれた。来年は、関東近辺労音が日本音楽集団に取り組み。

舞台と聴衆がいつしよに 燃焼できた 久保敬義

「毎日、演奏することがものすごく楽しかった」と、演奏家が感想を述べられる演奏旅行は、そうぞらにあるものではない。九州公演に引きつづいて行なわれた四国・中国地方の演奏会は、そうした点でも、今後の音楽集団の活動にとって、貴重な成果を残した旅行となったのではないだろうか。それは、客席で聴き回る旅となった私にとっては、「音楽というものは生きているんだ」と、つくづく思い知らされた旅行でもあった。迷いや悩みを持たずに生きている人間はいないに違いない。時に、音楽は、その深い悲しみを慰め、そして時には、何物にも増して勇気を与え、鼓舞激励してくれる。

この演奏旅行中、団員の口から「今日は燃えた!」という言葉が何度も出た。だが、燃えたのは演奏家だけではなかった。徐々に熱気の高まって行く客席の中で「優れた聴衆は、優れた音楽家を創り

出す力を持つ」ということを、実感させられた旅行でもあった。聴衆が、演奏家と一体となって燃え始める時、形としては受身である聴衆が、絶妙な、無形の創造力を発揮する。時には、聴衆が演奏家をリモートコントロールしているかのような感じに陥ることさえあった。それは、一種の「生命の賛歌」ともいうべき、感動的な出会いでもあった。

私にとって、数多くの示唆を与えてくれた音楽集団の四国・中国地方公演旅行は六月二十日より二十七日まで行なわれ、公演地は、岡山、高松、大成功でデビューを飾った高知、三木さんの出身の徳島、松山、広島、そして、大阪の学校公演、天理と続く。その間に、昼に、高知で生徒を対象として、徳島で三木さんの母校、城南高校の学校公演も開かれた。私が、日本音楽集団の皆さんと旅行するのは、二ヶ月にわたって行なわれた七八年の海外演奏旅行以来だから、約一年半ぶりとなる。日常、音楽の世界で働いている私に、日本の楽器の持つバイタリティーをたたきつけてきたこの集団が、この日本で、二時間という枠の中で、聴衆とどのような会話をするのか、どこまで聴衆の心に迫っていくか、実に興味深く演奏会の日を待っていたわけである。

その演奏会の一つ一つを書いていたらばいくら紙数があっても足りないくらいである。旅行中メンバーの大部分が入れ替って、初日のような緊張感に満ちた岡山、会場条件の良い中で、二曲目のアンコールが済んでも誰も席を立たないまでに盛り上げてしまった高松。この日三曲目のアンコールが始まるまでが、とても面白かった。集団の方は最初から二曲ということになっていたので、すでに何人かの人は衣裳も着替えてしまっていた。三木さんが最後のあいさつをしてもまだ誰も席を立たない。三木さんも引いて「えー、困りました。」といったのは多分本音だったでしょう。そして、ステージにむかって「このメンバーで何か出来ますか?」聴衆の暖い笑顔が、その一言一言を包んでいく。そして、この日以後、アンコールは三曲となくなっていった。

高知。彼らにとって、初めての演奏地であるこの南国の地で、音楽集団が燃えた。その炎は、半年余にわたって演奏会を準備してくれた貴重な人々の苦勞をも焼きつくしたに違いない。「生涯で最も興奮した演奏会でした」と評してくれた副館長の岡本さんの、壮快な笑顔が忘れられない。巨大火の後半の、打楽器のカデンツァの途中で拍手が入り出したのは、この日から。

徳島。衆参同時選挙の開票日という運の悪さなのに、会場は超満員。巨大火の打楽器のカデンツァに、ハア波踊りVが飛び出した。それは盛大な「祭り」であった。多数の聴衆が、様々な喜びや悲しみを集めて繰り広げるあの「祭り」の世界である。そして、この世界は、広島での演奏会全員の「おしゃもじ」によるカデンツァへとひきつがれていく。女性軍が、たすきをかけ始めたのはどこからだったろうか。多分、高知ではないかと思う。それに、徳島から、雷の男性軍の白たすきも加わった。

彼らの演奏会が力強いバイタリティーと、生命の輝きにも似た光に満ちあふれたものであることは、一度お聴きになった方には十分に感じとっておられることだろう。だが、今回の旅行で、この演奏グループを取り巻く状況が深い所で動き始めているように感じたのは、私だけだろうか。今度の旅行で、彼等は全く新しい分野の聴衆と巡り合い始めた。そして、これまでの協力者とも違う、新たな熱気あふれる支持者とも出会い始めている。

そうして、この点を正確に述べておかなければならないと思うのだが、この新たな人々との出会いは、お互いが独自の立場で、この日本の文化をどうするのかという努力の積み重ねの上に、いわば必然的に生み出されてきた出会いであるという点であろう。したがって、こうした連帯が生み出されてきていることは、それだけ音楽集団の活動が幅広く広がってきたということのみを、意味するものではないだろう。より根本的には、今、音楽を愛する人々が、様々な角度から手をさしのべ合い、協力し合わなければならない状況にきているということも示している

ように思われる。個々バラバラの努力でなく、心から手を握り合い、誠実な協力関係を生み出していくことの大切さを感じ続けているのは私だけではない。客席の側からすると、そんな連帯を感じられる演奏家に巡り合えた喜びが、燃えた。根底にあったというのは、言い過ぎであらうか。音楽に燃焼するのは、音楽家だけが持っている権利ではあるまい。聴く側も、それぞれの人生に裏打ちされて、燃焼していく。だからこそ、一つの演奏会が、人生の「美しい出会い」ともなる。

今、この原稿を、スロバキア少年少女合唱団の随行中に書いている。本来の意図がグセのせいで、メロを大分過ぎてしまった。だが環境が変わってしまうと、別の視点も生まれる。この海外の子供達も、自分達の文化、自分達の音楽を大切に、そして、限らない「誇り」を持っている。そして、同時に、電車に老人が果てくれば、一斉に立上る心のやさしさも。そんな彼等を見ていると、「一体、我々は……」と考えさせられてしまう。「考えてみれば、日本の楽器が珍しいなどということは、おかしいことだ」と書かれてあった中学生の感想文。大きな成功を取った音楽集団の西日本公演だが、どうやら、この程度の成功でこの集団が満足してはならないようである。この次、また公演旅行に同行できる日まで、彼等がどこまで進んでいるか、楽しみである。

—邦楽堂ニュース—

もう、邦楽堂にサンタクロースがやってきた！

琴・三味線・尺八

冬のボーナス払い

お取扱いをはじめています。(手数料不要。
お支払日56年1月6日)

★よりぬきの新製品が入荷しました！

～サービス品の一例～

三味線

琴

花林おけいこ用 38,000円

琴おけいこ用 29,800円

花林小唄 52,000円

花林角巻 58,000円

花林地唄 58,000円

紫檀角巻 65,000円

アフターサービスの店



株式会社 邦楽堂

直営店

府中本店 ☎0423-63-3621

町田店 ☎0427-26-6911

調布店 ☎0424-83-3333

新宿店 ☎03-348-4921

所沢店 ☎0429-23-3301

明大前店 ☎03-324-2011

立川店 ☎0425-24-0590

FC店・西八王子店・久米川店・柏店・千葉店・福生店

中学校の音楽の先生、朗報です！

新学習指導要領(56年実施)の日本の伝統音楽の扱いについて

すばらしい学習の為の新教材が生まれました。

新学習指導要領準拠・ビデオ教材

美しい日本の音楽

(指導マニュアル付)

総監修 ● 吉田英史

学 年	名 称	監修・指導・演奏
第一学年	箏 曲 編	中能島欣一 ● 人間国宝 / 芸術院会員 / 東京芸術大学名誉教授
第二学年	長 唄 編	杵屋六左衛門 ● 人間国宝 / 芸術院会員 / 長唄協会会長 今藤長十郎 ● 長唄協会副会長
第三学年	尺 八 編	山口五郎 ● 竹盟社宗家

企画・製作 ● (株)ハーティー TEL:03(262)7545

発売元 ● (株)ニッパン・ポニー TEL:03(667)3741

* 斯界の最高峰の音楽家が日本の伝統音楽の現状を憂慮し愛情と情熱と使命感をもって中学生に伝えるべく、製作に参加!!

* 伝統音楽鑑賞のポイントを示し、中学生に充分理解できるよう楽器の特質から奏法に至るまで、魅力あふれる解説と演奏、日本の伝統音楽の美の世界を展開した画期的新教材です。

季刊邦楽

定価980円
B5判

年間購読ご希望の方は、何号よりと明記の上、4,500円(送料共)を下記へお送りください。

〒105東京都港区虎ノ門1丁目19番14号 邦楽ビル2F 株式会社 邦楽社 Tel.03(591)7271(代)

20号

●特集 みだれ・名曲のルーツⅢ

現在のくみだれの楽曲分析
箏曲「乱」から筑紫流「倫説」まで
楽箏における輪説

- ◎「季刊邦楽」総目録
- ◎芸大邦楽科設置秘話
- ◎邦楽雑誌の歴史

- ・心中もの——お染・久松雅考——
- ・宮城道雄ゆかりの地と春の海をたずねる旅
- ・邦楽の天才児を発掘

21号

●特集 すががき・名曲のルーツⅣ

三味線、尺八曲、箏曲、和琴の「すががき」

- ◎箏組歌と源氏物語
- ◎邦楽コンクールの報告
- ◎懸賞論文発表
「邦楽を発展させるにはどうしたらよいか？」
- ◎国立劇場に寄席もできました

- ・稽古事のルールと師弟関係三態
- ・十輪寺・業平忌三弦大法要
- ・松浦検校と八重崎検校

22号

●特集 小町もの・名曲のルーツⅤ

箏曲・地歌、長唄と清元、常磐津、一中節、
小うた、謡曲の「小町もの」
小野小町の伝承像

- ◎芸術祭の邦楽／邦楽界総決算
- ◎インドネシア音楽舞踊体験記
- ◎民謡ブームの背景

- ・箏曲の新しい教育法
- ・日本音楽に対する最近の学生の動向について
- ・邦楽家と飲食物
- ・胡弓(中国の胡琴)

23号

●特集 さらし・名曲のルーツⅥ

現代曲、箏曲・地歌、長唄と常磐津の「さらし」
歌舞伎舞踊、鳴物の「さらし」、布さらしの話

- ◎韓国音楽研修旅行
韓国に儒教の雅楽を聴く
韓国孔子廟雅楽と国楽を聴く旅
- ◎津大夫芸話
- ◎海外で邦楽を演奏する人への助言
- ・盲人の調律器“四穴”について
- ・盆踊・盆唄——その歴史と特徴——
- ・箏と子どもたち
- ・沖縄の芸能の現状

新作品

万葉箏

新発売

大好評!!

奏者の手により

調弦が自由自在



3つの特長

- 二段式竜角
低音部一の絃～四の絃迄の竜角を下げ絃の長さを長くすることにより余韻の良い低音とする。
- 特許申請中糸絡機
絃機のネジを二重にし、さらに内部に金属板をはめ込み、ゆるみをなくした上、余韻を良くするという二重効果。
- 良質の材料
竜角はすべて紅木材を使用、あくまで音色の良さを、ねらう。甲良は会津桐を使用。

発売元

株式会社

村松屋

東京都世田谷区上馬 2-32-10 電話 03-411-2006
富山営業所 電話 0766-25-6330

和楽器専門店

御琴 三絃 尺八 並びに 附属品

諸先生作曲練習本取揃 別荘楽器製作承ります
クレジット販売も致しております

老舗

金善

かな ぜん

京・東山区大和田大路四条下ル二丁目

TEL (〇七五) 五六一二九四〇・五四一・〇三九



株式会社

ツタヤ楽器

琴、三絃専門製造販売

〒106 大阪市南区船場屋町二二

TEL (二二二) 一六七二・七七二九

工場 八尾市大字太田二二九八

TEL (〇七二九) 四九一・四三三

琴の座

胴の座



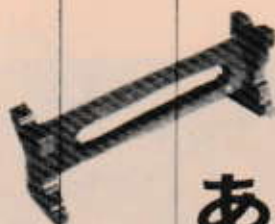
胴掛ゴム

あすか琴台

(高低両用)

本鹿皮口前・尾布

(セット)



全国有名デパート
楽器店にて
お求め下さい



琴の座 / 実用新案登録第968205号
胴の座 / 実用新案登録第968204号
あすか琴台 / 実用新案登録第143861号

二十絃箏



日本音楽集団推薦

琴光堂和楽器店

■東京都世田谷区赤堤2丁目25-7 TEL 03(328)2802



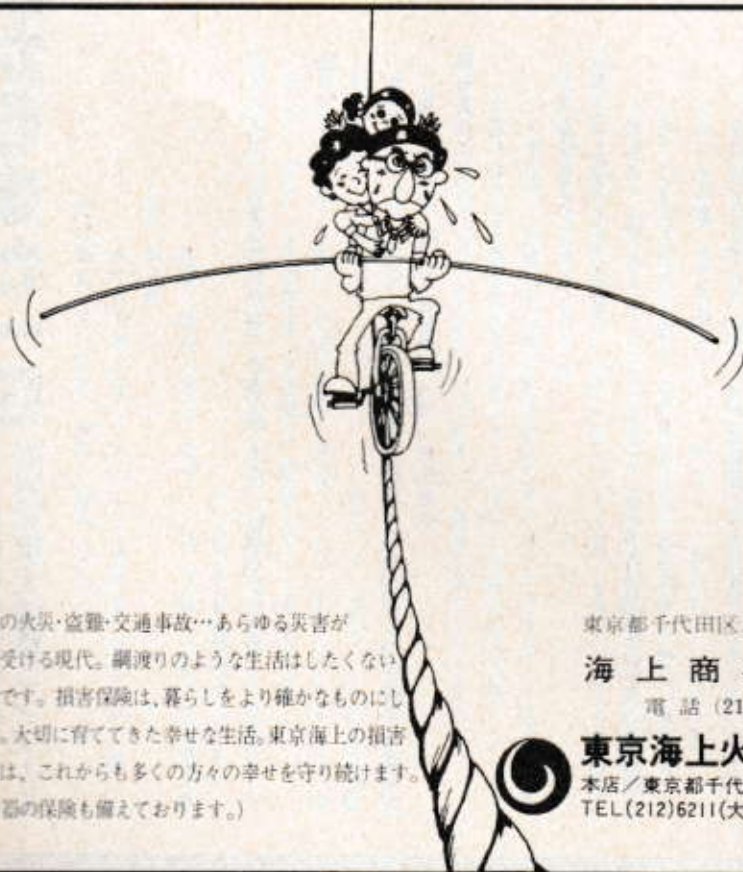
地球の遺産…石油を大切に使いましょう。

われわれの住む地球は、はかりしれない神秘的営みを繰返してきた。その長い生いたちの中で、さまざまな微生物は降る雪の如く堆積し、生まれかわる日を持ちながら、海の底深く眠り続けた……………。

そして数億年、それは石油に姿をかえた。石油を求めて人類がたどってきた長い道のり。われわれは、この地球からの恩恵である石油を大切に使用しなければならない。

出光

出光興産株式会社



あなたの楽器も
危険にさらされています。
火事・破損・盗難にそなえ
保険をかけましょう。

突然の火災・盗難・交通事故…あらゆる災害が待ち受ける現代。綱渡りのような生活はしたくないものです。損害保険は、暮らしをより確かなものにします。大切に育ててきた幸せな生活。東京海上の損害保険は、これからも多くの方々の幸せを守り続けます。
(楽器の保険も備えております。)

東京都千代田区丸の内1-2-1

海上商事株式会社

電話 (212) 0866 代表

東京海上火災保険株式会社

本店/東京都千代田区丸の内1-2-1
TEL(212)6211(大代表)

激奏ヤング・パワー、集団からまた一位 日本伝統楽器による 第四回現代演奏コンクール

去る九月二十二日(月)に本選の行われた、パシムジック・フュスデヴィヴル5「第四回現代演奏コンクールへ新しい伝統の創造へ」(東京音楽企画研究所および東京ゲート・インスティテュート主催、在日ドイツ大使館後援、審査委員長・石井真木)で、日本音楽集団の滝田美智子(二十絃等)が、「華やき」(三木松作曲)を演奏し、見事、独奏部門の第一位に入賞、あわせて同コンクールの最高賞であるドイツ大使賞(賞金四十万円)を獲得した。これにより、洋楽器対象であった第二回を除き、日本音楽集団では同コンクールに毎回一位入賞者を出したことになる。

滝田は前回は三位に入賞しており、一年間の成果を示したものである。弱冠二十二歳の若きソリストの誕生には頼もしいものがある。謙虚さを忘れずに今後の活躍を大いに期待したい。

次はこのコンクールの開催趣旨、審査結果、審査方法などの要領である。

■趣旨(申し込み要項より)——第四回を迎える本年は、昨年に引き続き「日本の伝統楽器の現代演奏コンクール」を開催します。本コンクールは、日本の多くのコンクールが、西洋クラシック音楽に偏しているのに対して、現代作品の演奏によって真に現代に共感をもって生きる新しい音楽家を求めようとするものです。これまでの日本伝統楽器のコンクールでは、尺八、箏の参加が特に多く注目をおびましたが、本コンクールとしては、尺八、箏同様他の伝統楽器奏者の参加も大いに歓迎します。新しい伝統の創造のために自発性に富むすぐれた人びとの参加を期待します。

■入賞者と演奏曲目

独奏部門 一位・ドイツ大使賞

滝田美智子(二十絃等) 華やき(三木松作曲)

二位 菅原久仁義(尺八) 詩曲二番(三木松作曲)

三位 井原 潤子(十七絃) 火車(沢井忠夫作曲)

合奏部門 一位・石井五郎賞

八島 興作・栗林 秀明 雲煙(田中賢作曲)

二位・審査員賞(沢井・鶴田・野坂・秋山)
菅原久仁義・菅原 章子 上弦の曲(沢井忠夫作曲)

三位・奨励賞
高橋 輝久・横山 康子 尺八と箏のための協奏的三重奏(入野義朗作曲)

■応募者数——独奏部門20名、合奏部門8組、独奏部門は能管1、尺八3、三味線3、箏8、二十絃箏2、十七絃2、胡弓1

■今回の審査員

審査委員長 石井真木

審査委員(ABC順) 秋山邦清・藤田正典・野坂恵子・沢井忠夫・芝祐靖

東儀和太郎・鶴田錦史・山口五郎・横山勝也

■審査採点法について

本選の審査は十点法で行われました。

○独奏部門、合奏部門は各々別に採点。

○採点基準は次の通り

1点(4点) 落選、5点(7点) 入賞、8点(10点) 高位入賞

○審査員的全採点から上下限点を除き、その合計点が32点以下の場合落選、40点以上56点の場合、点数順に入賞、64点以上の場合最高賞(ドイツ大使賞、石井五郎賞)

今回は審査員全員の合議により最高賞が出されました。

(注)各審査員は入賞すべき各部門3人以上に5点以上の点数を入れてはならない。

滝田美智子プロフィール——NHK育成会二十二期卒業。東京音楽大学教育科

邦楽演奏コース在学中。日本音楽集団、野坂恵子二十絃等エコー、箏

曲松の実会に所属。野坂操寿、恵子に師事。一九七九年「伝統楽器の現代演奏コンクール」独奏部門第三位奨励賞、一九八〇年同コンクール独

奏部門第一位ドイツ大使賞受賞。

■本選の点数表

○独奏部門

審判員	1	2	3	4	5	6	7	8
石井	4	9	4	8	4	8	8	6
秋山	4	9	8	6	8	4	3	6
沢井	8	8	3	5	2	2	8	8
芝	4	6	4	4	3	3	5	5
鶴田	3	8	4	5	4	4	6	6
東儀	4	4	4	4	4	8	6	5
野坂	3	9	10	8	4	3	3	8
藤田	3	8	4	6	4	3	3	8
山口	8	9	4	8	3	2	4	8
横山	3	10	4	4	4	3	9	9
合計	28	62	31	42	24	25	33	53

○合奏部門

1	2	3
8	8	7
6	6	6
6	6	9
8	5	8
8	8	6
4	5	6
6	8	10
7	7	9
7	7	8
8	8	9
49	54	60

(注1) 右の表のうち、独奏部門は②が一位滝田、③が二位菅原、④が三位井原、合奏部門では、③が一位八島組、②が二位菅原組、①が三位高橋組。

(注2) X印は、採点法の中の、全採点の中から上下限を除く。に該当する。

このコンクールは過去三回行われました。第二回は洋楽器奏者対象でしたが、第一回と第三回は邦楽器奏者対象でした。その記録は次の通りです。

■第一回入賞者と演奏曲目(一九七六年)

独奏部門 一位 三橋 貴風(尺八) △竹鶴五章▽諸井誠作曲

二位 関 一郎(尺八) △寔▽福島和夫作曲

三位 赤尾三千子(竜笛) △寔▽福島和夫作曲

合奏部門 一位・ドイツ大使賞

半田 淳子・田嶋 直士 △エクリプス▽武満徹作曲

二位 森 千恵子・中谷 勝子 △華双重▽三木稔作曲

三位 井原 潤子・樋口真知子・福水千恵子 △三面の争のための音楽▽関宮芳生作曲

■第三回入賞者と演奏曲目(一九七九年)

独奏部門 一位・ドイツ大使賞

西潟 昭子(箏) △争のためのたゆたい▽藤原真作曲

福水千恵子(箏) △風紋▽牧野由多可作曲

三位 滝田美智子(二十絃箏) △竜田の曲▽三木稔作曲

合奏部門 一位・石井五郎賞

吉村 七重・木村 玲子 △二十絃箏と十七絃のための二つのファンタジー▽入野義朗作曲

二位 佐野 鈴罪・田島 美穂 △尺八と箏のための協奏的二重奏▽入野義朗作曲

三位 井原 潤子・古屋 輝夫 △箏秘抄▽肥後一郎作曲

(以上、ゴシックは日本音楽集団の所属者である)

邦楽現代第十号発行の機に 日本音楽集団十六年の歩みから

本誌「邦楽現代」も読者の熱い眼差しを集めつつ、第十号を迎えました。年二回刊で、九五年になります。この十号を記念し、日本音楽集団と共に歩んできて、現在幹部として活躍中の団員五名に、「私と日本音楽集団」というテーマで一文中を寄せてもらいました。この十六年間の体験談が、十一号からの新たな一歩への足跡にしたいと思います。

私と日本音楽集団

代表 長沢勝俊

日本音楽集団結成以来十六年、私は自分の音楽生活の約半分をこの集団と共に生きてきたわけです。そしてこの間、邦楽界のために約四十曲程の作品を書き続け、団の運営に参加してきました。一人の人間がその使命感のみで、この長丁場をのりきるといことは容易なことではありません。これ程までに私をかき立てた集団の魅力とは何だったのでしょうか。そこには真摯に懸命に生きて行く演奏家の血の通った音楽があり、現代邦楽に對する大らかな夢と進歩があったからで

す。一十一が二になるのではなく、三にも四にもなる若々しいエネルギーが常にあふれ、夢を現実のものとして具現し新しい発見をかちとってきました。

とはいっても、集団十六年の歴史はいつも燃えに燃えたバラ色にいろどられた連続であつたわけではありませんでした。現実の厳しさは私達を宴のあとにのしらじらしさにおいやり、また無力感におとし入れたことのあつたのも事実です。

しかし団員はこのマイナス要因をプラスに転化させ、次なる飛躍の場を作り出す知恵と勇氣とエネルギーを持ち合わせていました。これこそが本場の集団の魅力であり活力源であつたと信じています。

今年の夏は史上まれにみる冷夏、そしてさまざまな事故があいつき起りました。八十年代がどのような時代になるか予想もつきませんが、政治、経済、文化の間題等、どれ一つをとっても日本が大きな

転機に立っていることは否めない現実でしょう。集団がこれらの事象と無関係に生き続けることは、現代に対する発言を放棄してしまうことにつながります。そしてそれは現代の日本音楽を創造するという、集団の存在意義を問われることです。

私自身、現在、大きな「転機」のなかにいると思っています。集団の作曲家として、また団の運営をつかさどる一員として、さまざまな葛藤のなかにいます。

「転機」とは転換の時機のことです。それはただ時流におもねて方向転換をするのではなく、とどまるのでもなく、逆もどりするのでもなく、前にもまして衝動に油を利かせて、現実をしっかりと見すえて前進することだと自戒しています。

集団では現在、若くなくとも力が大さく育ってきました。この若い諸君達は集団の中堅として、また他の分野でたのもし活動な活動を展開しています。

かつて私は第一期研究団員による新人演奏会のために「みち」という曲を作曲しました。その解説のなかで「この曲は先輩として新人に進むべきへみち」を指示するなどという大それたことでなく、

若いエネルギーと共に次なる新しいへみちをめざして歩んでいきたいという願いでかいたものです」と書きました。また作曲の三木さんは「バーティン・ベイン」という曲を作曲し、参加の必要を強くうたえました。今年の三月には、第四回新人演奏会で私の「朱輪金鈴」改訂版が中堅団員の協力を得て行なわれ、そのういういしい音楽づくりが心に残りしました。私の若い演奏家に対する期待と信頼は今も決して変わっていません。

しかしその「みち」が当時よりはるかに困難になり、また複雑になっているのも現実です。集団も一つの「転機」にあるともいえましよう。

「初心にかえる」という言葉がよく使われます。これが単なる観念的な合言葉としてとりかわされるだけでなく、団員全部が自分達の歩んできた「みち」を謙虚にふり返ってみることが必要でしょう。そして各人が初心を大切にしながらこの「転機」を見事に生きぬいていくこと、これが集団の新しい「みち」を切り開き次の大きな飛躍に導く方法だと思っています。

あいのサイクル

音楽監督 三木稔

出会いという美しいことがある。
出会いには、不可避のせめぎ合いを経て
はじめて真の友愛に至る。美しいことは
の陰で、苦しい部分は忘れがちな。

日本音楽集団は、たしかに多くの出会いを
あわせ持つことができた。素敵な才能や
技術を秘めた若い邦楽演奏家たちと、
彼らには未知の存在であった作曲家・ス
タッフ。邦楽と洋楽。伝承的な型と不確
定で可変の現代。個と群。そういった発
想や次元を異にするものの縦横無尽の出
会いがエネルギーを生んだ。

現代邦楽ブームといわれた七十年代は
じめまでの七、八年の間に、あらかたの
出会いは終って、一見凡庸な外見の中で
のせめぎ合いが始まっていた。この中で、
ハンダリーに耐えながら努力し続ける者
が次のブームの頂点に立つのだ、と心あ
る奏者たちに檄をよこした。

更に七、八年経った現在に至るまでに、
ディスカバー・ジャパンの風潮に乗って、
努力を伴わない邦楽ブーム・古典ブーム

や安手の芸能ブームがあった。自分たち
の浮力によるのでなくて、マスプロの訪
書というウキに助けられただけだ。

団員たちの中には、ハンダリーに耐え
られなくて脱落したり、音楽の方向が違
うという理由で去ったり、安直に金にな
る周辺のブームにさそわれて離れて行く
人たちが当然いた。仲間を失うことは淋
しくも厳しいことであつたが、私たちは
そのことに抗う気力を、次の創造行為や、
より自在な奏者の鼓舞に向けてるようにな
っていた。

数年前まで、いつとはなしに企画にた
ずさわる立場になっていた私は、団のこ
とは隔々まで心得て、その上で迅速に着
想し行動に移すことができた。こういう
創造的な集団は、危険な敵前転回のような
ことでも、充分な計算をもって常に若
若しく行われる豪胆なフレイシビリティ
をもっているわけではない、と信じて
きた。

だが、成長する全てに関わりつづける
ことはできない。長沢さんや私たちが、
この活動にボランティア的に割く時間は
一向に減らないが、現在の私は、とても
五十数人の動向を知るわけにはいかない
し、事務上の経過など何分の一しか心得
ていない。運営を、より若い人たちにま
かせ、その人たちの自主性を尊重しよう
とすれば、型式的な手続さも経なければ
ならないから、もはや過去のように迅速
に企画を現実化できない。まして、ど

の社会でも第二世代は付き合ひは広くな
る反面、保身もあって変革は難しくなる
のが通例であろう。自己増殖する集団活
動の中で、今まであらわれなかった多く
の隠し穴が見えはじめている。

音楽における新しい日本音楽の活動も、
現状から予測すれば、やがて作曲家は表
面を離れ、演奏者とマネージメントの時
代になる。問題は、どのような運動とも
同様、後継世代が保身やメリット第一主
義に引き込まれないことだ。いかに逆転
の時代であれ、日本音楽集団の目的は、
あくまでも私たちの音楽の受け手のため
にあり、より広い社会に還元されねばな
らない。他に山程の実例があるように、
同業の者同士が互いに牽制し合い、真の
目的からはずれて物事を考えるようにな
ったら確実に未来は閉ざされる。開放的な
競争心と、他をいづくしむ心がうまくバ
ランスされて音楽活動は栄える。集団の
第二世代は健やかにあれ、とひたすら祈
るような気持ちだ。

第三世代も生れかけている。十年前
に考えられなかったような技術を若くし
て身につけた者と、可能性を信じて参加
を許した者の混在で、やがて厳しく振り
分けられていくであろう。

世代が下ってくると、私がこの活動の
思想と信じてきた「開放と参加」という
ようなことは殆んど関心がなくなる。
既成社会には、依然として閉鎖・不参加

の暗い部分が多いが、日本音楽集団とそ
の周辺では、ほぼその理念が果されてい
るために、抵抗の武器ではなくうつつと
しい説法にすぎなくなったのである。私
たちの汗の道は、いつしか彼らが権益へ
行きつくための近道になる危険がある。
私たちのことはたいした問題ではない。
だが、彼らが全ての他者の喜怒哀楽の外
側に立つようになった時、日本音楽集団
は創団の意義を失う。

こんなエピソードがある。さる六月に
行った西日本公演、特に高知・徳島・広
島あたりでの盛り上りは、昨日の高潮現
象だと思われた。私がプロデューサーと
して関わった徳島のコンサートも、二時
間半を超えて一人の客も立ち去ろうとせ
ず、団員たちも、連日の強行日程にも拘
らず、やれるなら何曲でもアンコールに
応える暖かさで、客席と舞台は、まれな
連帯を見せていた。

実は、七年前、徳島でのコンサートが
思い通りに燃えず、私は舞台から郷土の
聴衆に説教めいたことをした。しばらく
は故郷での集団のコンサートを抑えよう
と考えた。その徳島の同じ会場で「巨
火」の焰が膚に熱い舞台の端に立って、
幸せを共有する満場の聴衆と団員たちの
顔を見比べながら、私は感動に震えつつ、
文化と政治のことに言及するほど奔放に
しゃべることができた。七年の月日を要
して、客を熱やし得たわけである。

西日本公演終了後、今後のため参加団

員の意識をアンケートした。書かされる
ことがきらいな演奏者たちだが、珍らし
く熱い反応があった。その中に、何故か
徳島の項が白紙である分と、「三木稔大
先生が一人はしゃいでおられました」と
いう回答が、私の酔いを一気に醒ました。
末世に流行しているという「カラスなぞ
鳴く」カラスの勝手でしょ」という詩
歌を聞いたようであった。

私の反応は、だがつと背筋が冷える
ような目にあう。若い管理者は私に言っ
た。「ひょっとすると、他のメンバーが
言えないことを言っているのたのではない
ですか!!」——十六年間、一人ではし
やいできたのかもしれない大先生は二の
句がつけない。そして考える——進捗を
はかること自体が、もはや滑稽である安
定した共同体を私たちは作ってしまった
のだ——

明白に第二の波がやってきた。作品は
ともかく、演奏や組織の上で、前回とは比
較にならぬ大波にそれは育つであろう。
それを、シニカルな目、通人の楽しみは
かりが増幅し、創造的な面が徐々に陰り、
創団の理想が見えないような空しいもの
にしてはならぬ。

音楽家にとって基本ともいうべき、音
楽を愛し、健全に楽しむことにかけては
団員たちも随分上手になってきた。当然
のことながら、古いパターンを受けつい
だり、他人の型を見せる術にも凄力を

発揮できる。そして、そこまでの方が金
になる。その、芸人としての能力に背き、
あるいは超えて、集団の公演活動では、
他に類のない創造的な舞台として提供
することに、今まで私の誇りがあった。
もう一息努力すれば、型が決まっている邦
楽でも洋楽でもない、一つの演奏様式の
確立にたどりつけるかもしれない。

次代の団員たちのことを書いてきたが、
閉じ易くて、自分の利を求め、一番駄目
な人間は自分自身なのだ。個人としての
私は、無限ではない時間を惜んで、作曲
活動に専念すべき曲角を逃し、果たし
たさまざまな夢を見る。十六年を経て、
今が大事な時と考えられる集団の仕事と
の間が軋む。

その自分にムチ打てず、演奏者たちと
せめぎ合う情熱を放棄し、適当に彼らの
メリットとつき合い、小声で馴れ合うよ
うになった時、私はもう日本音楽集団の
音楽監督などではあり得ない。

思いつくままに

主権演奏者 野坂恵子

六月に行われた西日本公演は大成で
した。外国で経験すると同じような熱い、

暖かい拍手、……アンコール、又拍手、
又アンコール……、ようやくわが日本の
地に於て私たちの音楽が判ってもらえた
という嬉しさと安堵感を持ちました。何
より良かったのは若い演奏者たちが実際に
それに触れ、ステージの上でそれを実感
し、更により良い状態を観客と共に作っ
ていく過程に参加出来たことです。いく
ら話にきいても写真を見ても、自分自身
が現場にいるといかないのでは充実感に違
います。自分たちの音楽とその態度によ
って観客と一つになる瞬間を持てる、こ
れこそ正に演奏家冥利というものです。

十六年経ってここ迄来たという気持ち、だ
からもっと頑張らなければという感慨……
十一年前に二十弦琴を作り、「集団」
の人たちは暖かくそれを支持してくれま
した。この場があったから、二十弦琴も
現在の場があり得たと思っています。現
代邦楽ブームが起り、それが下火になっ
たといわれ、又一九八〇年代再び燃えよ
うという気配を感じます。でも今度はブ
ームと呼ばれるものではなく、もっとし
っかり根をおろした大衆の支持のもとに
生まれて来るものです。

私自身にも迷いはあり、個に徹したい
と願う時があります。その方がはるか彼
方に翔んで行けるからです。でも音楽は
人間の為のものであり、勿論それが神に
近められるのが理想ですが、基本は和
つまりアンサンブルにあると思います。
人との葛藤があり、それを昇華したとこ

ろにあるものこそ感動なのです。

「何の為に筆を弾くのかしら？」

私自身の過程を言えば、過去十数年間
の歩みの中から少しずつその答えを得た
と思います。筆が持つ音域の中でしかも
第一面より自由な発音をしてみたい。

何も知らないに等しい私でしたが、三木
さんの指導、叱責のもとに歩み、今日が
やってきました。「遠いところばつても弾
いてみる」と書かれて来る作品。「まだ
弾けるわよ」という気概。筆でこうい
う表現も可能だ。向うばかり見ている人た
ちにこちらの方も向かせたい……等々……

常に全力投球で、キリリと張りつめ
た弓の状態での仕事振りでした。こうし
て生きた作家たちと共同作業していると
古典といわれるものの見方も変わってきま
す。例えば、八幡校の意図した六段を
弾きたい、伝統をもっと生かすものとし
て捉えていいのではないかといい思いが
湧いてきます。私たちの祖先は現実にと
うやって曲を後世に伝えてきていると信
じているのです。当時はどの曲にして
ても、もっと即興の入る生きた音楽だっ
たに違いない。五年前「集団」の「伝統
音楽演奏会」の地歌・箏曲その「二」をプ
ロデュースし、八新八千代節子Vを集団
の楽器で再編成した時にそれを痛切に感
じたものでした。

昔陰にも張りつめた十数年を経て、今
思うことは、音楽は人の心に喜びと安ら
ぎをもたらすもの、ということでしょう

か。その為には私自身が、内にそれを持たなければその表現は不可能だということ。等々人を驚かすのでなく、人との連帯に於て物が言えるような人間になりたい。強い音、大きな音は必要だけれど、根本は暖かい、優しい音の連なりでいたい、そうして生まれた音たちが果てしなく続く大きな音楽を奏でる演奏家でありたい。音楽という計り知れぬ高さ、深さを持つもの、その高さを目の前にして一人よりも二人、二人よりも四人……と皆で手を携えて登っていきたくてですね。それを「集団」はやってきたと思っています。閉鎖することなく常に人との連帯を求めて音楽を作っていく。今よりもっと柔軟に、もっとナイーヴに若々しく皆でそれを求めましょう。自分たちの利益だけを考へてはいけません。何かの時は十年先を考へて下さい。

八月末に久し振りに芸大を訪れる機会があり、タクシから旧校舎に降り立った時のことです。夏休みにも関わらず、音楽の人たちの大きな声がまず飛び込んできます。そして相変わらず鳴っているピアノ。トランペットの音もトロンボーンの音もびびりとコンクリートの壁をこえて響き渡っている。学生時代、今と全く同じ環境であったにも関わらず、その隣りそぐ音の中で改めて「音楽は凄いな」と実感しました。その底辺の広さが身にしみたまいます。全国にいったいくつの音楽学校があるでしょうか、その

中で全てを系統だてて教えることが出来るその莫大な財産を思い、片や日本音楽を思うと気が遠くなります。日本の音楽大学に必ず「集団」のようなグループが一つは存在し得るよう、そうして若人たちに、よく当り前に現在鳴り響いているポピュラーな音たちの中にも開放されるように、そんな日々が来る迄私たちは頑張ります。やれると思うのですが。

集団結成の頃を ふりかえって

主席演奏者 宮田耕八朗

日本音楽集団は「日本の（伝統）楽器による現代の日本音楽を研究・創造・発表することにより伝統音楽の発展的継承をはかる……」という基本理念を結成以来持っています。正確に言えば十六年前には「することにより」が「するとともに」であったのですが、後に、より適確な表現に変えました。

当初私は「伝統楽器による」というワタを決めるべきではないという考えでした。伝統楽器といえども古来より日本にあったものではなく、千数百年前に渡来した事から、数百年前に渡来した三弦など、各々その後幾多の改良が続いていま

すし、十七世紀は当時、誕生以来四十三年という若い楽器でした。邦楽器と洋楽器と言うように区別して呼ばれることは明治以来の文化の変動的な分化によるもので、私たちはこの状況を変えて行きたいし、日本音楽集団の結成は、その第一歩にもなることですから始めからワタをとりはらった立場に立つべきではなからうか……と考えたわけですが、討論の結果現時点では伝統楽器による音楽の発展に重点を置くことを明確にしようと思えました。賢明であつたと思いますし、十六年たった今でも必要なワタだと思います。しかし、このワタが無意味になる日が早く来るようにしたいものです。

「邦楽の演奏会に行く」と、まじめにいっしょう懸命やってくるのはわかるけど、あまり面白くない、みんなお金持ちがやってくるのでしょね」と言う人が居ましたが、なるほどその演奏会で赤字を出しても食べて行ける人がほとんど。決して裕福ではないにしても演奏会そのものに生活がかかっている、お客さんの満足より先に自分が満足できる演奏会をしてしまします。客席に向って語りかけるような演奏にならないので、お客さんは、「うまいな」とは思っても、もうひとつの足りない感じが残ります。集団も演奏会のために客席で見ていた三木さんか「個が思い、客席を向かなくちゃ」と永いこと言われつづけて来ましたが、この頃はかなり変わって来ました。六月の九

私と集団、そして

常任指揮者 田村拓男

集団が結成されてから十六年――。人生八十年として、すでにその五分の一を、また昭和十年生まれの四十五歳だから、私の現在までの人生の約三分の一を集団と共に歩んだことになる。

過去において例のない、日本の伝統楽器による芸術創造団体の設立・育成とい

州・四国・中国地方公演における客席の反応は、海外公演の場合は別として、従来とは格段に違うものでした。演奏者が演劇としていたせいもあるでしょうが、お客さんに乗せられたのかな……、という感じもするくらいでした。演奏者と聴衆とが反応し合うコンサートを実感できたことは、十六年の歴史の遅々たる歩みの中でも、すばらしくうれしい成果でした。手弁当で集まった集団も、もうじきお客さんに食べさせてもらえる団になればそんな感じがして来ました。

私たちの成果はまだ小さいけれど団員ひとりひとりが、目標というか、見とおしをはっきりと持つべきでしょうし、持つことができる基礎はできたと思います。

大変な仕事に、十六年間も携わってきたという事は、伊達や特注、物好きなでやってきたのではないことだけは確かだ。仕事に意義を感じたばかりで、私なりの情熱を傾け、時間を捧げたのであり、いわば私のライフ・ワークとして、今や、後にも引けないレールの上を走っている筈だ。近年、私の生活や考えが、集団を中心にうごいていくことに気がつく。

私の場合には、洋楽の打楽器（マリンバ）で立身する計画をもっていただけに、三十歳近くになって、本気で転身を決断するまでには、かなりの時間を要した。これも今、告白すれば、集団の仕事は、一マリンバ界のそれに比べて、より大きな意義を感じたからである。

しかし、この転身への道は、私にとっても大きなハンディキャップを負ったことも事実である。集団に打込めば打込むほど、それまでに築きかけていたマリンバでの経済的、人的関係が薄らいでいったこと。集団へ打楽器で参加しながら、鼓や太鼓を打てる奏者ではなかったという事実。同時に指揮者への移行は、他の伝統楽器に精通することを不可欠の条件としていたので、新たな気持ちでやり直す覚悟が必要であった。集団の練習のためには、金になる仕事も断って臨まなければならなかった。しかし一面、経済的にはとても心もなかつたけれど、自分のやりたい仕事のために時間を割くという

ことには、一種の痛快さをも感じさせたものである。

考えてみれば随分と大胆で無謀なことをしたものだ。この頃から私の意識の改革も始まったらしい。

集団の収入では、十六年経った現在でも食えないので、過去のつなかりに頼って生活している状態である。その意味では、まだ完全に転身が遂行できていないといえる。

集団で食えないことは他の団員にとっても同じことで、あとは各人の責任に於て、経済的な、或は同時に音楽的な個人の場が他にあるのである。個人の場は、古典の指導の場であったり、現代曲も含めたソロ等の演奏活動の場でもあったりする。楽器や人によって集団との係り方の違いはあるが、例えば箏や尺八等の場は、集団をほぼ、その延長線上にもってくることができ、集団の発展の成果を個人の音楽的な場に活かすことができる。その点、長唄三味線のように劇場音楽として独自の発展をし、演奏や踊りの伴奏で充分食える楽器の場合は、過去の遺産への志向力が勝ることが考えられる。

個人により、どちらに比重を置くかの差はあるが、集団の場と個人の場を適当に行ったり来たりすることで、却って満ち足りる面があるのである。このバランスが一方的に崩れたりすると、双方の関係が悪くなる。つまり集団で経済的な保証ができたとしても、全員が集団の

専属演奏家になるかという点、そうは単純にはいかない。経済的、音楽的両面からの理由で、団員は今まで二つの場を持ち続けてきた訳である。過去、集団の演奏で不十分な練習を思わせるものがあったとすれば、ここら辺りにも原因がある。しかし集団の歴史に於て、革新的な音楽家達が個人の場の他に、集団という場を共有し続けたから今日の集団がある訳で、多くの不安や、困難を乗り越えて共通の場を維持、拡大させるための団員の十六年間に及ぶ努力が、ここに来て開花しつつあると言えるのではなからうか。

演奏技術の飛躍的発展、新しい楽器の

開発、聴衆を引き付けてやまない作品群、その作品群を滋養に集団で生まれた集団育ちの若い演奏家たち。彼らは事によると、専属演奏家になって、集団を母屋に、自由自在に羽ばたいてくれるだろう。また、日本音楽協会の合奏団は、どんどん増え続け、そこいらの街角で、職場で、学校で……、日本の至るところで誰にも気がねすることなく自由に、自分たちの好みの新しい音楽を奏で始めることだろう。コンクールもできるかも知れない。大衆のための解放された音楽がそこにはある。

尺八・ブリス・クリスマス・コンサート

——グレン・ミラーをうたう

- 第一部 日本のうた 荒城の月／浜辺の歌／城ヶ島の雨 他
第二部 グレン・ミラー／サウンド・ムーヴメント／セレナーデ／真珠の首飾り／アメリカン・パトリオット／インザムード 他
出演 三橋貴風・福田輝久・田嶋直士・藤崎重康・竹井誠・米澤浩
ゲスト 司会 本多俊夫 指揮 福曲 山屋清
後援 FM東京・ラジオ関東・日本音楽協会
お問い合わせ・電話予約 〇三三二一四・一〇八三（福田方） 〇三三二四〇九
チケット取扱 都内各ブレイガイド

新譜・新刊案内

楽譜

■三木稔作曲「松よ」「千絃の曲」

池田逸子



三木稔が楽譜の自費出版を始めた。現代邦楽の歴史も二十年を経過し、その間に生み出された作品は相当な数にのぼる。いくつかの作品たちは幸運にも度重なる演奏の機会に恵まれ、レコード録音もされ、楽譜も出版された。だが大多数の作品たちには幸運はなかなかめぐってこない。

現在、現代邦楽の楽譜出版を継続的に行なっているのは全音だけで、その他は雑誌の附録などで稀に出るくらい。全音の仕事は貴重だが、これとて遅々たる歩み。一方、邦楽関係の出版社は、いわゆる邦楽畑の作者のしか出していない。プロの演奏家にとってもむろんだが、学生などアマチュア演奏者たちにとって、たくさんの楽譜の簡便な入手ということは、熱い願いであろう。楽譜が作曲者の周辺でしか入手できないような状況で、創造活動の進展はありえない。むろん、事態の深刻さはこのジャンルにのみ留まらな

い。自費出版の心境を「楽譜を売って生活費を得るのが作曲者の原点。それにレジスタンスの意味もこめて」と本人は言う。今回はそれほど大きくない編成の合奏曲と親しみやすい小品にしたとのこと。

「松よ」は一九七九年、寧曲松の実会五十五周年記念演奏会のために作曲。初演の指揮は、オペラ「あだ」初演でロンドン滞在の作曲家に代わって、坂田誠山がした。篠笛（または尺八）、尺八、箏、IⅡⅢ、十七絃の編成で、各パート数は自由。箏およびソロは二十絃を想定しているが、十三絃でも可。三楽章形式で、終楽章に歌が入り、舞台と客席とで歌い交わす。演奏時間は約15分（定価九百円）。

「千絃の曲」はテレビドラマ「鳴門秘帖」の劇音楽のうち、よく知られている叙情的な曲で、主人公（尺八）とその恋人千絃（十三絃箏）とのデュエット。箏のソロで演奏してもよい。初演は二十絃で野坂恵子。定価三百円、発行所「201 狛江市東野川一十一六 みきねんコレクション」

レコード

霜島素子

■組曲「七塔伝説」ノッダ

種々のサウンドがちりばめられた音の河——「七塔」のもつ出会いの夢がこのレコードにある。ちなみにこのサウンドの源は、長唄囃子方の笛1名、同じく打楽器2名、洋楽の打楽器1名、フルート1名、囃子方とジャズ・ドラム1名、

インドのタブラ1名、そして共演のリズム・セクション。それぞれの個性を生かした角田圭伊悟の作曲・編曲もいい。

最近、邦楽家によるポピュラー・ミュージックへの進出はめざましい。こうした彼ら独特の自在な感性が、新しい邦楽への滋養となることを願って止まない。音楽は次のような組曲になっている。天空・豊調・織女・牽牛・祈願・燃焼・雷鳴・静寂 東芝EMI/ETP723 24 ¥ 2300

■イギリス民謡集「琴・グリーン・スリーブス」

私たちのよく知っているイギリス民謡十六曲を三木稔が二十絃箏用に編曲。野坂が弾いている。編曲、演奏、録音と評判が良いようで、レコード評を引用してみると……「二十絃箏の第一人者野坂恵子さんのデジタル録音。すばらしい出来栄。イギリス民謡が、二十絃箏でどう鳴るかと思ったが、三木稔氏の編曲も見事で息を呑んだ。これはイギリスの友人に送ってあげよう。——レコード芸術」

「ハープのような、チェンバロのような、そして華らしく、目を見張らされるような多彩な音色がたのしめます。——東京新聞」「違和感がないのみならず、まるでお琴のための音楽のような気さくして来るおもしろいレコード——音楽の友」昨年、野坂、三木が二十絃箏の世界としてアンソロジー・レコードを出し、

ほうげん抄

日本音楽集団の管楽器奏者F氏は、神主の如き高貴な面立ちながら、反面、駄ジャレ製造機とも言われる。駄のつくジャレであれば、一瞬の爆笑を誘い消えゆくのが普通だが、彼のは時にメモに残したもののもある。得意課目は「マカオのオカマ」的上から読んでも下から読んでも、というやつで、電車に乗っている時でも逆さ言葉を考え続けているそう。成程、ひらめきとは鍛え抜かれた頭脳が産むのだと、ひとつの真理を垣間見る思いだ。傑作「経節の私物化」ほかF氏語録を書き出せば、それこそ枚挙にいとまがないが、その中から、集団の団員を撮ったものを特集してみよう。今年、六月の西日本公演のある日の演奏会が読めた後、それこそ速射砲の如く出た数々。

キミ、三木。ボク、久保（ジャパンアーツの社員で集団の協力者。この演奏旅行に随行していた）。田嶋はマジだ（これは本当）。中島はマジかな（？）。三機は罪（当っている、のか、ナー）。古村無視よ（無視できる程静かじ

その本来の創造活動を世に問うた後、より自由な発想からの二十絃の取り組みが開けてきた……とジャケッットには述べられている。そして制作十年目にして百名という二十絃奏者が、手軽に口ずさみながら弾ける「イギリス民謡集」になるのもそう先のことでないであろう。収録曲「アニー・ロリー、ロンドン橋、螢の光、誰かか麦畑他全16曲。ビクター/KVX1078 ￥二五〇〇

団員、及び団員関係のグループの動向

■滝沢修氏と日本音楽集団

滝沢修氏は大の集団ファンで、演奏会にもよく見えて、いつも「集団の音楽をもっと多くの人に聞かせたい」とおっしゃっています。一昨年に行われた滝沢修氏演出・出演の民芸公演「その妹」では長沢が音楽を担当し、集団のメンバーが演奏して好評を得ました。そして、今年も十月十七日から三十一日まで行われる、劇団民芸創立三十周年記念公演「夜明け前第一部」で再び長沢が音楽担当、集団のメンバーが演奏しています。

滝沢氏は演技者であり演出家、絵画、写真、音楽など、ほとんどの芸術分野に造詣が深く、集団に対しても単なるファンとしてでなく、集団の持つ本質的なものを認めるよき理解者として数々の協力

を得てきました。

「夜明け前」の音楽を担当した長沢の話では「(劇中への)音楽の入れ方が実にうまくいっています。一見この劇は音楽の入り余地がないように見え、音楽の使い方が難しいと思ったけど、滝沢氏の手で明確な必然性を持って効果的に使われているんです」

この公演の日程、場所については本誌54ページ参照。主な配役については次に記しておきます。尚、来年七月には、滝沢修氏と稲垣隆氏に客演をお願いした集団の演奏会が、予定されていますのでご期待下さい。

青山吉左衛門／滝沢修・おまん／岡田嘉子(17・21・23・30・31日) 斉藤美和(22・26・28・29日)・半蔵／鈴木智・お民／櫻山文枝

■野坂恵子二十絃エコー——十一月に演奏会

「二十絃奏者の発言の場としての演奏会を——」という事で野坂恵子が主宰する二十絃エコーの演奏会が十一月五日(水)青山タワーホールで五回目的演奏会を行います。出演は団員では野坂の他に吉村、津出、内藤。毎回意欲的なプログラムを組み、レパートリーも段々ふえてきているようで、今回は牧野由多可氏へ二面の二十絃のための曲が委嘱されています。このグループの特色の一つは、常に二十絃争のために、易し

く楽しめる作品を生むよう心がけていることで、これは二十絃だからというところでなく、音楽を創造してゆくために当事者にとっては忘れてならない努力といえると思います。

又、今回の演奏会は、現音演奏家シリーズの一環として行われますが、こうしたグループが洋楽に混って現代音楽演奏会のシリーズの中の一役を担うことは、二十絃争がこれから先市民権を得てゆく一歩として大変喜ばしいことでしよう。(詳細はP.55参照)

■尺八ソリスト——十二月にクリスマス・コンサート開催

先号でも紹介した集団の尺八の若手六人(三橋・福田・田嶋・藤崎・竹井・米澤)が十二月十九日(金)にヤクルト・ホールで、尺八ソリスト・クリスマス・コンサートを行います。近々LPを出すのに先駆けしたコンサートとのこと。クイズ・ドレミファドンや、ほんものは誰だノ、などにも出演、ラジオ関東ではジャズ・コンゴと競演して好評でした。気軽に聴ける邦楽器のグループになりたという事です。(詳細P.48参照)

■ぐるーぶ・だだ——三月に公演

一九七八年の夏に第一回のコンサートを開いてその活躍ぶりが注目されている「ぐるーぶ・だだ」。メンバーは集団の笛奏者の望月、西川、打楽器奏者の尾崎、

やない)。田村無駄(停年にはまだ早い)。イカサマ坂井(これはあんまりイカサマない)。宮田沙汰止み(連絡をう)。半田と談話(ほのほの)。養田が頼み(自称首席独奏者、いや酒席独走者)。滝田また来た(また来てうれい人もいる)。内藤うとい(本人爆笑)。加藤はうとか(訛ってる)。したたかな堅田氏(当っているだけにキツイ、とは本人の弁)。

小敷がふえると女性陣、しきりに嘆くがまた大笑い。

もうひとつ、これは旅行中大流行し、今でも時々使われるのが所謂「エガワる、コバる」。幾つかをご紹介します。

黒子る——(研究団員活用連帯形)世紀のソリストを目指し、希望に胸ふくらませて入団した研究団員が、不本意ながら舞台裏方として使われること。または、その連中がいじける姿。

東かる——(六段活用已然形)調絃が狂っていること。三木検作曲二十絃独奏曲へ東からVの前半は、ガムラン風に調絃するのだが、平均律に慣れた耳には調絃違いに聴こえるところから、尚、曲の後半は「五段の調べ」と名付けられている。

藝舎、堅田、高橋、黒坂。今年は六月に東芝レコードから出した「組曲・七夕伝説」だ」というレコードの好評に気をよくして、七夕伝説シリーズ第二弾が来春に発売される予定。三月七日（土）には東京・駒場のエミナースで、この二枚のレコード発売記念の演奏会を開きます。

第一、二回では、笛と打楽器。という異色組み合わせの、シリアスで重厚な企画を世に問いましたが、今回はリラックしたコンサートを開きより広いファン層をつかもうということ。彼らの変り身が楽しみです。

■オペラへあだアメリカ初演決る

昨年十月ロンドンで世界初演されて、この四半世紀で最高のオペラといわれるほどの評価を得た三木稔のオペラ第二作へあだ An Actor's Revenge のアメリカ初演が決った。

近年注目をあびているセント・ルイスオペラ劇場が、来年六月十一日から十九日までに四回の上演を行うもので、アメリカ人のスタッフ・キャスト。但し演出は、このオペラの生みの親である世界的演出家コリン・グレーム氏。目下三木はオペラ劇場のリチャード・ガッデス総裁とグレーム氏から、アメリカ初演の指揮を要請され考慮中。

振付の花柳錦之輔氏、及び同時期にアメリカでリサイタルを行う野坂恵子も招聘され、米初演に参加する。

露秋銘 尺八

秋 露 田 西

〒794 今治市新谷新田甲798

電話 0898-48-1097・1257

キンコどる——「コト活用商売
 気」集団の団員でもある琴光堂和
 楽器店中島隆氏は、得意先でもあ
 る華楽者の面倒をみずぎるところ
 から、華弾きを甘やかすことを言
 う。

エビログる——「下手三段活用
 未然形」合奏の中で自分の入る小
 節や拍がわからなくなること。転
 じてリズムに乗れない人を嘲笑す
 る言葉。三木稔作曲（四季）ダン
 ス・コンセルタント第一番の「エ
 ビログ」には、スタッフも含め
 て全員が、手に手に玩具を持って
 かチャカチャ演る演出があるのだ
 が、ある演奏会で、1君最後まで
 入れなかったことが由来。

タムる——「一段活用連踊形」
 語源は指揮者田村拓男。徳島公演
 では「巨火」（三木稔作曲）のカ
 デンツァに阿波踊りを取り入れた
 ところ、田村氏敢然と踊り出し、
 以来、ステージですぐ踊り出すこ
 とを言うようになった。命令形は
 「タムれ」。「タムろ」では意味
 が変わる。

尚、田村氏は、ルーマニアでも
 アンコール曲に合わせて踊り出し
 た実績があり、彼の踊りは国際的。
 「タムる」が世界の言葉となるの
 も遠くはないだろう。

日本音楽協会通信

日本音楽協会合奏団——日本の楽器を演奏するアマチュアの方々へ

毎週一回集まって邦楽器による合奏を楽しむアマチュアのグループです。もちろん流派などは問わず、どなたでも参加できます。次のように、現在全国で五つ、海外に一つあります。(東京の方は友の会A会員に同時入会になります。A会員について詳しくは27ページ参照)

東京——毎週土曜日には三十余名の方が午後四時から六時まで(星組合奏団)、金曜日には二十数名の方が午後六時から八時まで(合奏団たあく)合奏を楽しんでいます。ご希望の方は集団事務局へお問い合わせ下さい。

関西——関西方面では合奏団「潮」(かなえ)が、三十余名の会員を有し活躍しています。練習日は毎週日曜日一時から五時、詳細は大崎じゅん〇七七四九一四一三〇三四までお問い合わせ下さい。

名古屋——名古屋は合奏団「みずほ」。昨年十一月に約二十名で結成されました。メンバーは愛知、三重、岐阜と広範囲にわたっているそうです。練習日は毎月第一、三火曜日の六時半から、詳細は木野正徳〇五六八—三二二七五(夜)まで。

仙台——昨年九月に結成、メンバーは十八名。仙台的合奏団「遊」の練習日は毎週土、日曜日。詳細は山本昌子六二九一四〇〇まで。

ハワイ——昨年夏に集団がハワイ公演を行ったのがきっかけで、ハワイ大学の学生中心にメンバー十名余りで九月に結成。——Nipponia Hawaii Ensemble

関西音楽集団研究団員二期生募集中

関西音楽集団は、日本音楽協会の一員として関西在住の専門家を志す二十数名の研究団員から構成されており、今年四月に発足しました。練習は平均月三回、土曜の午後一時から五時までで、三ヵ月ごとの公開演奏で練習を仕上げています。すでに二回のコンサートを開くなど、活発に活動しています。

来春には二期生が募集され、三月七日にオーディションが行われ、審査員には日本音楽集団の長沢勝俊と田村拓男が予定されており、意欲的に音楽を学びたい方の応募を期待しています。詳細は左記へお問い合わせ下さい。

堺市大野九一八 電話〇七二—三六—二四—三三
関西音楽集団 代表 田嶋直士



ホールでの練習風景



特別講師に迎えた村屋正邦氏

アンクルンを手にも、リトミック練習



第10回日本音楽集団
夏期合奏研究会の
スナップから

パーティでは飛び入りで
民謡を……



持続するアマチュア活動を目ざして

和楽器集団ぐるーぶ樹 重政 晃

ぐるーぶ樹は、和楽器を使った日本音楽を特定の流派にこだわることなく古典から現代曲へと幅広く取り上げていくという目的で一九七二年に結成された。結成の中心となったのは、広島大学邦楽部の学生とそのOB、及び、広島女子大学・広島女学院大学華曲部のOB、計八名であった。

ある種の文化が広まっていく過程は、マスメディアが発達した今日では、それ以前とは比較にならない程のスピードと均一性を持つことは、私たちのよく目にするとあるが、こと現代邦楽に関しては、当時の広島は明らかにその例外であった。一九七〇年前後といえば、現代邦楽がブームといわれ、関東・関西では、学生を中心として活況を呈した時期だが（少くとも広島からはそう見えた）、広島ではその頃やっと学生を中心としたひと握りの人たちがそうした動きを知り、レコードを集め、あちこちで開かれるコンサートを聴きに出かけ始めた状態であった。当時、古典や新曲しか知らなかった私たちには「現代邦楽」という言葉はキラ星のように輝いて聞えたものだ。そうした時期に、尺八三本会を招き、日本

音楽集団の広島初公演を準備するなどを通じて、私たちは少しずつ新しい音楽の流れに接し、また広島にもその種の音楽を聴き、演奏する人たちが徐々に増えてきた。ぐるーぶ樹は、これら一連の流れの中で、自然発生的に生れてきたものといえる。

これまで、メンバーには若干の異動があったが、多くの方々の賛助を仰ぎながら現代曲を中心とした計十一回のコンサ



「ぐるーぶ樹」の第七回コンサートから

ートと、年二・三回の研究会に重点を置いて活動を行ってきた。

好きなことを自由にやろうと集ったのがぐるーぶ樹。だが、コンサートも回を重ねて来ると、少しずつ欲も出てくる。和楽器の世界を知らないが故に圈外にいる人たちが、とりわけ物事にこだわりの少ない若い世代にもっとアピールしたいこと、コンサート活動を通じて新しい音楽を根づかせる為の一翼を担っていききたいこと……などなど。アマチュア演奏グループの活動は、ある時期いかに充実し、活動の輪が広がったとしても、それが持続性を持たない限り、単なる趣味の集いで終ってしまふ。私たちは、学生時代にあれ程熱中し、社会に出ると同時に青春の思い出と共に遠い彼方に華や尺八を追いやった人々を数多く知っている。それぞれが置かれた抵抗しがたい状況が已むなくそうさせるのだろうか、幸い私たちに、そうでない場があり、仲間がいる。メンバーの生活が落ち着いてくるこれからは、ぐるーぶ樹の正念場とも言えるだろう。

とはいえ、仕事や家庭を持ちながらの活動は、一方で諸々の現実との葛藤を

も意味し、ともすれば楽器を手にする時間が追いやられがちな昨今である。しかし、それはそれで、これまで各自が各自の努力でそれなりにこなしてきた。これまで八年間やってきたのだから、もうあと八年くらいはやれるだろう。今のぐるーぶ樹には、新しい音楽を創り出し、流れを変えていくまでの力はないけれども知れないけれど、良いものを見極める目と、それを取り上げ、定着させていくことの力には、この広島の地でなれるに違いない。

ぐるーぶ樹 プロファイル

◇メンバー 尺八(4)・箏(5)

三味線(1)・打楽器(1)

平均年齢 26歳

◇これまでの賛助出演者 延べ44名

◇活動状況 ☆コンサート(広島8回・

呉2回・福山1回)

☆研究会 一年2〜3回

☆練習 週1回

◇連絡先 森岡幸雄(〒733 広島県

呉市焼山町第三団地51-7

TEL/0823・33・5

996)

日本音楽集団及び団員等に関する今後の予定（現在決まっている来年三月までのもの。太字は集団主催。録音や学校公演などは省略します）

十月十六日（木）

札幌舞踊会バレエ公演——全ステージ三本、検作品による——に集団が出演

十七日（金）

砂崎知子第三回サリサイタル（P.55） 青山タワーホール

十七日（金）——二十六日（日）国立劇場（小）で、二十八日（火）——三十一日（金）日本青年館ホールで、劇団民芸公演「夜明け前第一部」（島崎藤村原作、村山知義脚色、滝沢修補・演出）の音楽を長沢勝俊が担当、集団のメンバー演奏

二十六日（日）

伊庭末雄民謡リサイタルに集団が出演 福生市民会館

三十日（木）

三橋貴風第一回尺八リサイタル（P.24） 芝ABC会館

三十一日（金）

山田美喜子第二回琵琶リサイタル（P.21） 国立劇場（小）

十一月一日（土）

菊地博子十七絃によるリサイタル（P.31）東京文化（小）

五日（木）

野坂恵子二十絃エコー・霜月の会・その二

七日（金）

現音主催演奏家シリーズ 青山タワーホール

十二日（水）

宇都宮労働会館で集団演奏会 栃木会館

十六日（日）

砂崎知子第四回サリサイタル（岡山） 三木記念ホール

二十一日（金）

川崎中央ライオンズクラブ十五周年記念音楽会に集団が出演。曲目は「ハル春」・「四季」・「ダンス・コン」・「ほか」。

二十三日（日）

川崎市民のみ入場可。P.M.6・30 川崎産業文化会館

十二月十一日（木）

上田タワールア合唱団演奏会に出演（三木作品「あつじの乙女」を内田とも子が集団編成に編曲） 上田市民会館

十二月（金）

坂田誠山第一回尺八リサイタル（P.55） 青山タワーホール

十八日（木）

野坂恵子第九回サリサイタル——チャリテイ・コンサートとして（P.55） 日経ホール

十九日（金）

新日フィル第八十五回定期、井上道義指揮「破の曲」（三木作曲）で野坂がソロ出演

尺八ゾリス・クリスマス・コンサート——「グレン・ミラーを歌う」（P.48） ヤタルトホール

二十五日（木）

京響が、三木に委嘱した新作交響曲「春秋の語」を初演（指揮・山田一雄） 京都府会館

一九八一年

一月二十七日（火）

埼玉音楽鑑賞協議会例会で集団演奏会

二十八日（水）

第六十三回定期演奏会——近年作られたやさしい作品を集めて（P.28） 構成・田村拓男・稲田康 青山タワーホール

三十日（金）

野坂恵子リサイタル（仙台） 電力ホール

期日未定

名古屋音楽「親と子コンサート」に集団が出演

二月十一日（水）、十二日（木）

第六回関西定期演奏会——関西初演の曲を集めて 京都府立芸術文化会館

十三日（金）

神戸文化ホール主催・日本音楽集団神戸演奏会（曲目「火」ほか） 神戸文化ホール

三月七日（土）

ぐるーぶ・ただ公演 東京・駒場エミナス

八日（日）

コンサート「春のことば」に集団が三浦布美子と共に出演 坂戸市民会館

二十一日（土）、二十二日（日）

東京都オペラ・シーズンで、日本オペラ協会が三木作曲「春琴抄」を四度目の上演（P.55）東京文化会館

なお、集団の一九八一年前期の主な行事は次の通りです。

五月八日（金）

第六十四回春の総合定期演奏会 都市センターホール

六月十二日（金）

第六十五回定期演奏会——室内楽による 構成・三橋貴風 青山タワーホール

七月六日（月）、七日（火）

第六十六回定期演奏会——滝沢修氏を迎えて 構成・長沢勝俊 青山タワーホール

八月一日（土）——四日（火）

日本音楽集団夏のアカデミー・西の部 岡山県総社

七日（金）——十日（月）

日本音楽集団夏のアカデミー・東の部 軽井沢

★日本音楽集団は東京音楽大学民族音楽研究所の協力団体で、同大学の好意によりC-140三教室を練習場として使用しております。練習場の電話は、九八三三八〇九六（直通）です。

障害者に楽器を贈るためのコンサート

野坂恵子第九回箏リサイタル

○わらべ唄によせて ○イギリス民謡より ○WORLD'S (日本初演) /
MACKEY ○前田豊へ青春を贈る(十二月十一日のうた(委嘱・初演)
／三宅様名 ○ペロ出しチョンマ(委嘱・初演)／斎藤隆介作・三木稔
作曲 ○華やき／三木稔
唄と語り／友竹正則
十二月十二日(金)午後七時開演 大手町日経ホール
■入場料 指定席三〇〇〇円、自由席二五〇〇円、中・高校生二〇〇〇円
■主催 日本経済新聞社
■マネジメント ジャパン・アーツ 五八五・七〇三一

坂田誠山第一回尺八リサイタル

○峰の月／中尾都山 ○尺八と箏のための秘唱 奄美かたり「かん
つめ」によせてうたえる／福島雄次郎 ○尺八と二十絃箏のための新
曲(題未定・委嘱・初演)／三木稔 ○詩曲二番 尺八のための／松村
稔 ○ひなぶり／三木稔
賛助出演 野坂恵子(二十絃箏)・砂崎知子(十二絃箏)
十二月十一日(木)午後七時開演 青山タワールホール(地下鉄外苑前下車)
■入場料 二〇〇〇円
■お問い合わせ 坂田方四二〇〇四八三
日本音楽集団四〇九・五三七四

砂崎知子第三回箏リサイタル

昭和五十五年文化庁芸術祭参加
○みだれ／八橋俊校 ○平家物語より小督(委嘱・初演)／半田淳子
○さらし幻想曲／中能島欣一 ○花舞／牧野由多可
○箏独奏曲(題未定)(委嘱・初演)／山本邦山
賛助出演 宮田耕八朗(尺八)、宮本幸子(十七絃)、西舘昭子(三絃)、
半田淳子(琵琶)、花房はるえ(箏)
十月十七日(金)午後六時四十五分開演 青山タワールホール
(地下鉄銀座線外苑前)
■入場料 二〇〇〇円
■お問い合わせ 電話予約 砂崎方〇三・七〇四・四七〇〇

現音演奏家シリーズ⑩

二十絃箏 霜月の会 その二

野坂恵子二十絃箏エコー第五回公演
○賛助歌／永瀬博彦 ○華やき／三木稔 ○四面の箏のみの音楽／間
宮芳生 ○二面の二十絃箏のための雨月(委嘱・初演)／牧野由多可
○賛助詩(改訂・初演)／肥後一郎
出演者 野坂恵子、中丸春美、吉村七重、鍋本和子、滝田美智子、
内藤洋子 賛助出演 三橋貴風
十一月五日(水)午後七時開演 青山タワールホール
■入場料 二〇〇〇円
■連絡先 日本現代音楽協会 〇三・三五六一・一九七五

〈東京都・都民芸術フェスティバル公演〉

作曲 三 木 稔

オペラ 春 琴 抄 (全3幕)

原作／谷崎潤一郎 台本／まえだ純

…盲目の三味線師匠・春琴と手代・佐助の激しい愛の物語…

指揮／渡辺暁雄 演出／武智鉄二



春琴／中 沢 桂
小笠原 茂 子

佐助／友 竹 正 則

他 日本オペラ協会々員 出演
演奏／野 坂 恵 子(二十絃箏)
新日本フィルハーモニー

1981年 3月21日(土)・23日(月)
pm6:30 東京文化会館大ホール

代表 長沢 勝俊
音楽監督 三木 稔
首席独奏者 野坂 恵子
宮田耕八朗
常任指揮者 田村 拓男

(以上五名で幹部会を構成する)

運営委員長 坂田 誠山

〈演奏部〉

望月 太八(笛)
宮田耕八朗(尺八・笛)
坂田 誠山(尺八)*
三橋 貴風(尺八)*
福田 輝久(尺八)*
田嶋 直士(尺八)*
藤崎 重康(尺八・笛)*
竹井 誠(尺八)
米澤 浩(尺八)
畦地 慶司(胡弓・笙・作曲)

〈賛助会員〉
(有)琴光堂和楽器店(松本・諏訪・東京)

滝沢 修 高瀬 卓郎
野坂 操寿 霜島 邦子
鶴田 錦史 半田多真美
三木 卓雄 古川羽衣山
渡辺 精一 丹野井成寿

事務局長 奈良 義寛
事務局 本國 光子(経理)
指島 素子(文芸)
会計監査 芹沢 英雄

マネージメント協力(国内及び海外)
株式会社ジャパン・アーツ

半田 淳子(琵琶)
田原 順子(琵琶)
坂井 敏子(箏・三味線・胡弓)
白根きぬ子(箏)
宮本 幸子(箏)
野坂 恵子(箏・三味線)
砂崎 知子(箏・三味線・胡弓)
吉村 七重(箏)*
花房はるえ(箏・三味線)
宮越 圭子(箏・三味線)
木村 玲子(箏)

〈団友〉

青木 誠 戸井 昌造 清水 義矩
秋浜 悟史 藤倉 昌悦 芹沢 英雄
荒谷 俊治 仲俣申喜男 高野 文子
小田切清光 中村 八大 田中 利光
川崎 祥悦 野口 鎮 広瀬 量平
菊地 悦子 野口美恵子 鯉沼 広行
楠 知子 佐藤 敏直 鳳声 晴由
鞍掛 昭二 芝 祐靖 星 旭

本屋勉志子(箏)
内藤 洋子(箏)
能沢 栄利子(箏)
尾崎 太一(打楽器)
藤倉 成敏(打楽器)
堅田 啓輝(打楽器)
高橋 明邦(打楽器・トレンナー)*
黒坂 昇(打楽器)
田村 拓男(指揮・打楽器)
稲田 康(指揮)

研究員
滝田美智子(箏)
田嶋恵美子(箏)
森田 司郎(三味線)
加藤 洋(三味線)
松本 和美(箏)
佐藤 里美(箏)
出口 裕子(箏)
水越 敏雅(打楽器)
前田 文男(打楽器)

増田 睦実 デイヴィッド・ローブ
元橋 康男 デイヴィッド・ヒューズ
矢崎 明子 ヘンリー・バーネット
柳家小三治 ラニー・シェルドン
西川 浩平

〈維持会友〉
AOIミュージック株式会社
株式会社西友ストア

水谷 雅康(尺八)
小林恵美子(箏)
大島菜穂子(箏)
安倍 久恵(打楽器)
石崎 信宏(打楽器)

〈作曲部〉
長沢 勝俊 研究員
三木 稔 関川 多嘉
内田とも子

〈文芸部〉

中島 隆 鶴野 和子
名譽団員 山田美喜子(琵琶)
協力団員 伊藤 敏一(演技)
地方在住団員 塚本 早苗(箏)
休団中団員 杉浦 弘和(三味線)
太田 幸子(三味線)
*印は本年度運営委員
昭和五十五年十月現在

株式会社豊島園 (有)奈良屋洋品店
(株)ノサカ 日本オペラ協会
西武建設株式会社 菱電商事株式会社
西武鉄道株式会社 宮園自動車
西武百貨店 宮園オート
青柳 孝年 稲木 一 岡 昇三
赤木 明 頼本美保子 金子 博美
朝吹 英一 榎本 容三 家根原光子
井阪 紘 遠藤 将一 亀田 和保

河野 義博 武江 利博 永根 玲子 旗野 恵美 福田 洋一 松原 剛
 近藤 栄一 田村 鎮男 根志 彰 早川 佐知子 星 光和 柳田 正治
 國持 光生 寺島 孝之 新倉 鶴子 原 順一郎 崎 穂 吉岡 穂子
 高橋 克己 内藤 国枝 野坂 純一 柳川 創造 松井 翠

日本音楽協会

協会世話人

長沢勝俊(代表)・三木 鈴・野坂恵子・宮田耕八朗・田村拓男・山田美喜子・坂井敏子・坂田誠山・田嶋直士・奈良義寛・芹沢英雄

構成団体

日本音楽集団

野坂恵子二十絃管エコー
 グループ・だだ
 尺八ソリスト
 関西音楽集団

「星組」合奏団(東京)
 合奏団「たあく」(東京)
 合奏団「鼎」(関西)
 合奏団「游」(仙台)
 合奏団「くるーぶ・みずは」(名古屋)
 Nipponia Hawaii Ensemble(ハワイ)
 ※以上六団体は日本音楽協会合奏団を構成します。

協会支部

東京支部 日本音楽集団事務所扱い
 関西支部 田嶋直士
 水戸支部 斉藤幸山
 長野支部 佐藤幸宇山
 山梨支部 郷晃
 長崎支部 牧山雅彦
 熊本支部 古川羽衣山
 秋田支部 野口裕子
 邦楽の会つばら事務局

日本の音、その磨きぬかれたひびき



銘木尺八
 コチャウ

新発売!!

完全正律管

◇みやた尺八 (宮田耕八朗監修)

1.2尺~2.3尺管 5孔~7孔

参考価格 楓材 1.6尺~1.8尺
 ¥19,500

◇みさと尺八 (山川直春監修)

女性向天然白色

1.2尺~2.3尺管

参考価格 1.6尺~1.8尺
 楓材 ¥19,500
 合竹材 ¥39,000

木管高級

しの笛(ドレミ調)

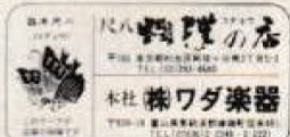
◇みさと笛 (ウラ穴有)

F(一本調子)~E(十二本調子)

参考価格 楓材 C~B ¥9,000
 合竹材 C~B ¥13,500

山川直春監修

◇蝴蝶笛 (ウラ穴無し)



- 尺八のことなら全て揃う専門店です。
- 通信販売も行っておりますのでカタログ御希望の方は無料進呈致します
- お求めは有名デパート、楽器店にてお願いいたします。
- 尺八の事なら何でも御相談に応じます。(尺八観蝶の店)

新製品につきましては、御迷惑のない様
 製作に全力を傾けて居りますが、お待ち
 いただかねばならない品もありますので
 何卒御了承下さい。

編集後記

十号を迎えました。滞りなくここまで来たことを、読者の皆さまに感謝する気持ちでいっばい。始めのうちはよくわかんないまま、ただひたすらがんばって、がんばって……、でしたが、最近読者の反応を弾みにして、この雑誌を囲む世界を感じつつ、やっております。

この二、三年、大学の卒論で現代邦楽のこと、日本音楽集団のことをテーマにしたいと事務所に来られる方がふえました。時の流れと言いましょ。こういう場合の資料だけでなく、現代邦楽を演奏するアマ、プロの演奏家のために音楽に関

するデータをまとめることの必要性が、最近ひしひしと感じられます。これは、本誌の「文取」で丹羽氏も偶然同じことを言っておられますが、このような資料の整理は、現代邦楽の発展に大きく関わってくるのだと言えそうです。一、二号の邦楽関係の雑誌記事の目録、今回のデイスコグラフィ、そしてこれからの徐々にそろう資料を記事として掲載してゆきたいと思えます。

来る十一号は、日本各地のアマチニアグループの特集を予定しています。

(霜島)

邦楽現代第十号

定価四〇〇円

一九八〇年十一月一日発行

発行所 日本音楽集団

東京都渋谷区神宮前6-16-14

小早川ビル2F

電話〇三三四〇九一五三七四(代)

Nihon Ongaku Shudan (The Nipponia)

Kohyokawa Bldg., 6-16-14 Jingumae,

Shibuya-ku, Tokyo.

発行責任者 三木 稔

編集 霜島素子

印刷 株式会社アジア企画研

印字 けやき印刷

表紙デザイン 及部克人

レイアウト協力 黒沢恭子

「邦楽現代」取扱店—東京と東京近郊—
三越本店・高島屋日本橋店・玉川店・横浜店・東武百貨店・浅草松屋・川崎コミヤ(以上、武田屋楽器店扱い)・琴光堂・邦楽堂 諏訪・松本・琴光堂 金沢・関屋楽器 福井・伊予楽器 奈良・中村楽器 京都・金吾楽器 岐阜・琴栄楽器 直接購読ご希望の方は日本音楽集団へお申し込み下さい。尚、現在三、四号は品切れ、一、二号は定価二〇〇円、五号から九号は三〇〇円、十号四〇〇円、送料は二冊まで二二〇円、四冊まで一六〇円。継続購読ご希望の方は友の会B会員(詳しくは本誌29ページ参照)になられるとお得です。

日本音楽集団のレコード (現在発売中のもののみ)

○現代物及び古典物

レコード・タイトル	収録曲名 (作曲者)	レコード会社/番号	定価(円)
野坂恵子・三木稔「二十絃の世界」	碓の曲・白樺・まぼろしの木・天如・佐保・竜田・軍謡詩集Ⅱ・ひなふり他	カメラータ/CMT 1015-8	10,000
錦木よせ子/長沢勝俊作品集	春三郎・尺八協奏曲・錦木よせ子・幾原による三つのパレード	RVC/JRZ 2577	2,200
めばえ/三木稔選集 vol. 1	ダンス・コンサルト・芽生え・舞手・夕影の詩・竜田の曲	カメラータ/CMT 1001	2,500
まゆだまのうた/長沢勝俊作品集	三絃協奏曲・笛と打楽器のための音楽・二つの田園詩・まゆだまのうた	RVC/JRZ 2574	2,200
萌春/長沢勝俊作品集	二つの舞曲・第四重奏曲・詩曲・萌春	RVC/JRZ 2558	2,200
人形風土記/子供のための組曲	組曲「人形風土記」・子供のための組曲(長沢勝俊)	RVC/JRZ 2523	2,200
雅(みやび)/PCM録音による	華やが(三木稔)・六段の調・みだれ・新八千代獅子	COL/WX 7510	2,500
三木稔作品集Ⅰ〜Ⅲ	Ⅰ—古代舞曲によるパラフレーズ・凸 Ⅱ—ソネット・軍謡詩集・四群のための形象 Ⅲ—序の曲・雅びのうた・天如・孤篁	COL/CZ 7003-5	各2,000
野坂恵子古典音楽集 (第一集—第五集)	一集—千鳥の曲・八段・碓 他 二集—八重衣・五段碓 他 三集—六段の調・春の曲・梓 四集—越後獅子・みだれ 他 五集—青柳・屋鳴・秋風の曲前奏	COL/CLS 5168, 5169 5199, 5211, 5245	各2,000
響/和楽器による現代日本の音楽	組曲「人形風土記」(長沢勝俊)・しがらみ第2(八村義夫)他	RVC/JRZ 2505-8	8,000

○解説物及び入門物

日本の楽器	日本の各楽器の代表的古典曲・他に現代曲の一部収録	RVC/JRZ 2520-1	4,400
日本の楽器入門	箏のなかま・尺八のなかま・三味線のなかま・太鼓のなかま	COL/ELS 3342-3	3,000
尺八の演奏法	尺八演奏法の基本練習他(宮田純八郎編著)	VIC/SJL 62	2,200
箏と尺八(初級篇)	新しい練習曲(1)(長沢勝俊編曲)	VIC/SJL 177	2,200
箏と尺八(中級篇)	新しい練習曲(2)(長沢勝俊編曲)	VIC/SJL 178	2,200

○編曲物他

響グリーン・スリプス	VIC/KVX1078	2,500	尺八・虚無僧の世界	COL/WX 7506	2,500
ピーターと狼	CBS 25AG 411	2,500	「箏」ヴィヴァルディ・四季	東芝/TA 60060	2,000
ラヴェル・ドビュッシー/二十絃による	COL/WX 7510	2,500	「箏」セバスチャン・バッハ	東芝/TA 72037	2,300
宮田純八/和洋音楽による日本のメロディ	VIC/SJL 99	2,200	「箏」モーツァルト	東芝/TA 72042	2,300
組曲「七ヶ伝説」/だだ	東芝/ETP 72324	2,300	I. スターン日本の調べ	CBS/25AS 42	2,500
尺八プロシデン・日本の詩情	COL/FZ 7087	2,000	花梨り/邦楽フォルクローレ	東芝/TA 72054	2,300
尺八ニューサウンド・日本民謡集	COL/FW7348-9	3,000			

○その他にカセット・テープもあります。

イージーリスニングの風

絶賛発売中!!

琴・グリーンスリーブズ

～ デジタル録音による二十絃 イギリス民謡集 ～

琴・イージーリスニングの新しいジャンルに積極的に取り組む、
邦楽界のエンターティナー野坂恵子による多彩な二十絃・イギリス民謡集



果樹園の向うに私の恋人が	船遊び
ロンドンデリーの歌	むずかる幼な子
ロンドン橋	機
グリーンスリーブズ	誰かと誰かが愛煙で
どもりの恋人たち	アニー・ローリー
水車屋のうた	埴生の宿
花を丘に集める	優雅な夏の日々
風の風	雲の光



●KXX-1078
●30cmステレオLP ¥2,500
(入場券代金にて収録)

(二十絃独奏) 野坂恵子 (編曲) 三木 稔

●お問合せ…ビクター音楽産業株式会社 〒150東京都渋谷区神宮前4-26-18(原宿ヒアビル) 宣伝部 電話3線 03(405)5151(代)

コロムビアの誇る現代音楽特別3選!



昭和55年度文化庁芸術祭参加作品

*現代邦楽を担う尺八奏者横山勝也の作品集初録音!

◆横山勝也の世界《三界輪転》

作品集(1)……三界輪転/接心
作品集(2)……二つの歌/理里有楽/吾句/魔術
本曲集(3)……息観/古伝樂龍/産安/魂落/鹿の連音/浮雲 他
☆横山勝也(尺八独奏) 他

▶OX-7193-5 (3枚組) ¥7,500(10月25日発売) EQM

まるでドビュッシー、ラヴェルが夢のために作曲したような

*二十絃箏アンサンブルによる幻想の世界

月の光/マ・メール・ロア

ドビュッシー:月の光/子供の領分
ラヴェル:マ・メール・ロア/亡き王女のためのパヴァーヌ
☆野坂恵子、二十絃箏エコー

▶OX-7155 ¥2,500(好評発売中) EQM

和楽器をつかい日本的感性と西洋の伝統との特異な融合をめざす
三木稔の代表作!

*シリーズ・現代日本の音楽1500

三木 稔:凸一三群の三曲と日本太鼓のための
協奏曲(1970)/古代舞曲によるパラフレーズ(1966)

☆日本音楽集団 ▶OW-7851 ¥1,500(好評発売中)



COLUMBIA RECORDS

出版案内

全音楽譜出版社
ZEN-ON MUSIC〒162 東京都新宿区東五軒町25
電話・東京(03)267-4321
振替・東京195092

現代邦楽ライブラリー

邦楽器による現代作品の粋を網羅する

●No.	●作曲家	●作品	●定価
1	三木 稔	四群のための形象	¥ 500
2	三木 稔	華 譚詩集	¥ 300
3	諸井 誠	〔対話五題〕二本の尺八のために	¥ 300
4	助川敏弥	邦楽器のための〔形象〕	¥ 300
5	間宮芳生	四面の華のための音楽 三面の華のための音楽	¥ 650
6	小山清茂	和楽器のための四重奏曲第2番 和楽器のための三重奏曲	¥ 650
7	長沢勝俊	尺八・華による〔萌春〕	¥ 400
8	長沢勝俊	華四重奏曲	¥ 600
9	清瀬保二	尺八三重奏曲	¥ 500
10	湯山 昭	三面の華によるカプリース	¥ 650
11	三木 稔	独奏尺八のための〔孤響〕 三本の尺八のための〔ソネット〕	¥ 500
12	間宮芳生	尺八のためのプレリュード1・2	¥ 500
13	山本邦山	尺八作品集1	¥1000
14	佐藤敏直	ディヴェルティメント	¥ 850
15	石桁真礼生	華のための組曲	¥ 500
16	三木 稔	二十絃華のための三つの作品 〔天如〕〔佐保の曲〕〔竜田の曲〕	¥ 800
17	広瀬量平	〔アキ〕二つの尺八のための 〔鶴林〕尺八独奏のための	¥ 700
18	清瀬保二	尺八と華五重奏曲 日本楽器のための四重奏曲	¥ 800
19	藤原 真	華のための〔たゆたい〕	¥ 500
20	石桁真礼生	華・鼓・箏による〔無依の咏〕	¥ 800
21	長沢勝俊	〔詩曲〕〔まゆだまのうた〕	¥ 500
22	三木 稔	〔夕影の詩〕〔華双重〕〔雅びのうた〕	¥ 700
23	小山清茂	〔赤土になる妹〕〔樹下の二人〕	¥ 700
24	松村禎三	〔詩曲一番〕〔詩曲二番〕	¥ 600
25	山本邦山	尺八作品集2	¥1500
26	清水 悠	邦楽作品集1	¥1500
27	山本邦山	尺八作品集3	¥1500
28	長沢勝俊	〔二つの田園詩〕	¥ 500
29	野田暉行	四重奏曲第1番	¥1000
30	佐藤敏直	〔片足鳥居の映像〕〔塙のいる風景〕〔灰色のデッサン〕	¥1000
31	藤原 直	〔求道A〕〔求道B〕	¥ 800
32	清水 悠	邦楽作品集2	¥1800